

台 遺 跡

県立学校施設整備事業(館林特別支援学校改築整備)に伴う
埋 蔵 文 化 財 発 掘 調 査 報 告 書

2019

群馬県教育委員会事務局管理課
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

台 遺 跡

県立学校施設整備事業(館林特別支援学校改築整備)に伴う
埋 蔵 文 化 財 発 掘 調 査 報 告 書

2019

群馬県教育委員会事務局管理課
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

序

群馬県教育委員会では平成18年度の教育基本法改正を受け、さまざまな教育施策を推進してまいりました。その一つに特別支援教育の強化・充実があり、5ヶ年計画を策定して学習環境の整備・充実に努めているところです。特別支援学校は県内各地に開設されていますが、在籍児童数増加や施設老朽化問題があり、現在これを解消するため施設の改修を推進しています。その一環として、館林特別支援学校の改築工事も計画されましたが、工事に先立つ試掘調査で工事対象地内にも貴重な遺跡があることが分かり、発掘調査が行われることになった次第であります。

このたび報告する台遺跡は、平成28年度館林特別支援学校改築事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査として群馬県教育委員会事務局管理課より委託を受け、当事業団が同年7月に発掘調査を実施したものです。

遺跡は周知の遺跡として台帳に記載され、中世の「赤岩道」に比定されている県道に面しております。発掘調査では古墳時代の竪穴建物や中・近世の遺構が発見され、貴重なデータとなりました。限られた範囲の発掘調査であり、遺跡の全貌は明らかではありませんが、館林地区の歴史を考えると、これが古代から近世に至る館林地区の歴史のひとつコマであることは間違いありません。今後、本報告書が郷土の歴史解明や教育の場で活用されることを願う次第です。

最後になりましたが、発掘調査から報告書の作成にいたるまで、群馬県教育委員会、館林市教育委員会、並びに、学校関係者、地元の皆様には多大なご指導、ご協力をいただきました。本報告書の上梓に際して、関係者の皆様には心から感謝を申し上げて、序といたします。

平成31年3月

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
理事長 中野三智男

例 言

1. 本書は、平成28年度館林特別支援学校改築事業に伴い発掘調査された、館林市上三林町に所在する台遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 遺跡の所在地は下記の通りである。
群馬県館林市上三林町580-1、581-1、581-2、582、583、585、588、621-1番地
3. 事業主体 群馬県教育委員会事務局管理課
4. 調査主体 公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
5. 発掘調査の期間と体制は、次の通りである。
調査期間 平成28年7月1日～平成28年7月31日
発掘担当者 専門調査役 藤巻幸男・間庭 稔
遺跡掘削請負工事 有限会社毛野考古学研究所
地上測量 技研コンサル株式会社
6. 整理事業の期間と体制は、次の通りである。
整理期間 平成30年10月1日～平成31年1月31日
(履行期間 平成30年8月1日～平成31年3月31日)
整理担当 専門調査役 岩崎泰一
遺物保存処理 専門員 板垣泰之、専門調査役 関 邦一
遺物洗浄・注記 社会福祉法人ゆずりは会
7. 本書作成の担当者は、次の通りである。
編 集 岩崎泰一 デジタル編集 主任調査研究員・資料統括 齊田智彦
遺物写真撮影 岩崎泰一(土師器)、資料2課長 津島秀章(石器・石製品)、
専門調査役 石坂 茂(縄文土器)、専門調査役 大西雅広(陶磁器)、板垣泰之(金属器)
執 筆 調査2課長 飯森康弘(本文：第4章1)、間庭 稔(本文：第1章第2・3節)、
藤巻幸男(本文：第2章第1節)、岩崎泰一(本文：上記以外)
津島秀章(遺物観察表：石器・石製品)
石坂 茂(遺物観察表：縄文土器)
大西雅広(遺物観察表：土師器・陶磁器)
板垣泰之(遺物観察表：金属器)
8. 出土石器類の石材同定は、飯島静男氏(群馬県地質研究会会員)に依頼した。
9. 発掘調査資料および出土遺物は、群馬県埋蔵文化財調査センターに保管してある。
10. 発掘調査および報告書作成に際しては下記の方々や機関にご協力・ご指導いただきました。記して感謝いたします。
群馬県教育委員会、館林市教育委員会、館林特別支援学校

凡 例

1. 本文中に使用した座標・方位は、すべて国家座標「世界測地系(測量成果2011 / 平面直角座標IX系)」である。また、調査区中央付近のX=24,320、Y=-31,260の真北方向角は東偏0°12'19.61"である。
2. グリッドは、遺構挿図中に+記号と数値を併せ座標値を表した。数値は、国家座標値X・Y値の下3桁を用いて表記した。
3. 発掘調査では混乱を避けるため、途中遺構の種別が判明した場合も当初の遺構番号を継続使用している。これを受け、整理作業では種別毎に遺構番号を付け直しているが、出土遺物注記の訂正が煩雑になるため、測量図成果品や写真データ等については調査中に付けた遺構番号を変更せず、そのままにしている。したがって、出土遺物や原図を検索する場合は、下記の新旧対照表により旧番号で検索することが必要になる。

(旧番号) (新番号)

20号土坑 → 1号井戸

23号土坑 → 2号井戸

84号土坑 → 3号井戸

99号土坑 → 4号井戸

95号土坑 → 1号火葬土坑

9号溝 → 1号平地建物

以下の土坑・ピットについては、整理段階で遺構から外し、欠番とした。

4・75・92号土坑、92号ピット

4. 遺構断面図に示した数値は、標高(単位：m)を表している。
5. 遺構図・遺物図の縮尺は、下記の通り遺構種毎に縮尺を統一した。同一の遺物図中に異なる縮尺の図が加わる場合は、必要に応じて該当する遺物番号に続き()内に縮尺を記した。
遺構図 竪穴建物1：60、カマド1：30、掘立柱建物跡1：60、井戸1：40、溝1：40・1：80、
 土坑1：40、ピット1：40
遺物図 甕1：4、杯・高杯1：3、土製品・陶磁器類1：2・1：3、縄文土器1：3、
 石畿1：2、石臼1：4、古銭・金属製品類1：2
6. 遺物写真は遺物図と概ね同一縮尺となるよう掲載した。
7. 遺構図内で使用したトーンおよびドットは次のことを示している。

焼土 ■■ 炭化物 ■■■■ カクラン ■■■■

土器 ● 金属 ■

8. 遺構の主軸方位・走行を記載する際は、座標北を基準として東に傾いた場合はN-○°-E、西に傾いた場合はN-○°-Wというように記した。
9. 本書で使用した地図は、以下の通りである。

国土地理院の電子地形図1：25,000「足利南部」「佐野」「妻沼」「館林」(平成30年8月7日調整)

国土地理院1：200,000「宇都宮」(平成18年発行)

館林市都市計画図1：2,500(昭和60年測量、平成31年3月複製申請認可済み)

目 次

序

例言

凡例

目次

挿図目次・表目次・写真目次

第1章 調査の経過と方法

- 第1節 調査に至る経過
- 第2節 発掘調査の経過
- 第3節 発掘調査の方法
- 第4節 整理の方法

第2章 遺跡の概要

- 第1節 遺跡の地理的環境
- 第2節 周辺遺跡
- 第3節 基本土層

第3章 検出された遺構と遺物

- 第1節 古墳時代
 - 1. 概要
 - 2. 竪穴建物
 - 3. 平地建物
 - 4. 土坑
- 第2節 中世および近世
 - 1. 概要
 - 2. 掘立柱建物
 - 3. 火葬土坑
 - 4. 井戸
 - 5. 溝
 - 6. 土坑
 - 7. ビット
- 第3節 包含層出土の遺物
 - 1. 旧石器時代
 - 2. 包含層出土遺物

第4章 調査の成果

- 第1節 中世関連遺構について
- 第2節 近世上三林村について

遺物観察表

土坑計測値一覧表

ビット計測値一覧表

非掲載遺物一覧表(陶磁器類)

写真図版

報告書抄録

挿図目次

第1図	遺跡位置図(国土地理院1/200,000地図用「宇都宮」平成18年発行を使用)	1
第2図	調査範囲図	2
第3図	調査区周辺地図(館林市役所発行1/2,500館林市都市計画図23、29 (昭和60年版)を複製使用)	3
第4図	館林市周辺の地形概念図(館林市史定通編1、図1-4を再トレース)	5
第5図	周辺遺跡(国土地理院の電子地図用1/25,000を使用)	7
第6図	遺跡の基本土壌図	9
第7図	遺構配置図(1)	10
第8図	遺構配置図(2)	11
第9図	古墳時代の遺構分布(建物検定プラン)	12
第10図	1号竪穴建物	13
第101図	1号竪穴建物出土遺物(1)	13
第1012図	1号竪穴建物出土遺物(2)	14
第1013図	2号竪穴建物(1)	15
第1014図	2号竪穴建物(2)と出土遺物	16
第1015図	3号竪穴建物と出土遺物	17
第1016図	4号竪穴建物と出土遺物	17
第1017図	1号平地建物	19
第1018図	19号土坑と出土遺物	19
第1019図	1号竪立柱建物	20
第20図	2号竪立柱建物(1)	21
第21図	2号竪立柱建物(2)	22
第22図	中・近世の遺構分布(火葬土坑・井戸)	23
第23図	1号火葬土坑	23
第24図	1～4号井戸と1～5号井戸出土遺物	24
第25図	中・近世の遺構分布(溝)	25
第26図	1～3号溝	26
第27図	1～3号溝出土遺物	27
第28図	4・5号溝と出土遺物	28
第29図	6・7・11号溝	29
第30図	14～16号溝と16号溝出土遺物	30
第31図	17・19号溝と19号溝出土遺物	31
第32図	18号溝と出土遺物	32
第33図	長方形土坑(1)	34
第34図	長方形土坑(2)	35
第35図	長方形土坑(3)	36
第36図	長方形土坑(4)	37
第37図	長方形土坑(5)	38
第38図	長方形土坑(6)	39
第39図	長方形土坑(7)	40
第40図	長方形土坑(8)	41
第41図	長方形土坑(9)	42
第42図	長方形土坑(10)	43
第43図	長方形土坑(11)	44
第44図	円形土坑・不整形土坑	45
第45図	土坑出土遺物(1)	46
第46図	土坑出土遺物(2)	47
第47図	土坑出土遺物(3)	48
第48図	ビット(1)	49
第49図	ビット(2)	50
第50図	ビット(3)	51
第51図	ビット(4)	52
第52図	ビット(5)	53
第53図	ビット(6)	54
第54図	ビット(7)	55
第55図	ビット出土遺物	55
第56図	白石郡調査区図	56
第57図	包含層出土遺物	56
第58図	朝霞原北遺跡における長方形土坑の配置状況	58
第59図	中・近世の配置状況	59
第60図	船形に削られた上三林材(一部加筆)	60
第61図	周辺開示された上三林材(上)と、上三林材の地盤(F)	61
第62図	1区15・18号溝と耕地環境	62

表目次

第1表	周辺遺跡一覧表	8
第2表	遺物検定表	65
第3表	土坑計測値一覧表	71
第4表	ビット計測値一覧表	74
第5表	非磁気遺物一覧表(陶磁器類)	78

写真目次

Pl. 1	1 遺跡遺跡(穴印が遺跡)
2	朝霞原区にある計測川川流路
3	下体泊用水(逆川合流地点、日本橋側)
4	屋敷が残る落合渡点(野田2村)
5	長良神社(下三地区)
Pl. 2	1 1区全景(東側)
2	1区全景(中央)
3	1区全景(西側)
4	2区(調査前の状況)
5	2区全景、南西から
Pl. 3	1 3区(調査前の状況)
2	3区全景、南東から
3	4区(調査前の状況)
4	4区全景、南東から
5	5区(調査前の状況)
6	5区全景、北西から
7	7区(調査前の状況)、南東から
8	埋設物の確認写真
Pl. 4	1 1号竪穴建物土層堆積状態、北から
2	同・オマド全景、南から
3	同・遺物出土状態(1)、南東から
4	同・遺物出土状態(2)、北から
5	2号竪穴建物全景、南西から
Pl. 5	1 2号竪穴建物土層堆積状態、北から
2	同・遺物出土状態(1)、南西から
3	同・遺物出土状態(2)、南西から
4	同・掘り方全景、南西から
5	4号竪穴建物全景、南東から
Pl. 6	1 4号竪穴建物土層堆積状態、南西から
2	同・遺物出土状態
3	1号平地建物(中央)と19号土坑(右土)、南西から
4	1号竪穴建物全景、北西から
5	19号土坑全景、北東から
Pl. 7	1 1号竪立柱建物全景、南から
2	2号竪立柱建物全景、西から
Pl. 8	1 1号火葬土坑全景、東から
2	同・掘り方全景、東から
3	同・井戸等出土状態、東から
4	同・通風孔弁化状態、東から
5	1号井戸全景、南から
6	2号井戸全景、南から
7	3号井戸全景、東から
8	4号井戸土層堆積状態、南から
Pl. 9	1 1～5号溝全景、南から
2	4・5号溝全景、南から
3	15号溝全景、東から
4	18号溝全景、東から
5	21・22号土坑全景、東から
6	24号土坑全景、東から
7	27号土坑全景、北から
Pl. 10	2 49号土坑全景、北から
3	60号土坑全景、南から
4	61号土坑全景、東から
5	64号土坑全景、南西から
6	70号土坑全景、西から
7	62号土坑全景、北から
8	72号土坑全景、北から
Pl. 11	1 1区中央西の土坑群、南から
2	1区中央東の土坑群(1)、南から
Pl. 12	1 1区中央東の土坑群(2)、南から
2	1区中央東の土坑群(3)、南西から
Pl. 13	1 55号土坑遺物出土状態(1)、北から
2	同・遺物出土状態(2)、西から
3	同・遺物出土状態(3)、東から
4	同・完壁状態、東から
5	同・土層堆積状態、南から
Pl. 14	1 105号土坑全景、東から
2	107号土坑全景、西から
3	56号土坑全景、東から
4	85号土坑全景、南から
5	14号土坑全景、南から
6	35号土坑全景、南から
7	5号土坑全景、東から
8	68号土坑全景、北から
Pl. 15	3 9号ビット全景、北から
2	51号ビット全景、北から
3	52号ビット全景、北から
4	63号ビット全景、北から
5	51号ビット土層堆積状態、南から
6	52号ビット土層堆積状態、南から
7	1区調査風景、東から
8	2区調査風景、南から
9	館林市教育長複製、南西から
10	館林特別支援学校教職員複製、西から
Pl. 16	1 1号竪穴建物出土遺物
Pl. 17	1～4号竪穴建物ほか出土遺物
Pl. 18	土坑・ビット等出土遺物

第1章 調査の経過と方法

になる旨を管理課あてに通知(平成27年10月20日付け)した。管理課では文化財保護課の指導を得て、館林市教育委員会文化振興課あてに必要な書類を提出(平成28年3月25日付け)した。

その後も、文化財保護課と管理課では調査実施に向け事業計画の変更等の調整を重ね、当初の事業地面積1,886㎡を998㎡に減じることで概ね合意が得られた。

文化財保護課と管理課の調整を受け、平成28年6月1日付けで管理課と公益財団法人群馬県埋蔵文化財事業団(以下、事業団)の間で発掘調査契約が結ばれ、平成28年7月、調査期間1月の予定で発掘調査が行われることとなった。

第2節 発掘調査の経過

契約締結を受け発掘調査の事前準備を開始した。事前の現地立会には学校事務局も加わり、調査中の安全確保を前提に調査することとなり、これに従い準備を進めた。また、立会では敷地内の埋設物が問題となり、これに伴い学校側から配管図等の提供を受けた。通常、古い埋設物は図示されていないことが多く、慎重を期して手掘り発掘を行い、安全を確認して掘削を進めることとした。

平成28年7月1日、発掘調査に着手した。各調査区とも既存施設の周辺にあることや、下水管等の埋設物もあることから、これを避け掘削範囲を決めた。また、2～7区には渡り廊下や駐輪場があり、これが撤去されるのは学校が夏季休業に入る7月の中旬以後になるということであったので、調査面積の広い1区(549㎡)の調査と並行して他の地点の調査を進めることとした。その他の地点(3～7区)については埋設物等もあることから、手掘り掘削して埋設物等の有無を確認してから重機掘削することとした。

旧石器調査については、上層の調査が終了したのち、対象地点を1区に限り当該期石器群の有無について確認した。

調査日誌抄

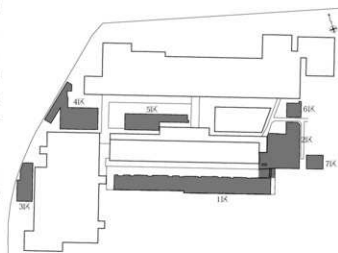
- 7月1日 調査開始(1・2区)
- 7月2日 重機掘削。安全フェンス上段の目隠し設置
- 7月6日 安全週間(役員視察)

- 7月12日 3・4区の調査開始
- 7月14日 駐輪場解体の都合で、7区の調査が最終週になることが確定。
- 7月15日 1学期終業式
- 7月20日 5区の調査開始(市教委視察)
- 7月21日 特別支援学校職員視察
- 7月25日 6・7区の調査開始
- 7月27日 調査終了、埋戻し作業、撤収作業
- 7月29日 調査終了に伴う引渡事務(学校事務局立会)

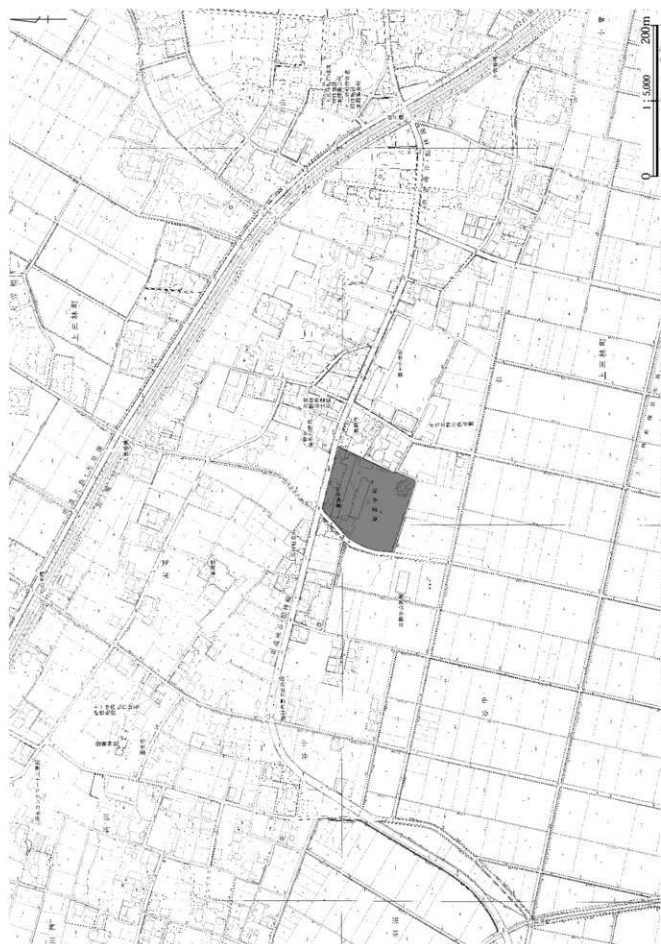
第3節 発掘調査の方法

調査区は校舎周辺の複数地点にあり、調査順に南校舎の南側調査区を1区、同東側調査区を2区として調査を開始、室内運動場(体育館)東の地点を3区、同北側の地点を4区・5区、南北校舎間の地点を6区、最東端の駐輪場の地点を7区として、基本的にはこの調査区順で調査を進めた。

各調査区とも水道管やガス管、高圧電線等の埋設物があり、マンホール・ハンドホールを現地確認したのち配管・配線図を参照し、まずは手掘り作業にてこれら埋設物の有無を確認してから重機掘削することとした。調査区内には使用中の下水管もあり、また、調査区に接して建造物があり、これを避け掘削せざるを得ず、調査範囲は限られることとなった。



第2図 調査範囲図



第3図 調査区周辺図(前林市役所発行1:2500前林市都市計画図23、29(昭和60年測図)を複製使用)

第2章 遺跡の概要

遺構確認は現表土下50cm程で、いわゆるローム漸移層の上面であった。重機掘削後、ジョレン精査して遺構確認をおこない、遺構調査を進めた。遺構調査は、土層観察用ベルトを残し移植ごてにて掘り下げ、遺構完掘後に個別遺構写真を撮影した。遺構測量については、業者委託して対応した。遺構番号については調査順に番号を付け、連番となっている。

グリッドについては、国家座標系IX系(世界測地系)を用い、必要に応じてXY座標の順に下3桁で表示した。

第4節 整理の方法

整理事業の実施に際しては、文化財保護課の調整を経て、群馬県教育委員会と公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団とで平成30年8月1日に整理事業の委託契約が交わされ、同年10月1日より当事業団で整理作業を開始した。

遺物整理は土器・石器・金属器類に分類し、それぞれ接合作業をおこない、遺構毎に掲載遺物を選び出した。

掲載遺物については必要に応じ石膏を入れたのちに写真撮影、図化作業を実施した。

遺物実測は長焦点実測用写真や三次元測定機を使い、これを実測素図として等倍の手書き実測図を作成した。そして、手書き実測図作成後は、これを掲載サイズの2倍に縮小してトレース図を作成した。こうして得られたトレース図をスキャニングし、報告書刊行に向けてデジタルデータ化した。

竪穴建物や土坑、溝から出土した金属製品については、当事業団で保存処理作業をおこない、サビ等で形状不明な金属器についてはX線写真により形状を確認したのち実測図を作成した。金属器についても土器・石器と同様に写真撮影、トレース作業をおこない、デジタルデータ化した。

遺構写真は発掘調査で撮影記録したもので、このなかから報告に必要な写真を選び、画像修正し報告書掲載用のデータとした。

これら遺構遺物のデジタルデータおよび本文文字原稿を編集、報告書印刷データとした。

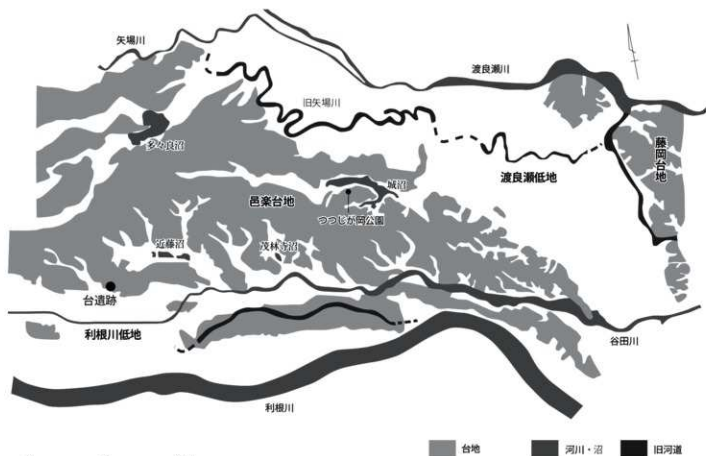
第2章 遺跡の概要

第1節 遺跡の地理的環境

本遺跡が所在する館林市は群馬県の南東部に位置し、市域北部が栃木県と接するほか、周辺には板倉町・邑楽町・明和町・千代田町が接している。市内で最も標高の高い地点は高根町大山神社付近(33.2m)だが、市域西部(標高25m)と市域東部(標高15m)では10mほどの高低差があり、西から東へ緩く傾斜している。館林市域の地形は邑楽台地と呼ばれる台地と、利根川・渡良瀬川流域に広がる低地部および微高地に大別することができる。その概要は、以下のとおりである。

旧市街地を載せる台地は、邑楽町から板倉町に広がる。地形的には平坦だが、成島町～高根町にかけて古砂丘が列状に見られるほか、台地内の浸食谷には多々良沼や近藤沼・城沼など大小沼地と湿地があり、これが大きな特徴となっている。利根川および渡良瀬川の低地に接する台地縁辺は変換点が見られないほどだが、台地を刻む低

地は比高差が明瞭で、邑楽町の鞍掛付近のそれは「鞍掛山脈」と呼ばれるほど立派な古砂丘が続いていたという。古砂丘は5万年前に形成されたとされる「埋没河畔砂丘」で、成島町から高根町に至る間にある。市街化されその形状を止めないものもあるが、多々良沼付近の地形図には標高25mのコンタが廻る地点が数ヶ所あり、地形図にも台地縁辺に列状に続く古砂丘が見取れる。台地内部の低地は湧水起源によるものであり、台地南側と北東側の浸食が激しい。南側の谷は谷田川筋(旧利根川)に流れ込み、その端部は河川氾濫等で塞がれ、これにより「近藤沼」「茂林寺沼」などの沼地が形成されたという。北東側に刻まれた谷の「多々良沼」や「城沼」も同じ理由で形成されたもので、沼の周辺は湿地となり、昭和30年度ころまで「ホリアゲタ」(掘上田)と呼ばれる水田が作られ、長く耕作されてきた。台地の南から利根川の間には、広大な低地帯が広がる。低地帯には微高地が点在、これが自然堤防であることは確実である。専門家の見解では、低地帯は厳密に言えば谷田川によるものというこ



第4図 館林市周辺の地形概念図(館林市史通史編1、図1-4を再トレース)

とであるが、古墳時代には現在の谷田川筋を、奈良時代には明和町の役場付近(明和の旧流路)を旧利根川が流れたとされる。古墳時代以後は利根川が変流するたびに水田化が行われたものと思われるが、この低地帯には台地が深く沈み込んでいとも指摘されている。

台地北東に広がる低地帯と微高地についても同様で、台地の地形発達(渡良瀬川(矢場川を含む)の変流に深く関係しているものと思われる。台地北東の崖線は判然としないように見えるが、城沼北の当郷町より東の台地の浸食が著しいように見える。こうした相違を的確に説明することはできないが、現象的に言えば当郷町より西は流路(旧矢場川)に近く、当郷町以東では流路までの距離があり、これにより土砂供給量の差が生じたことが原因しているのではないかと考えている。当地の微高地には矢場川流域に羽刈・小曾根・日向・木戸等の集落が、また渡良瀬川流域に早川田・足次・千塚・田谷・大鳥等の集落があり、いずれも河川流域に点在する自然堤防上に立地している。水田の開発時期が頃になるところであるが、当地では水田調査が行われておらず、その実態が不

明であることから、集落動向を明らかにすることで低地帯開発の理解が深まるだろうことを期待している。

本遺跡は館林市の南東、上三林580-1番地ほかにあり、邑楽町に近い市の南西部にある。地形的には邑楽台地の南縁に当たり、東西に延びる低平な台地に立地する。集落を載せる台地は平坦で東西に延び、台地北側には近藤川が谷を刻み、南側には旧利根川による広大な沖積低地が広がっている。遺跡北の低地を仔細に見ると、その谷頭は近藤沼から約1km西の旧赤堀村(現在の館林市赤堀)にあり、これに支谷が樹枝状に入り込んでいる。明治期の迅速測図には近藤沼周辺に「掘上田」が図示されているように、湿地が水田として利用されていた。これに対して、南側低地は旧利根川の離水後はじめて可耕地となり水田化された地区である。現在は整然と水田が区画整備されているが、以前は旧流路の痕跡が明確に残されていた。

上三林地区周辺には広域に水田が広がり、遠く屋敷林が見える。市街化が進み、屋敷林に囲まれた集落は姿を消してしましたが、いまなおそうした農村風景の面影が

遺跡周辺には残されている。上三林地区に隣接する野辺地区には、そうした屋敷林に囲まれた古い集落が残されている。

第2節 周辺遺跡

館林市域の遺跡分布は、低平な台地と沖積低地に分けて説明するのが分かりやすい。農耕集落は水田耕作に最も適した良い所から占地したとされるから、水田域の拡大は灌漑整備と並行して行われたはずで、弥生時代以後の遺跡分布は農業発達史的な観点で分析されなければならない。同様に、旧石器・縄文時代の遺跡分布は食糧資源の観点から分析されなければならないが、発掘調査では、食料採集地を遺構として確認できないため具体的指摘が難しく、勢い湧水等が立地条件として指摘できる程度だが、館林市域では多々良沼その他の沼地の形成が遺跡立地を考える際の指標になる。すなわち、多々良沼など沼地の形成時期等を踏まえた分析が重要になるということであり、縄文早期末にピークに達した縄文海進および海退に伴う諸現象(湿地形成、台地の浸食)、荒川扇状地形成に伴う利根川の流路変更など多様な環境変動要素が検討課題となる。現状では将来的な課題とせざるを得ず、ここでは時代毎に遺跡分布の概要を述べるだけに止めておきたい。

旧石器時代 市域には、旧石器遺跡10ヶ所がある。石器ブロック等を伴う遺跡は少なく、尖頭器類が単独で出土したものが多い。館林市史では多々良沼に続く古砂丘上や城沼など沼地周辺の台地に旧石器遺跡があるということであるが、今後旧石器遺跡が確認される可能性の高い地域が市域東部などに残されている。本遺跡に最も近い旧石器遺跡には北小袋遺跡(15)があり、近藤沼に続く開析谷に臨む台地上に立地する。山上輪遺跡(高根町)や水溜第2地点遺跡(26)は古砂丘上に残された旧石器遺跡であり、いずれも後期旧石器後半期の遺跡である。これまで前半期遺跡は確認できていないが、暗色帯が良好に堆積していることから、前半期遺跡は必ず存在するはずである。

縄文時代 市域には縄文遺跡43ヶ所があり、谷田川に流れ込む開析谷に面した台地上に大部分が集中する。縄文時代大別6区分における遺跡の増減傾向は県内縄文遺跡

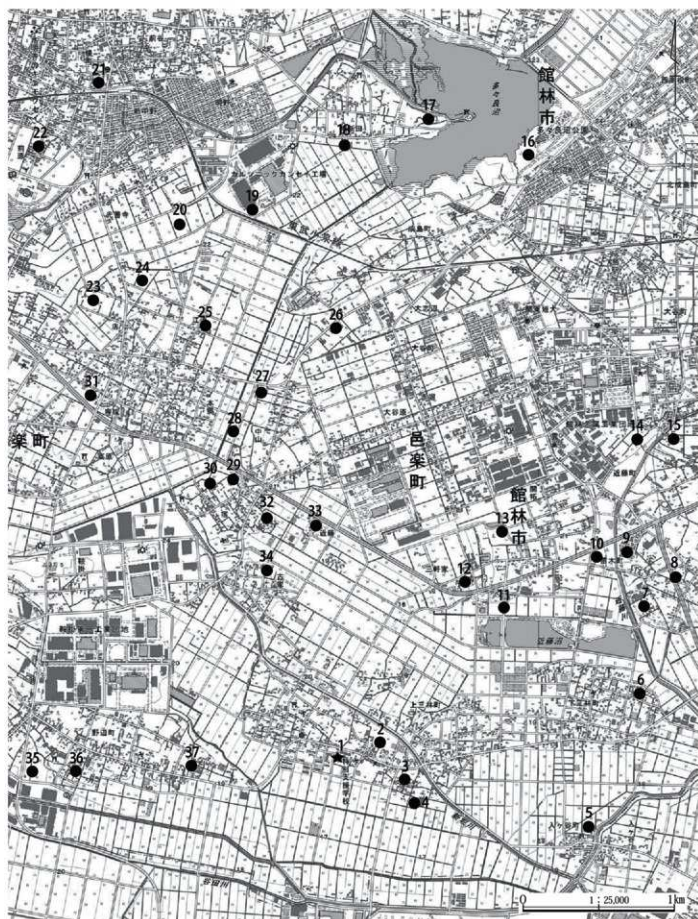
のそれと大差ないだろうが、大袋Ⅱ遺跡(花山町)では県内縄文遺跡では発見例の少ない早期の「好穴」が確認されている。早期に限れば県内山麓部の遺跡とは明らかに様相が異なり、どちらかと言えば南関東の様相に近い。縄文海進に伴う貝塚形成を含め地域特性として注意しておきたい。市域の縄文期集落は大袋Ⅱ遺跡(前期)や間堀Ⅰ遺跡(上赤生田町、中期)が城沼や茂林寺沼を望む台地上に立地する。市域には後期遺跡や晩期遺跡は少ないとされるが、多々良沼の下部には高根町阿野遺跡・屋敷前遺跡(以上阿野町)があり、遺跡は低地部を志向するようになることが指摘されている。邑楽台地北部の低地部は渡良瀬川の影響を受け、台地が深く埋没している可能性がある。遺跡が少ないのは、発掘されていないだけだと捉えるべきかもしれない。

本遺跡では前期土器片が数点出土しただけであるが、本遺跡周辺域には北近藤第一地点遺跡(10)、店遺跡(23)、店東遺跡(24)などの小規模遺跡が点在している。現状では大規模遺跡はないようである。

弥生時代 市域全域でも5遺跡と少ない。いずれも邑楽台地の縁辺にある遺跡だが、同じ邑楽台地上には大泉町の仙谷道祖遺跡や、板倉町の飯野辻遺跡ほかで中期中葉の壺類が出土している。現状で、中期段階から後期へ続く弥生期の遺跡はなく、当地で本格的な農耕社会が到来するのは後期後半で、道溝遺跡(赤生田町)があるのみである。

本遺跡周辺では、野辺町小林遺跡(36)や甲子遺跡(35)で後期後半の土器片が出土しているのみである。館林市周辺域は湿地環境が卓越する地域であるため、初期稲作農耕には適さずこのことが遺跡分布にも反映しているのかもしれない。

古墳時代 前期遺跡として、加法師遺跡(加法師町)、大島下悪途遺跡(大島町)、道溝遺跡(赤生田町)があり、いずれも市街地東に所在する。中期遺跡として、加法師遺跡、下悪戸遺跡が前代から継続、高根・外和田遺跡(高根町)、八方遺跡(阿野町)がある。後期遺跡は古墳分布と集落分布が重なる傾向にあり、市東部(谷田川流域)や市北部(矢馬川流域)の他、城沼周辺に後期古墳が集中する傾向がある。このほか上三林地区(市西部谷田川流域)には上三林古墳(2)があり、近接地区にも菅原神社古墳(5)がある。上三林地区の古墳は群集墳を形成すること



第5図 周辺道跡 国土地理院の電子地図1:25000「足利南部」「佐野」「妻沼」「館林」(平成30年8月7日調整)使用

第2章 遺跡の概要

第1表 周辺遺跡一覧表

No.	遺構名	所在地	時代	種別	備考	文献
1	台道跡	上三林町	古墳～中世	包蔵地	竪穴建物5軒、掘立柱建物2棟、土坑、井戸4基、溝18条、ピット	本報告書
2	上三林古墳	上三林町字台	古墳	墳墓	遺構なし 陶磁器片、土器片	館林市教育委員会「館林市内遺跡発掘調査報告書」2008 館林市埋蔵文化財発掘調査報告書第45集
3	三林城跡	上三林町	中世	城館跡	伝承地、土塁・館塚有	館林市教育委員会「館林市の遺跡」1987 館林市埋蔵文化財発掘調査報告書第18集
4	小曾根道跡	上三林町	平安	包蔵地		館林市教育委員会「館林市の遺跡」1987 館林市埋蔵文化財発掘調査報告書第18集
5	菅原神社古墳	入ヶ谷町	古墳	墳墓		館林市教育委員会「館林市の遺跡」1987 館林市埋蔵文化財発掘調査報告書第18集
6	扇荷前道跡	下三林町	平安	包蔵地		館林市教育委員会「館林市の遺跡」1987 館林市埋蔵文化財発掘調査報告書第18集
7	笹木道跡	青柳町苗木・西苗木	古墳・平安	包蔵地		館林市教育委員会「館林市の遺跡」1987 館林市埋蔵文化財発掘調査報告書第18集
8	萩原道跡	苗木町字中島	縄文・平安	散布地	土坑4基、不明遺構3基、溝(近世、陶磁器)	館林市教育委員会「館林市内遺跡発掘調査報告書」2011 館林市埋蔵文化財発掘調査報告書第48集
9	苗木西道跡	青柳町西苗木	平安	包蔵地		館林市教育委員会「館林市の遺跡」1987 館林市埋蔵文化財発掘調査報告書第18集
10	北近藤第一地点道跡	苗木町字北近藤	縄文・古墳・平安	集落跡	竪穴建物(古墳時代88軒、平安時代1軒)、土坑、掘立柱建物2棟、円形周溝遺構1基、掘治遺構1基、井戸4基	館林市教育委員会「館林市内遺跡発掘調査報告書」1998、2003、2005 館林市埋蔵文化財発掘調査報告書第20集・第32集・第38集
11	南近藤道跡	苗木町字南近藤	古墳・平安	集落跡	竪穴建物4軒、井戸1基、土坑1基	館林市教育委員会「館林市内遺跡発掘調査報告書」1988 館林市埋蔵文化財発掘調査報告書第20集
12	三軒屋道跡	赤堀町字三軒屋	古墳	包蔵地	土師器	邑楽町教育委員会「邑楽町の遺跡」1989
13	北近藤第二地点道跡	苗木町	時代不明	散布地	土坑1基、溝2条、建物跡遺構1ヶ所、井戸1基	館林市教育委員会「館林市内遺跡発掘調査報告書」2014 館林市埋蔵文化財発掘調査報告書第33集
14	伝石工門道跡	近藤町字伝石工門	平安	集落跡	竪穴建物(古墳中期)平安土師器	館林市教育委員会「館林市内遺跡発掘調査報告書」1999 館林市埋蔵文化財発掘調査報告書第33集
15	北小袋道跡	近藤町字北小袋	旧石器・縄文	散布地・包蔵地	土坑(6基、時代不明)5基、石器・縄文土器、土師器	館林市教育委員会「館林市内遺跡発掘調査報告書」2008、2016、2017 館林市埋蔵文化財発掘調査報告書第45集・第54集・第55集
16	松沼町道跡	松沼町	縄文～中世	生産址	炭灰塗9基 縄文土器片、磨石	館林市教育委員会「松沼町遺跡発掘調査報告書」2005 館林市埋蔵文化財発掘調査報告書第41集
17	鴛小城	鴛新田町字内小城	戦国	城館跡	弥生式土器	邑楽町教育委員会「邑楽町の遺跡」1988
18	内之原道跡	鴛新田町字内ノ原	古墳	包蔵地	竪穴建物土師器	邑楽町教育委員会「邑楽町の遺跡」1988
19	子々五道跡	鴛新田町字内ノ原	縄文	包蔵地	縄文早期燃赤土器片	邑楽町教育委員会「邑楽町の遺跡」1988
20	早師前道跡	光善寺字早師	縄文	包蔵地	縄文刺片、土師器	邑楽町教育委員会「邑楽町の遺跡」1988
21	横町古墳	中野町字横町	古墳	古墳	竹岸家墓地	邑楽町教育委員会「邑楽町の遺跡」1988
22	前原道跡	中野町字前原	縄文・古墳	包蔵地	縄文中期土器片、土師、刺片、石田川式土器	邑楽町教育委員会「邑楽町の遺跡」1988
23	店道跡	狸塚町字店	縄文	包蔵地	縄文早期、前期土器片、土師器、板硝片	邑楽町教育委員会「邑楽町の遺跡」1989
24	店東道跡	狸塚町字店	縄文・古墳	包蔵地	縄文中期土器片、土師器	邑楽町教育委員会「邑楽町の遺跡」1989
25	江原道跡	狸塚町字江原	古墳	包蔵地	土師器	邑楽町教育委員会「邑楽町の遺跡」1989
26	水溜第二地点道跡	成島町	旧石器	散布地	ナイフ形石器・尖頭器他	館林市史編さん委員会「館林の原始古墳・中世」2015 館林市史通史編1
27	中山道跡	赤堀町字中山	縄文・古墳	包蔵地	大部分削平されている	邑楽町教育委員会「邑楽町の遺跡」1989
28	日車道跡	赤堀町字日車	古墳	包蔵地	土師器	邑楽町教育委員会「邑楽町の遺跡」1989
29	宿道跡	赤堀町字宿・中山	古墳	包蔵地	土師器	邑楽町教育委員会「邑楽町の遺跡」1989
30	高原寺前道跡	狸塚町字高原	古墳・平安	包蔵地	土師器	邑楽町教育委員会「邑楽町の遺跡」1989
31	高原道跡	狸塚町字高原	縄文・古墳	包蔵地	土師器	邑楽町教育委員会「邑楽町の遺跡」1989
32	宿東道跡	赤堀町字宿	古墳	包蔵地	土師器	邑楽町教育委員会「邑楽町の遺跡」1989
33	近藤道跡	赤堀町字近藤	縄文・古墳	包蔵地	土師器	邑楽町教育委員会「邑楽町の遺跡」1989
34	古家道跡	赤堀町字古家	縄文	包蔵地	土師器	邑楽町教育委員会「邑楽町の遺跡」1989
35	申子道跡	野辺町字申子	縄文・古墳・平安	散布地	土坑1基 土師器残片	館林市教育委員会「館林市内遺跡発掘調査報告書」2000 館林市埋蔵文化財発掘調査報告書第36集
36	小林道跡	野辺町字申子	古墳・奈良	包蔵地	竪穴建物(古墳時代1軒)	館林市教育委員会「館林市内遺跡発掘調査報告書」2008 館林市埋蔵文化財発掘調査報告書第45集
37	東山道跡	野辺町	平安	包蔵地		館林市教育委員会「館林市の遺跡」1987 館林市埋蔵文化財発掘調査報告書第18集

はなさそうであるが、古墳と集落は近接分布するものとみられる。

平安時代 館林市史には、谷田川流域の平安期遺跡は小規模(竪穴建物数棟からなる)であり、大規模集落は影を潜め、北近藤第一地点遺跡(10)でさえもわずか1棟しか確認されないという。一方、市の遺跡分布調査では台地を刻む谷筋に点々と平安期遺跡が分布することが確認されており、狭小な耕地に制約された結果、小規模遺跡が点在することになったものと理解されている。

平安期遺跡の分布傾向を説明するには台地を部分的に切り取り、遺跡分布を図示するだけでは充分ではなく、より広域に図示すべきなのはあらためて指摘するまでもない。第5図は近藤沼周辺(南北6km・東西4km)の遺跡分布を図示したものであるが、近藤川の上流域には古墳時代の包蔵地(旧赤堀村の集落)があるのに対して、近藤沼の周辺域には北近藤第一地点遺跡(10)、南近藤遺跡(11)、苗木遺跡(7)、苗木西遺跡(9)があり、古墳時代から続く北近藤第一地点遺跡以外は平安期遺跡であり、いずれも小規模遺跡である。こうした傾向は全域で見られるというのが、平安期遺跡分布の実態である。

中・近世 調査済み遺跡の出土遺物を見直した結果、35遺跡で中世遺物が確認されたという。館林市史には中世城館跡20ヶ所、集落遺跡9ヶ所が掲載されている。近世遺跡については館林城関連の調査成果が掲載されているが、近世村落の調査例は掲載されていないようである。本遺跡周辺には、中世城館跡として三林城(3)や惣小城(17)があり、中世館林城に継ぐ規模の青柳城(青柳町)がある。集落遺跡として北近藤第二地点遺跡(13)や萩原遺跡(8)がある。

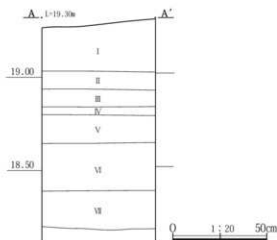
文献では、当地域には古代郷里4郷(「長柄郷」「池田郷」「八田郷」「疋田郷」)が知られ、続いて平安末の荘園成立(佐貫荘ほか)があり、荘園の形骸化とともに地域再編が進み、ついには戦国期に突入することが知られている。考古学的には、農耕集落や水田(生産域)の実態を明らかにするのが課題ということになるだろうが、土器編年網確立と用水網整備の実態把握などが重要になるものと思われる。

第3節 基本土層

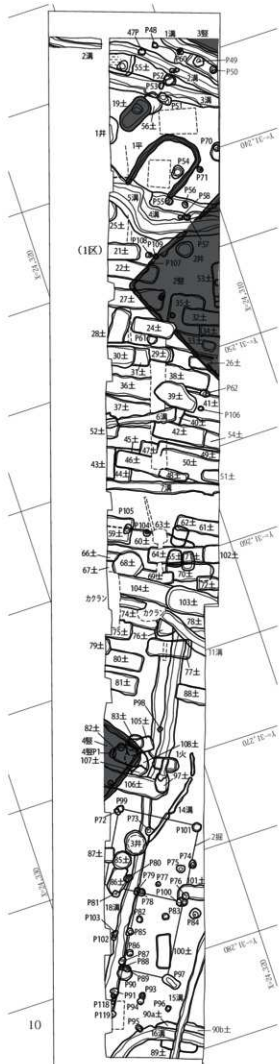
本遺跡の調査地点は校舎周辺に7ヶ所(1~7区)があり、各地点で基本土層が作成されているが、ほぼ同様な堆積状況を示してした。

- I層 山砂
- II層 旧表土
- III層 灰褐色土(炭化物少量を含む。転圧され締まる。)
- IV層 くすんだ灰褐色土(炭化物少量を含む)
- V層 暗褐色土(炭化物少量を含む)
- VI層 よこれた褐色土(いわゆるローム漸移層に相当)
- VII層 黄色ローム

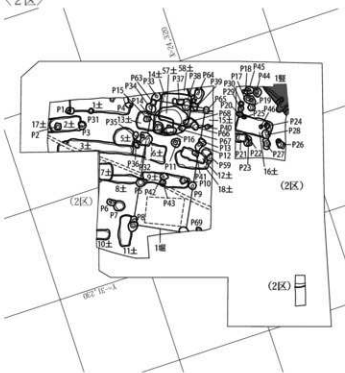
I層はグラウンド整備に伴い砂を入れ替えたもので、II層以下は転圧され、硬化している。III層は灰色を帯びる。炭化物を含んでいるが、多分に河川氾濫に起源する氾濫堆積物である可能性が高い。IV・V層は同質だが、やや色調差がある。VI層は「ローム漸移層」に相当する土壌で、古墳時代から中近世の遺構確認面であった。VII層以下はローム層に移行する。通常、東毛域では中部ローム以上のローム層が堆積、芭菜台地上に立地する本遺跡も同様の堆積状況にあることが確かだが水位が高く、ローム層の堆積状況についてはその全貌が把握できていない。



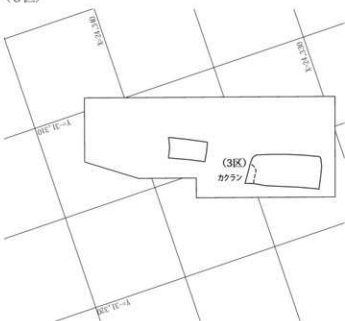
第6図 遺跡の基本土層図



<2区>

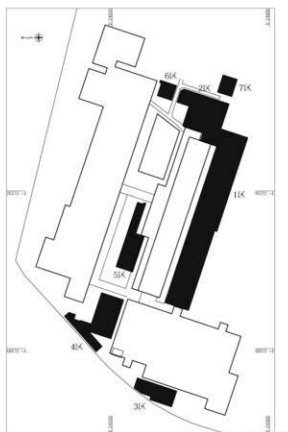
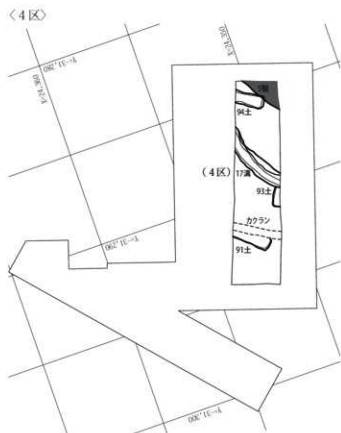
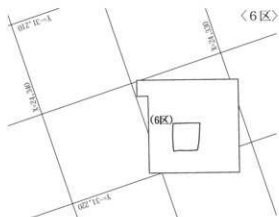
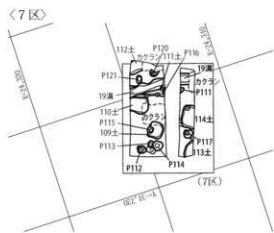


<3区>

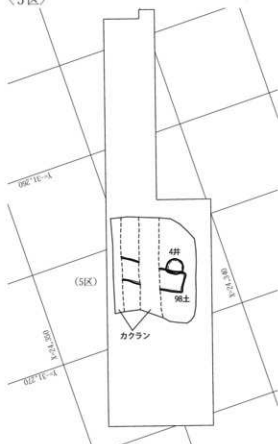


0 1:200 5m

第7図 遺構配置図(1)



<5区> 1/1200



0 1:200 5m

第8図 遺構配置図(2)

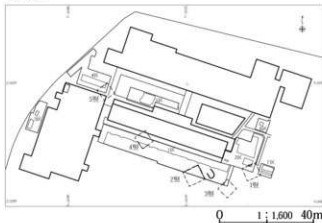
第3章 検出された遺構と遺物

本遺跡は東西に長い台地上にあり、台地南側に広がる低地部に臨んで立地する。市の遺跡分布図には県道85号線(熊谷館林線)北までが台遺跡として括られており、これに隣接して東側に上三林古墳があるというのが、本遺跡を含む周辺遺跡分布の概要である。調査地点は既設建物の周辺7地点に及び、うち3地点(1・2・4区)から古墳時代後期の竪穴建物が確認されたほか、各地点から中・近世の遺構が多数確認されている。

第1節 古墳時代

1. 概要

本遺跡では古墳時代後期の竪穴建物5棟が確認されたほか、竪穴建物と軸を同じくする溝(平地建物周溝)1条、土坑1基が確認されている。敷地内の試掘調査のみ行われた地点でも竪穴建物数棟が確認されており、また、平成21年度に行われた県立高等特別支援学校用地内試掘調査でも同時期の竪穴建物2棟が確認されていることから、集落域は県道南の遺跡全域に散漫に広がるものと思われる。



第9図 古墳時代の遺構分布(建物推定プラン)

2. 竪穴建物

竪穴建物は5棟がある。1区に3棟が、2・4区に各1棟があり、それぞれ重複することなく確認されている。いずれも6世紀代の竪穴建物と見られる。出土遺物には

平安期土器片も散見されるだけであるが、市域の平安期集落については点在傾向が著しく、調査対象地外の台地縁辺に単独分布する可能性も否定できない。

1号竪穴建物(第10～12区、PL. 4・16・17)

位置 2区(X=315-Y=-222) 主軸方位 N-35°-W

形状 略方形と推定

規模 北壁側(1.95m) 重複 なし

埋没土 炭化物を含む黒色土で埋没

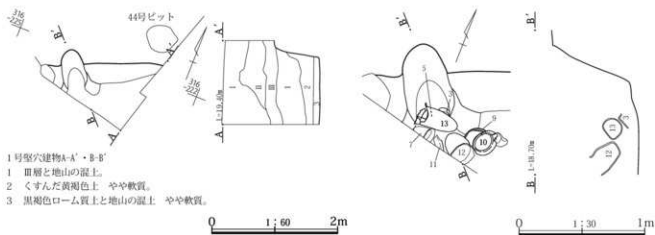
カマド 北壁に構築されていた。燃焼部を竪穴内に持ち、煙道は急な傾斜で立ち上がる。カマドの規模は確認長0.77mで、燃焼部長0.47mを測る。焚口幅は左袖が調査区外に伸びているが、0.60mほど見られる。高杯(第11図5)が逆位に出土、支脚として使用されていた。杯部には混じり気のない灰が詰まり、調査所見にもあるように、カマド内には厚く灰層が形成されていたものとみられる。出水が激しく、袖構造や細かな遺物の出土状況についての記録が残されていないが、カマドはローム土を貼付け構築されていた。

柱穴 未確認

遺物の出土状況 カマド内および周辺から甕8個体・高杯1個体・杯3個体、覆土中から鉢1個体が出土した。いずれも崩落したカマド構築材より下位に出土しており、カマド芯材として使われた可能性や、カマドに据付け使われた可能性などがあるが、逆位や連結状態で出土したものがなくカマド芯材としての可能性については否定的にならざるを得ない。器壁外面が被熱剥落したものが5個体あり、据付け甕としても数が多過ぎる。

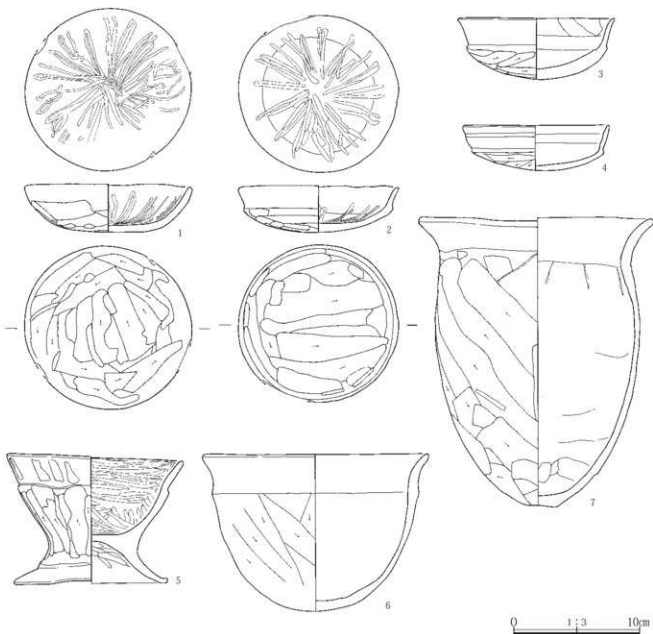
一般的に、カマドは建物廃絶時に破壊されることが通例で、本建物のカマドも破壊されたのは確実だが、単に甕を掛けたままカマドを破壊したということではないように思える。カマド脇に置かれていた甕類が同時に破壊されたという可能性も想定しておきたい。

所見 出土遺物からみて、6世紀後半の竪穴建物と見られる。出水が激しく調査区も狭小で、遺物の出土状態を確認図化できるような状況にはなく、掘り方の調査もできていない。高杯は燃焼部に逆位に伏され、長甕を脚

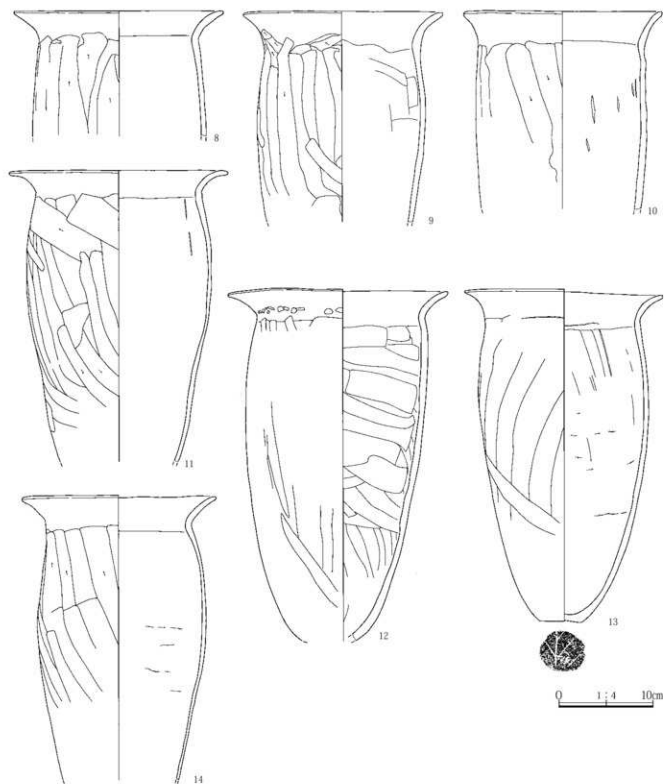


- 1 壙穴建物A-A'・B-B'
- 1 Ⅲ層と地山の混土。
- 2 くすんだ黄褐色土 やや軟質。
- 3 黒褐色ローム質土と地山の混土 やや軟質。

第10図 1号壙穴建物



第11図 1号壙穴建物出土遺物(1)



第12図 1号竪穴建物出土遺物(2)

部で受けたものと見られる。杯部内部に充填された灰を半載したところ、焼土・炭化物等を含まない純粋な灰であることが判明した。

2号竪穴建物(第13・14図、PL. 4・5・17)

位置 1区(X=309-Y=-242) 主軸方位 不明

形状 略方形

規模 北壁側(6.9m)・東壁側(6.8m)

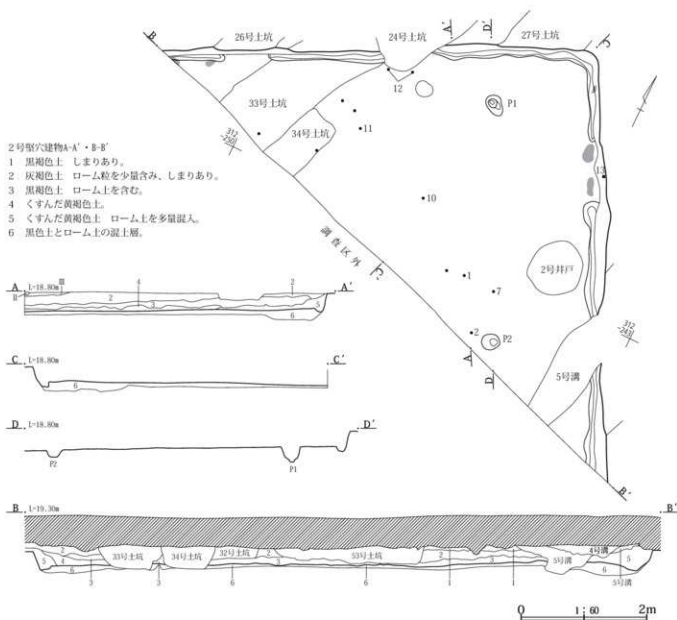
重複 23・24・26・27・32~34号土坑、4・5号溝と重複

埋没土 ローム土を含む黒色土で埋没

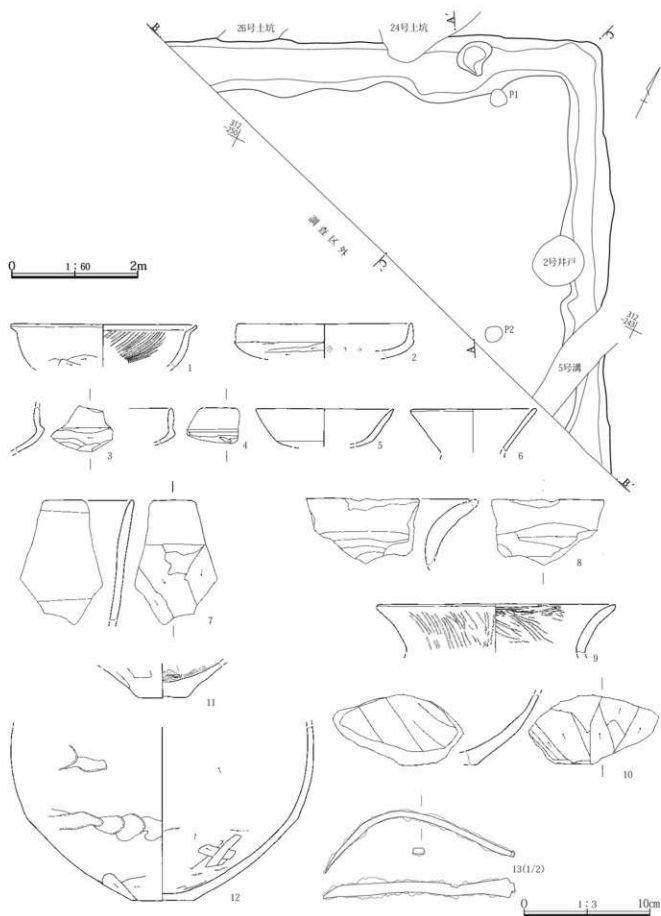
カマド 未確認

柱穴 2ヶ所で柱穴を確認した。P1(長径34cm・短径24cm・深さ25cm)は床面精査段階で、P2(長径30cm・深さ12cm)は掘り方調査の段階で確認されたものである。P1が壁際に寄り過ぎることや、一辺7m規模の建物の柱穴としては浅過ぎるように見える。コーナー対角線上に柱穴が位置するのが通例だが、いずれの柱穴も対角線上から外れている。

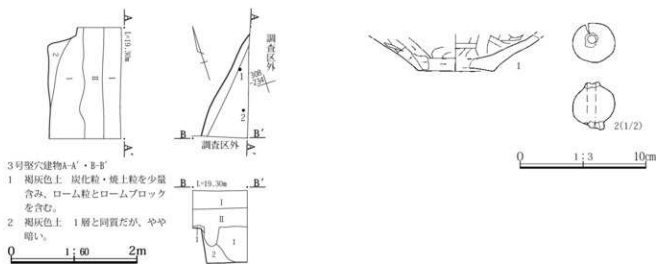
壁際溝 北壁および東壁に確認され、幅8~18cm、深さ2~9cmを測る。途中、壁際溝は途切れる部分があり、



第13図 2号竪穴建物(1)



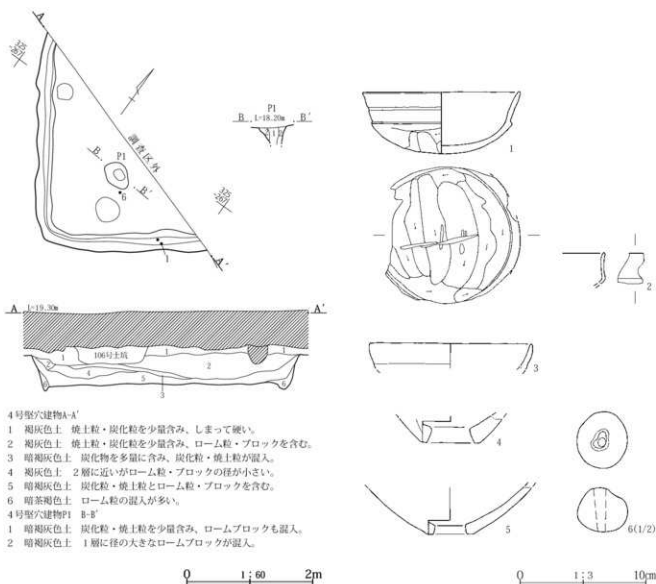
第14図 2号竪穴建物(2)と出土遺物



3号竪穴建物A-A'・B-B'

- 1 褐灰色土 炭化粒・焼土粒を少量含み、ローム粒とロームブロックを含む。
- 2 褐灰色土 1層と同質だが、やや暗い。

第15図 3号竪穴建物と出土遺物



4号竪穴建物A-A'

- 1 褐灰色土 焼土粒・炭化粒を少量含み、しまって硬い。
 - 2 褐灰色土 焼土粒・炭化粒を少量含み、ローム粒・ブロックを含む。
 - 3 暗褐色土 炭化物を多量に含み、炭化粒・焼土粒が混入。
 - 4 褐灰色土 2層に近いがローム粒・ブロックの径が小さい。
 - 5 暗褐色土 炭化粒・焼土粒とローム粒・ブロックを含む。
 - 6 暗茶褐色土 ローム粒の混入が多い。
- 4号竪穴建物B-B'
- 1 暗褐色土 炭化粒・焼土粒を少量含み、ロームブロックも混入。
 - 2 暗褐色土 1層に径の大きなロームブロックが混入。

第16図 4号竪穴建物と出土遺物

第3章 検出された遺構と遺物

北壁で70cm・東壁で94cmの間隔を空ける。

掘り方 壁際の幅1m弱を周溝状に掘り下げる。中央部を掘り残すタイプ。

遺物の出土状況 杯5・埴1・鉢1・壺1・甕4個体の他、鉄製品1が出土した。鉄製品(第14図13)は本建物の出土遺物として扱われているが、その出土位置は109号ピットに重なり、出土標高もピット底面より高い位置で出土していることから、後世の鉄製品が混入したものであろうと考えている。内斜口縁の杯(第14図1)以外、いずれも小片で覆土中の出土である。

所見 出土土器からみて6世紀前半の竪穴建物とすることができる。内斜口縁の杯は古手で、これに模倣杯が伴出した。甕は長胴甕でなく、胴部が大きく張るタイプである。

3号竪穴建物(第15図、PL.17)

位置 2区(X=307-Y=-234) **主軸方位** 不明

形状 略方形と推定

規模 北壁側(1.78m)・南壁側(2.58m)

重複 なし

埋没土 少量の焼土粒・炭化物を含む灰褐色土で埋没

カマド 未確認 **柱穴** 未確認

遺物の出土状況 甕1・玉型土鍾1が出土した。いずれも床面から30cmほど浮いた状態で出土している。

所見 出土遺物からみて、6世紀後半の竪穴建物と見られる。大部分が調査区の外に広がるため詳細は明らかでないが、建物の軸方向は1・2号建物に比べ若干だが西に振れるものとみられる。

4号竪穴建物(第16図、PL.5・6・17)

位置 2区(X=322-Y=-266) **主軸方位** 不明

形状 略方形と推定 **規模** 西壁側(3.25m)

重複 82・83・105・106・108号土坑に重複

埋没土 炭化物を含む黒色土を挟み、ローム土を多量に含む灰暗褐色土で埋没する。

カマド 未確認 **柱穴** 建物南西で柱穴を確認した。P1は建物対角線上にあり、長径47cm・短径35cm・深さ24cmを測る。

遺物の出土状況 杯3個体・甕2個体の他、玉型土鍾1が出土している。6点中4点は覆土中の出土で、残る2点も床面から20cmほど浮いた状態で出土した。

所見 出土遺物からみて、6世紀後半の竪穴建物と見

られる。埋土にはローム土が多量に含まれることから、人為的埋土と見られる。柱穴は浅く、柱を支えるには十分でないように思われるが、水位が高く柱穴底面まで完掘できていない可能性がある。

5号竪穴建物(第8図)

位置 4区(X=348-Y=-284) **主軸方位** 不明

形状 略方形と推定 **規模** 北壁側(2.48m)

重複 94号土坑に重複

所見 4区南東隅にある。遺構を平面確認したのち掘り下げたところ、出水に伴う壁崩壊があり、また、調査区境に下水管等が埋設され、調査区の拡張も難しく途中調査を断念した。このため、土層図の作成等はできず、平面プランのみ図示できるだけである。出土遺物は得られていないが、調査所見にも古墳時の竪穴建物だろうとする所見があり、覆土や建物の軸方向から古墳時代後期の竪穴建物と判断した。

3. 平地建物

平地建物は1棟が確認されている。発掘時に9号溝とされたものがそれであるが、整理作業を進めるなかで遺構の主体を占める中・近世遺構とは明らかに軸方向が異なり、むしろその軸方向は古墳時代竪穴建物の軸方向に一致することから、確認を得るまでには至っていないが、平地建物として認定した次第である。平地建物とした遺構は2号竪穴建物の北1.5mにあり、建物西を溝(中世末から近世初頭)に切られた状態で確認されている。竪穴建物の周堤幅を考慮してなお、平地建物を建てるだけの空間は確保できたものと考えている。

1号平地建物(第17図、PL.6)

位置 1区(X=310-Y=-238) **主軸方位** N-34°-W

形状 略長方形と推定

規模 長軸(3.48m)・短軸(2.12m)

壁際溝 幅20~35cm・深さ4~20cm(平均13.5cm)を測る。溝内の柱穴は見られない。

重複 4・5号溝に重複

埋没土 炭化物・焼土粒を含む褐灰色土で埋没する。

遺物の出土状況 覆土中より土器小片5点が出土した。

所見 調査段階で9号溝としたものであるが、遺構の軸方向が中・近世遺構のそれとは明らかに異なり、古墳

時代竪穴建物と同軸であることや遺構覆土の遺物に中・近世遺物がないことから、古墳時代遺構として認定した。建物は建物西側を4・5号溝に切られているため、遺構規模は明らかではないが、壁際溝が全周するとして、最大でも長軸5mは超えないものと見られる。壁際溝が全周するタイプの平地建物で、長方形を呈する竪穴建物としては中程度の大きさとなろう。

4. 土坑

土坑1基を確認している。調査所見として、古代の墓坑ではないかとする所見が残されていたため、整理作業を進め出土遺物を検討したところ、古墳時代後期の高杯脚部(第18図1)であることが判明、加えて遺構の軸方向も古墳時代竪穴建物や平地建物の軸方向と概ね一致したことから、土坑として認定したものである。

なお、土坑番号についてはデジタル写真や遺物注記に混乱が生じないように、当初の番号を変えず用いることとした。

19号土坑(第18図、PL. 6)

位置 1区(X=311-Y=-236) 長軸方位 N-35°-W

形状 略隅丸長方形

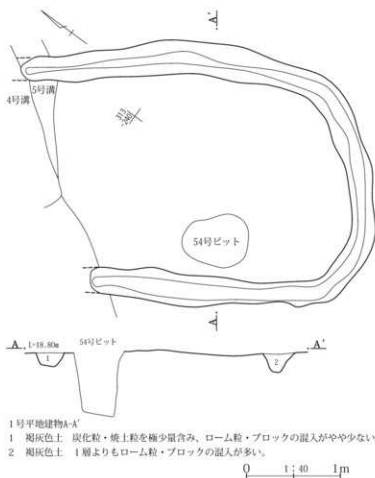
規模 長軸(1.96m)・短軸(1.06m)・深さ0.28m

重複 56号土坑と重複

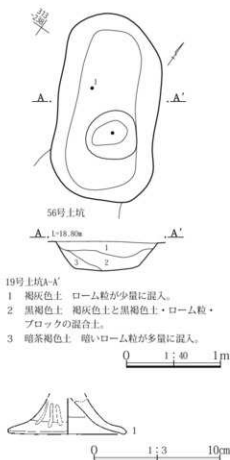
埋没土 ローム粒子を含む黒褐色土と褐灰色土の混土で埋める。人為的埋没土の可能性はある。

遺物の出土状況 覆土上層より高杯脚部ほか1点が出土した。

所見 出土遺物や土坑の軸方向からみて、竪穴建物・平地建物と同時期の土坑と考えた。土坑は円形土坑(56号)と重複関係にあり、その新旧関係が問題となる。現地では最初19号土坑を掘り上げ、次いで56号土坑を調査しているが、新旧関係を示すデータが得られておらず、縄文時代土坑等も確認されていないことから、新旧逆に調査してしまっている可能性も否定できない。坑底には浅いピット状の窪み(径25cm・深さ10cm前後)がある。覆土中より高杯脚部(第18図1)が出土した。



第17図 1号平地建物

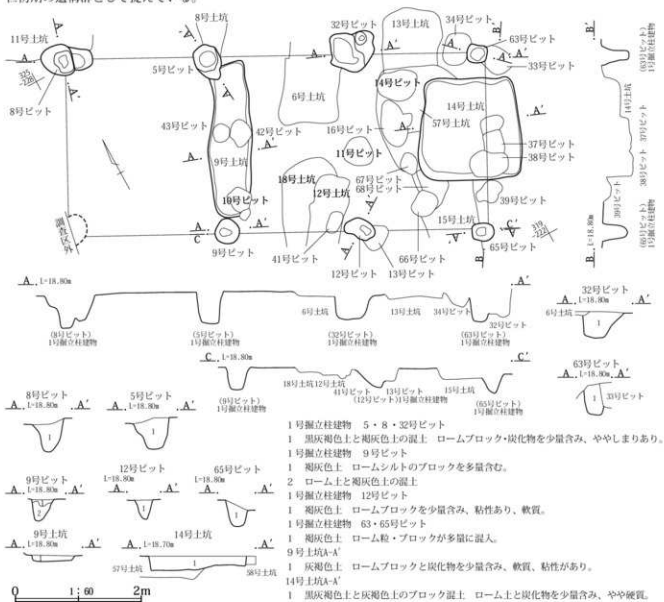
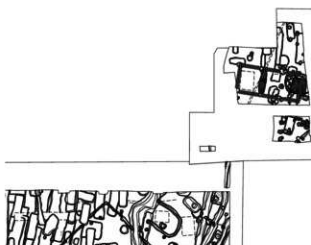


第18図 19号土坑と出土遺物

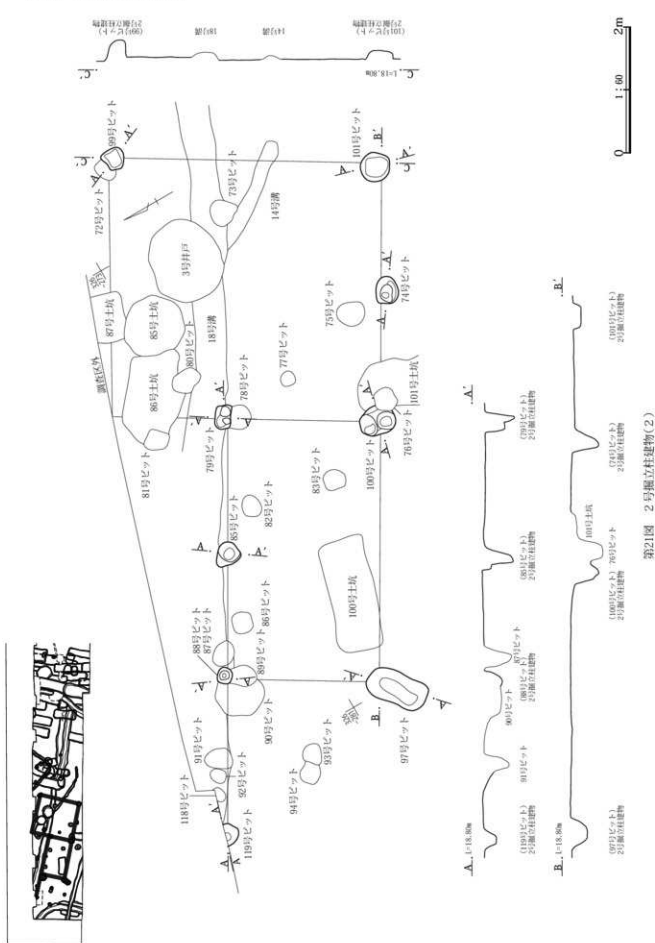
第2節 中世および近世

1. 概要

中・近世の遺構は、3区を除く各調査区で確認されている。確認された遺構には掘立柱建物2棟・火葬土坑1基・井戸4基・溝14条・土坑108基・ビット122基があり、1・2区の遺構密度が濃い。遺跡地は中世「佐貫荘」の荘域にあり、出土遺物にも「建武三年」（1336年）銘の板碑があるように、大半は中世関連の遺構ではないかと想定されていたが、出土遺物は16～17世紀のもの多数を占めることが判明、現状では中世末から近世初期の遺構群として捉えている。



第19図 1号掘立柱建物



第21圖 2号掘立柱建物(2)

3. 火葬土坑

1基が確認されている。土坑中央に通風機能を高めたとされる浅い溝が取り付くタイプで、やや小型の部類に属す。檜崎(事業団『研究紀要』25、2007年)によるタイプⅡの焼成土坑で、その時点で県内の火葬土坑は170基があるとされた。タイプⅡの平均サイズは長軸1.19m・短軸0.68mで、本遺跡のそれは平均よりひと回り大きいサイズとなる。出土物がなく、土坑の構築時期を明らかにすることはできないが、一般に火葬する風習が広まるのは中世以後とされていることから、中世遺構として捉えることとした。

1号火葬土坑(第22・23図、PL. 8)

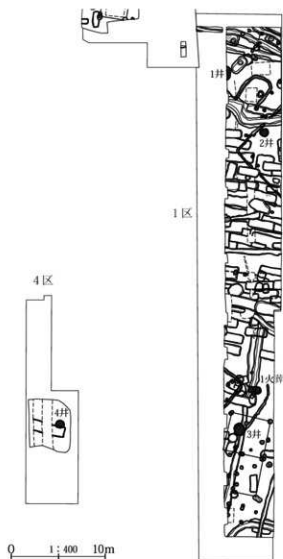
位置 2区(X=321—Y=269) 長軸方位 N-24°-E

形状 長方形

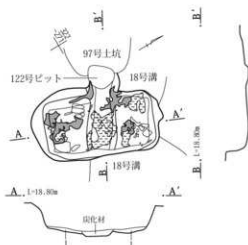
規模 長軸1.40m・短軸0.76m、突出部：長軸0.97m・短軸0.33m

重複 97号土坑、18号溝と重複する。

所見 土坑壁面は被熱して赤化、とりわけ通風溝に連結する部分の赤化が著しい。覆土下層より骨片が大量に出土しているが、火葬骨は大部分が拾い出されており、人骨部位が分かるものはない。出土物がなく、遺構の構築時期を明らかにすることはできないが、掘立柱建物や溝(18号)の主軸と軸方向を同じくしており、これが手掛かりになるかもしれない。



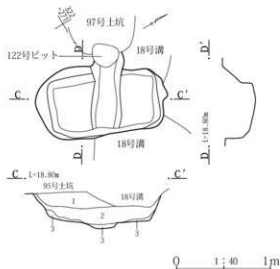
第22図 中・近世の遺構分布(火葬土坑・井戸)



1号火葬土坑(A-A'・C-C')

- 1 褐色土 炭化物・焼土粒を多量に含み、ロームブロックの混入、骨片もあり。
- 2 暗褐色土 炭化物・焼土粒・骨片混入。
- 3 暗褐色土 炭化物・焼土粒・骨片を多量に混入。

第23図 1号火葬土坑



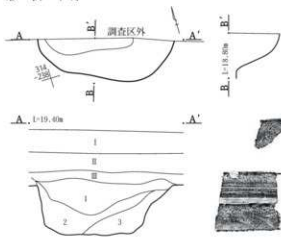
4. 井戸

4基が確認されている。遺構を確認したのち、通例に従い掘り下げていったが、出水が激しく、いずれも完掘できていない。

1号井戸(第22・24図、PL. 8)

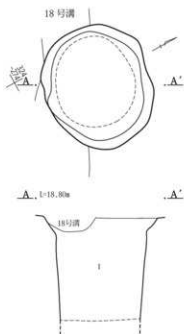
位置 1区(X=313-Y=236) 長軸方位 N-73°-E

形状 不明



1号井戸A-A'

- 1 褐色土 ローム粒を少量、焼土粒を極少量含む。
- 2 褐色土 ローム粒・ブロックを含む。
- 3 黄褐色土 ローム粒・ブロックを多量に混入。



3号井戸A-A'

- 1 褐色土 炭化粒・焼土粒を極少量含み、ローム粒(小形)あり。

規模 長軸(1.44m)・短軸(0.46m)・深さ(0.53m)

重複 重複なし

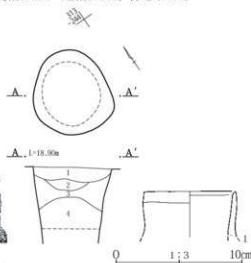
所見 遺構は調査区に延び、形状等は不明。覆土中から3点が出土しており、うち2点(第24図1・2)を図示した。素掘り井戸と見られる。

2号井戸(第22・24図、PL. 8)

位置 1区(X=311-Y=241) 長軸方位 N-35°-W

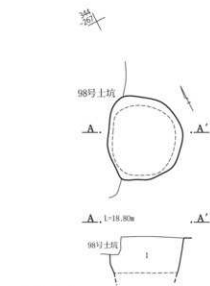
形状 円形

規模 長軸0.89m・短軸0.84m・深さ(0.7m)



2号井戸A-A'

- 1 褐色土 ローム粒と炭化粒・焼土粒を含む。
- 2 褐色土 炭化粒・焼土粒を極少量、ローム粒を多量に含む。
- 3 黒褐色土 褐色土を团状に含む。
- 4 褐色土 ローム粒と炭化粒を極少量含む。



4号井戸A-A'

- 1 暗灰褐色土 地山の黄色土ブロック・炭化物を少量含み、ややしまりあり。



第24図 1～4号井戸と1・2号井戸出土遺物

重複 2号竪穴建物を切る。

所見 出水が激しく、途中調査を断念した。「あぐり」は確認できていないが、遺跡地は沖積地に近く、深さ2m内外で井戸としての機能は果せたものとする。土師器片20点が出土したのみで、遺構を次期決定できるような遺物は出土していない。

3号井戸(第22・24図、PL. 8)

位置 1区(X=324-Y=-272) **長軸方位** N-90°

形状 円形

規模 長軸1.28m・短軸1.13m、深さ(1.16m)

重複 2号掘立柱建物・18号溝に重複する。18号溝に切られる。

所見 出水が激しく、途中調査を断念した。2号井戸同様、「あぐり」は確認できていないが、それよりやや大型で掘削深度は高い可能性が高い。土師器片数点が出土したのみで、時期決定できるような遺物はない。

4号井戸(第22・24図、PL. 8)

位置 5区(X=342-Y=-266) **長軸方位** N-25°-E

形状 略円形

規模 長軸0.87m・短軸(0.79m)、深さ(0.45m)

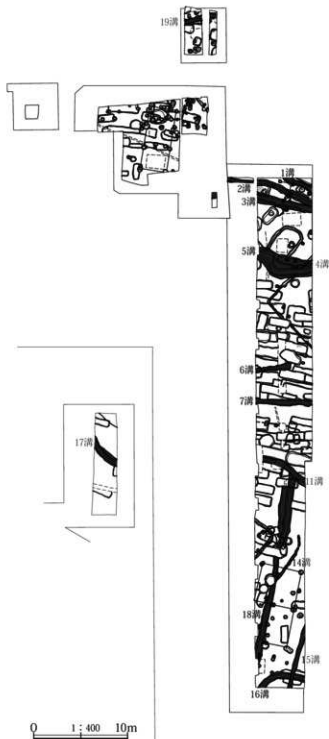
重複 98号土坑に切られる。

所見 出水が激しく、途中調査を断念した。上場は開き気味で、井戸上方は漏斗状に開いたものと見られる。出土遺物は得られておらず時期決定できないが、形態的には近世井戸の枠内でとらえることができるだろう。

5. 溝

14条の溝が確認されている。うち、12条の溝が1区に、残る2条が4・7区にある。溝の走行は南北軸よりやや東に振れたものが主体を占める。

東西軸に走る溝2条は溝の上場間3.6mほどで、公園に重ね合わせたところ、公園境界には重ならないがある程度公園を反映したものではないかという可能性が浮上したことから、南北軸の溝についても公園境界と重なるか検討してみた。公園境界に一致する溝は1ヶ所のみ確認されたのみであり、直接その関係性について結論することはできないが、次項で取上げる土坑主軸に合致しており、溝・土坑・公園境界(地境)の関係性は明らかで、溝の一部には地境溝としての役割を果たしたものがあつたことは間違いなさだろう。



第25図 中・近世の遺構分布(溝)

1～3号溝は、1区東端にある。いずれも断面形は皿状を呈し、溝幅も同サイズである。溝3条は北へ延びるものとみられたが、3条とも2区では確認されていない。2・3号溝については掘削範囲を外れたものとみられるが、1号溝については攪乱され消滅したが、途中走行を変えたか、いずれかであろう。2・3号溝は新旧関係があり、掘り直された可能性が高い。

第3章 検出された遺構と遺物

同様に、4・5号溝も新旧関係がある。4号溝は浅く、部分的に5号溝を壊しているが、新旧関係を踏まえれば5号溝を掘り返し4号溝としたものとみられる。5号溝は途中クランクしている。何か障害物があり、これを逃げようとしたのであろうが、具体的には分からない。溝の断面形状は皿状を呈す。

7号溝は1区の中程にある。溝の走行は土坑長軸の振れ幅より小さく、また、重複関係もあることから、土坑群と7号溝の構造性には否定的にならざるを得ないが、土坑群の境界付近にあることは変わらない。これも地境溝とするのが妥当と考えている。

11号溝も5号溝ほどでないが、弱クランクしているように見える。溝をクランクさせることの意味は分からないが、両溝間の距離は20m(11間)ほどである。また、1区西の16号溝とも等距離にあり、注意しておきたい。

14・15・18号溝は東西方向に走り、皿状の断面形状を呈す。15・18号溝は幅2間を置いて並走しており、道の両サイドに掘られた溝の可能性を考えてみたが、近世の

街道は3～6尺(1間)程度であり、幅2間の街道を想定するのは難しい状況にある。11号溝は18号溝と重複しており、新旧関係について記録がなく明らかでないが、18号溝も掘り直されているように見える。

14号溝については、他の溝とは走行が大きく異なり、溝幅も狭く浅く、その性格について明らかにすることができなかった。

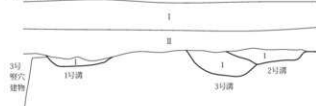
A, L=19.30m



B, L=18.80m



C, L=19.30m



1号溝B-B'・C-C'

1 褐灰色土 ローム粒・炭化物を少量含む。

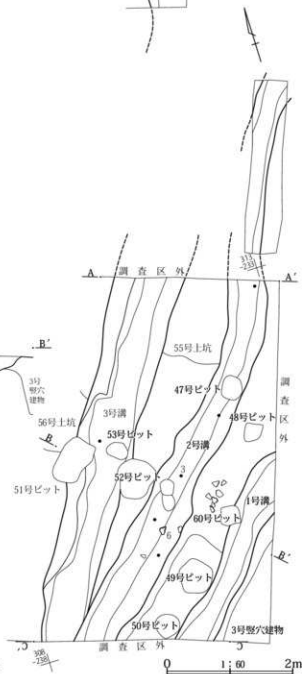
2号溝A-A'～C-C'

1 褐灰色土 ローム粒・炭化粒・焼土粒を少量含む。

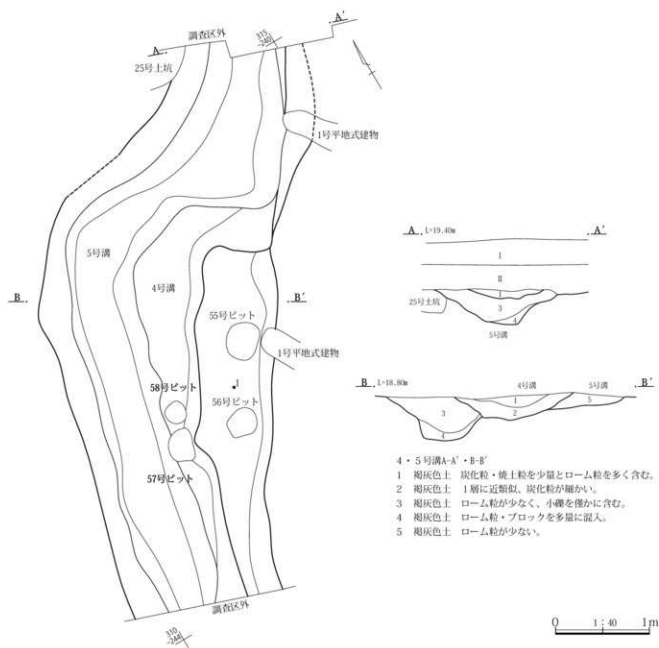
3号溝A-A'～C-C'

1 褐灰色土 ローム粒・炭化粒・焼土粒を少量含む、2号溝よりローム粒の混入が少ない。

0 1:40 1m



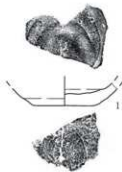
第26図 1～3号溝



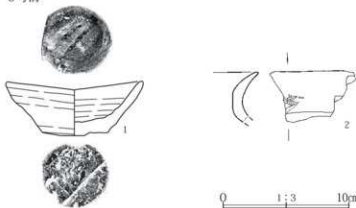
4・5号溝A'-A'・B-B'

- 1 褐灰色土 炭化粒・焼土粒を少量とローム粒を多く含む。
- 2 褐灰色土 1層に近類似、炭化粒が細かい。
- 3 褐灰色土 ローム粒が少なく、小礫を僅かに含む。
- 4 褐灰色土 ローム粒・ブロックを多量に混入。
- 5 褐灰色土 ローム粒が少ない。

4号溝

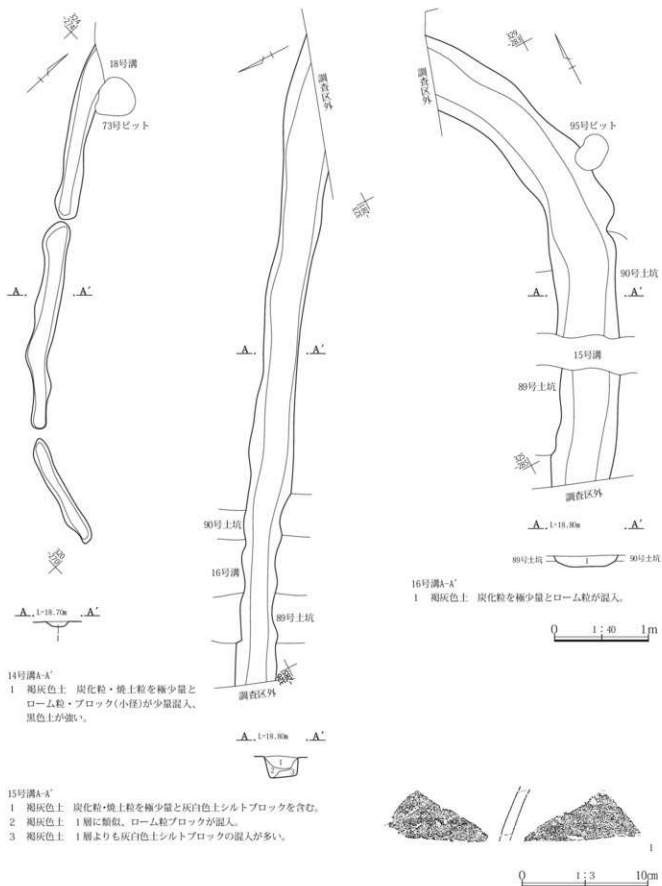


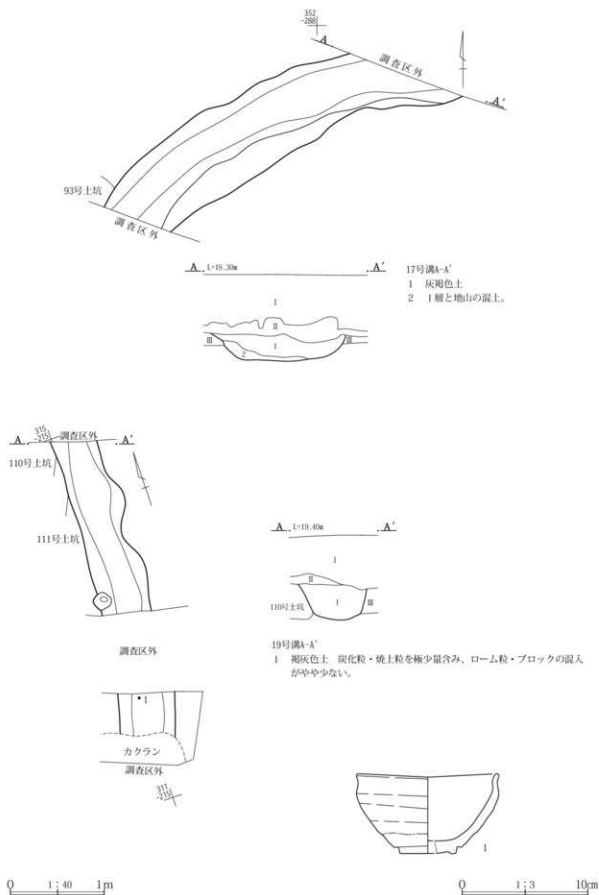
5号溝



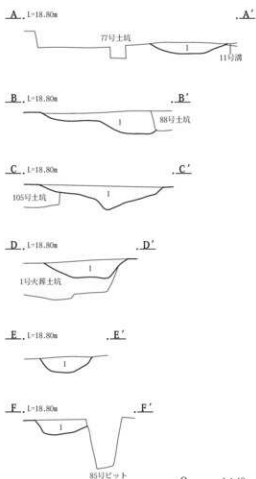
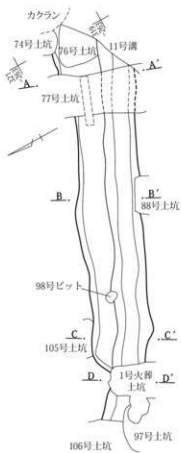
第28図 4・5号溝と出土遺物

第3章 検出された遺構と遺物



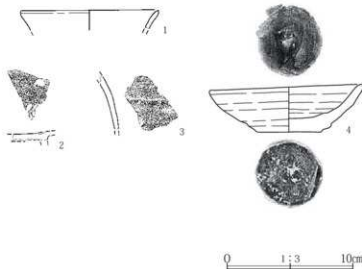
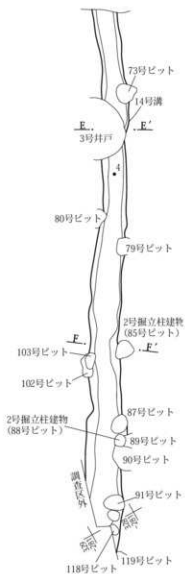


第31図 17・19号溝と19号溝出土遺物



18号溝A-A'~F-F'

1 褐色土 炭化粒・焼土粒を極少量含み、灰白色シルトがブロック状にローム粒も少量混入。



第32図 18号溝と出土遺物

6. 土坑(第33~47図、PL. 9~14・17・18)

108基(1区76基、2区20基、4区4基、7区6基)の土坑が確認されている。3・6区を除く各区で確認されているが、調査区が狭く土坑の全貌が判明しているものが少ないため、土坑の形態的特徴を踏まえた細かな分類は困難であった。ここでは、下記の分類に従い概括的に説明していきたい。

なお、土坑出土の遺物は少なく、近世土坑と見られる長方形土坑から古墳時代の杯・高杯類・土鍾なども出土したほか、底部を回転糸切りした土師器皿などもあり、さまざまである。

- I類：長方形を呈する土坑。大中小3群(1m以下、1~2m、2m以上)に大別も可能で、各分類群には幅広のものと幅の狭いものがある。完掘できていない土坑が多く、細分せず一括することとした。
- II類：略方形を呈するもの。通常サイズの土坑に比べ短軸幅が約2倍になるものがある。14・35号土坑など。
- III類：円形状を呈するもの。径1m前後のものが主体を占める。
- IV類：その他の不整形土坑を一括した。
- V類：部分的確認に止まり、本来的形状が不明なものを一括した。17・55・58・112・113号土坑など。

I類の土坑

I類の土坑は、88基がある。土坑は校舎南(1区)や東(2区)に濃く分布している。土坑は溝やピットと重複するほか土坑間の重複もあり、調査区外に延びる土坑も多い。1区では最も多く土坑が確認されているが、7号溝西の空白域を挟んでその両側に長方形土坑が集中する。これ以外の地点では、長方形土坑が重複することはほとんどなくなるが、各集中域では同軸方向の長方形土坑が激しく重複するほか、少数だがこれに直交する土坑もある。調査区が狭く断定できないが、長方形土坑(I類)には以下の傾向が指摘できよう。

調査区からみて、長軸長が最大で6m近い土坑が確認されていていはずだが、現状で3m前後の土坑が主体を占める。完掘土坑に限れば、長方形土坑は長軸長0.75~1.25m、1.50~2.00m、2.25~2.75mの3群からなる。土坑各

群の短軸長は0.9m前後に集中、ここに明らかな有意性がある。類例を挙げるとすれば、渋川市白井北中道Ⅲ遺跡や吹屋伊勢森遺跡の「耕作坑」に同じ傾向が読み取れる。上記2遺跡では土坑長軸長が10mを超えるものまでであるが、短軸長に限れば0.7~0.9mに収まり、ここでも短軸長に有意性が窺える。渋川地区遺跡ではこれを耕作坑としているが、それは耕作坑が地割に規定されるよう確認されているからである。本遺跡では土坑の機能を決するようなデータは得られていないが、地割に重なる溝があり、渋川地域の耕作坑に類する可能性は高い。

本遺跡の土坑出土遺物には時期決定できるようなものはないが、概ね16~17世紀と見られるかわかけ類が出土している。土坑底面が近接する例も多く、なかにはほとんど底面が区別できないものもあることからみて、累積的に土坑群が形成されたものと考えている。短軸長が0.5~0.7mとなる長方形土坑については細分して捉えることも検討してみたが、軸方向(20~30度)の振れ具合や土坑深度に差がなく、そのまま長方形土坑として捉えた。これに対して、長軸長が1m弱の土坑は軸方向が多様であり、これとは別に捉えるべきかもしれない。

なお、本類の9号土坑については細型長方形土坑と呼ぶべきものだが、軸方向が2号掘立柱建物と同様であることから、下記2類土坑(14号土坑)とともに同建物跡の図に併せて図示しておいた。

II類の土坑

II類の土坑は2基があり、いずれも略方形に近い平面形状を呈していた。上述したように、14号土坑については2号掘立柱建物と軸方向が重なることから、建物関連施設となることも否定できないため、1号掘立柱建物跡(第19図)に併せて図示した。II類土坑の構築時期や機能を示すデータはなく、その性格等は明らかでない。35号土坑についても同様である。

III類の土坑

III類の土坑は9基があり、特に集中するような傾向はない。土坑は1m前後のものが主体だが、これに倍する程度の土坑(57・68号)もあり、多様である。本類土坑はI類の土坑に切られるようであるが、新旧関係は判然としないものが多く、なかには古墳時代土坑と重複するものがあり、このことについて若干検討しておきたい。まず19号土坑だが、これについては古代の土器が出土、墓

坑ではないかとする所見が記されていた。19号土坑の調査終了後、56号土坑が調査されており、この調査順に従えば、56号土坑は古代以前の土坑ということになるが、19号土坑出土土器については6世紀代のものであり、土坑の軸方向も同時期の竪穴建物等の軸方向に整合的であり、古墳時代土坑として理解することに違和感はないだろうと考える。一方、これと切り合う56号土坑にも柑の口縁部破片が出土している。新旧関係について異議を唱えるだけのデータはないが、古墳時代の土坑とされるものは意外に少なく、遺構として一般的存在か疑問に思う。近世長方形土坑には例外なく土師器片が出土しており、帰属時期決定については慎重でありたい。

IV類の土坑

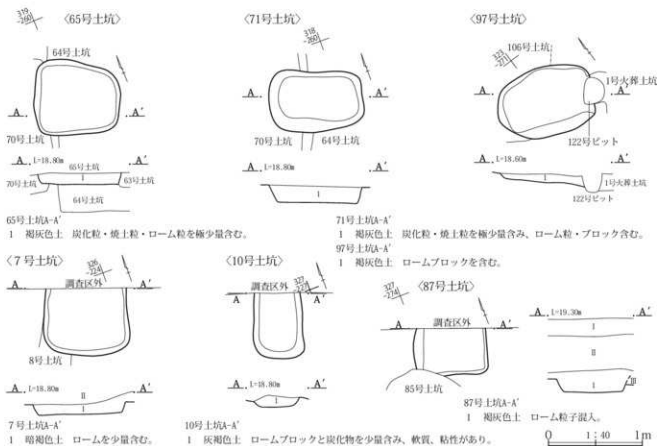
IV類の土坑は、計3基がある。1区39号土坑はI類の土坑集中域にある。形状は直線的部分がある一方、突出気味になる部分もあり、形状を一言で表現することは難しい。遺構の重複が激しく、土坑が重複している可能性も否定できず、本来的な土坑形状については捉え切れていないように思える。1区76号土坑についても溝に重複

しており、土坑の本来的形状は捉え切れていない。土層断面では、1mほどの土坑として溝を切り構築されている。7区112号土坑は、調査区北東隅にある。土坑は部分的な確認に止まり西壁のみ確認されただけである。土坑の軸方向は近接する19号溝の軸方向に規制されるように見える。

V類の土坑

V類の土坑は、計5基がある。いずれも部分的な調査に止まることで、その形状が明らかにできないため形態不明としたものである。

「建武三年」の紀年銘が刻まれた板碑や石臼が出土した55号土坑も全体の形状が分からずV類土坑としたが、短辺のみ残存した形状から方形土坑に分類されるかもしれない。その他の土坑についても皆目分類できないものもあるが、分類できそうなものもあり、これらについて分類することも考えてみたが、分類の有効性が見えず、敢えてここでは分類せず形態不明の土坑とした。



第33図 長方形土坑(1)

<93号土坑>



93号土坑A-A'

1 くすんだ灰褐色土 炭化物を少量含む。

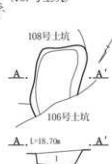
107号土坑A-A'

1 褐灰色土 炭化粒・焼土粒を極少量とローム粒・ブロック(小径)が少量混入。

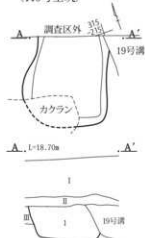
110号土坑A-A'

1 褐灰色土 炭化粒・焼土粒を極少量含む、ローム粒・ブロックも下部に多い。

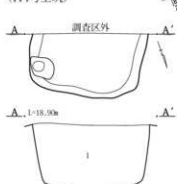
<107号土坑>



<110号土坑>



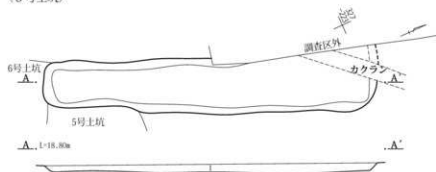
<114号土坑>



114号土坑A-A'

1 褐灰色土 ロームブロックを多量に含み、炭化粒を極少量含む、黄褐色土が強い。

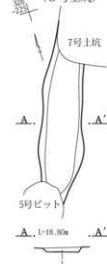
<3号土坑>



3号土坑A-A'

1 灰褐色土 ロームブロックと炭化物を少量含む、軟質、粘性あり。

<8号土坑>



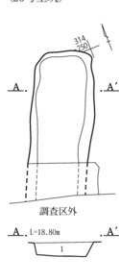
8号土坑A-A'

1 灰褐色土 ロームブロックと炭化物を少量含む、軟質、粘性があり。

26号土坑A-A'

1 褐灰色土 炭化粒・焼土粒を極少量含む、ロームブロックが混入。

<26号土坑>



<91号土坑>



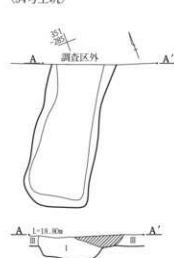
91号土坑A-A'

1 くすんだ灰褐色土 炭化物を少量含む。

94号土坑A-A'

1 くすんだ灰褐色土とロームブロック混土。

<94号土坑>

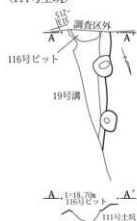


0 1:40 1m

第34図 長方形土坑(2)

第3章 検出された遺構と遺物

〈111号土坑〉



〈11号土坑〉



11号土坑A-A'

1 灰褐色土 ロームブロックと炭化物を少量含む、軟質、粘性あり。

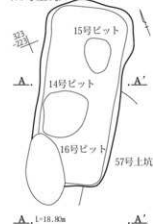
12号土坑A-A'

1 黒灰褐色土と灰褐色土上のブロック混土 ローム土と炭化物を少量含む、やや硬質。

18号土坑A-A'

1 黒灰褐色土と灰褐色土上のブロック混土 ローム土と炭化物を少量含む、やや硬質。

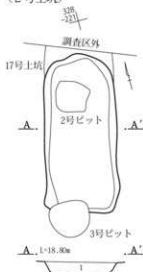
〈13号土坑〉



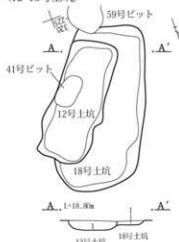
13号土坑A-A'

1 灰褐色土 ロームブロックと炭化物を少量含む、軟質、粘性あり。

〈2号土坑〉



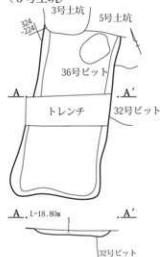
〈12・18号土坑〉



〈16号土坑〉



〈6号土坑〉



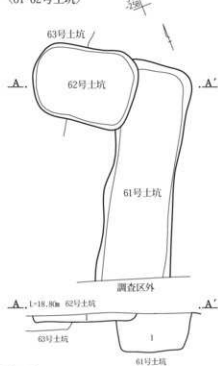
2号土坑A-A'

1 灰褐色土 ロームブロックと炭化物を少量含む、軟質、粘性あり。

6号土坑A-A'

1 灰褐色土 ロームブロックと炭化物を少量含む、軟質、粘性あり。

〈61・62号土坑〉



61号土坑A-A'

1 褐灰色土 炭化粒・焼土粒・ローム粒を極少量含む。

62号土坑A-A'

1 褐灰色土 炭化粒・焼土粒・ローム粒を極少量含む。

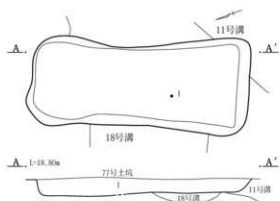
16号土坑A-A'

1 黒灰褐色土と灰褐色土上のブロック混土 ローム土と炭化物を少量含む、やや硬質。

0 1:40 1m

第35図 長方形土坑(3)

〈77号土坑〉



77号土坑A-A'

1 褐灰色土 炭化粒・焼土粒を少量含む。

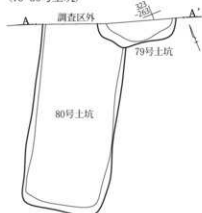
79号土坑A-A'

1 褐灰色土 炭化粒・焼土粒を少量含む、ローム粒・ロームブロックを含む。

80号土坑A-A'

1 褐灰色土 79号土坑よりローム粒ブロックの混入が多い。

〈79・80号土坑〉



79号土坑

80号土坑

79号土坑

80号土坑

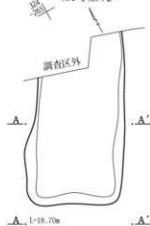
79号土坑

80号土坑

79号土坑

80号土坑

〈81号土坑〉



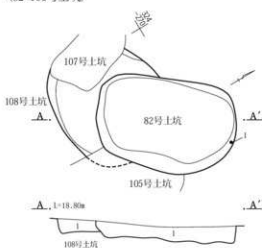
81号土坑A-A'

1 褐灰色土 炭化粒・焼土粒を少量含む、ローム粒・ロームブロックを含む。

82号土坑A-A'

1 褐灰色土 炭化粒・焼土粒を極少量とロームブロックを少量含む、やや黒色上が強い。

〈82・108号土坑〉



107号土坑

108号土坑

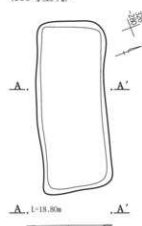
82号土坑

105号土坑

108号土坑

82号土坑

〈100号土坑〉



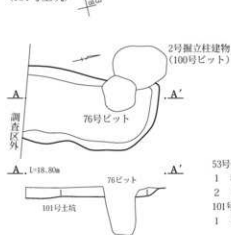
100号土坑A-A'

1 褐灰色土 ローム粒を多量と炭化粒を少量含む。

108号土坑A-A'

1 褐灰色土 焼土粒・炭化粒を極少量とローム粒・ブロックを少量含む。

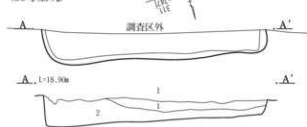
〈101号土坑〉



76号ビット

101号土坑

〈53号土坑〉



53号土坑A-A'

1 暗褐灰色土 ロームブロックを少量、黒色粒ブロックを多く含む、やや暗い感じ、焼土粒が少量混入。

2 褐灰色土 ローム粒・ブロックを少量含む、焼土粒・炭化粒が極少量混入。

101号土坑A-A'

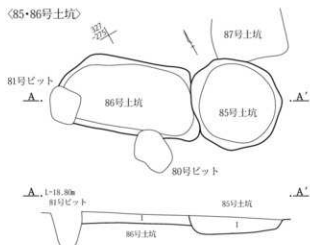
1 褐灰色土 炭化粒を極少量、焼土粒・ローム粒を少量含む、土器2点。

0 1:40 1m

第36図 長方形土坑(4)

第3章 検出された遺構と遺物

〈85・86号土坑〉



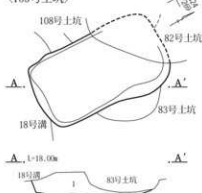
85号土坑A-A'

1 褐灰色土 炭化粒・焼土粒を極少量、黒褐色土ブロックとローム粒ブロックを少量含む、黒色土が強い。

86号土坑A-A'

1 褐灰色土 ローム粒を多量と炭化粒・焼土粒を極少量含む。

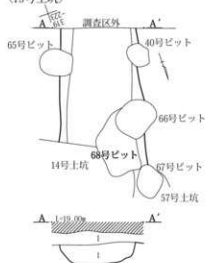
〈105号土坑〉



105号土坑A-A'

1 褐灰色土 炭化粒を多量と焼土粒含む、ローム粒・ブロックも少量混入。

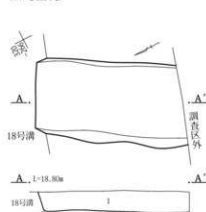
〈15号土坑〉



15号土坑A-A'

1 褐灰色土 ローム粒を多量に含み、炭化粒を極少量含む。

〈88号土坑〉



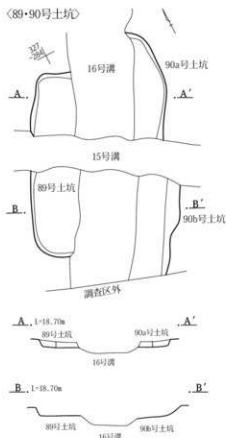
88号土坑A-A'

1 褐灰色土 炭化粒・焼土粒を極少量とローム粒・ブロックを少量含む。

109号土坑A-A'

1 褐灰色土 炭化粒・焼土粒を極少量とローム粒・ブロック(小径)を含む。

〈89・90号土坑〉



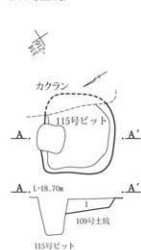
89号土坑A-A'

1 褐灰色土 焼土粒・炭化粒を極少量とローム粒を少量含む。

90a号土坑A-A'

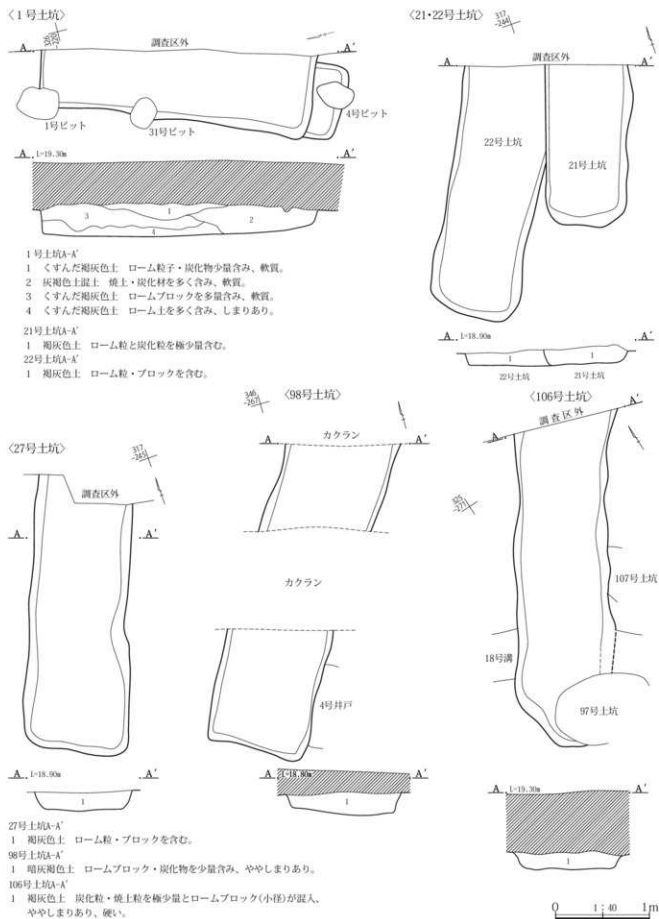
1 褐灰色土 ローム粒を多量含み、炭化粒・焼土粒を極少量含む。

〈109号土坑〉



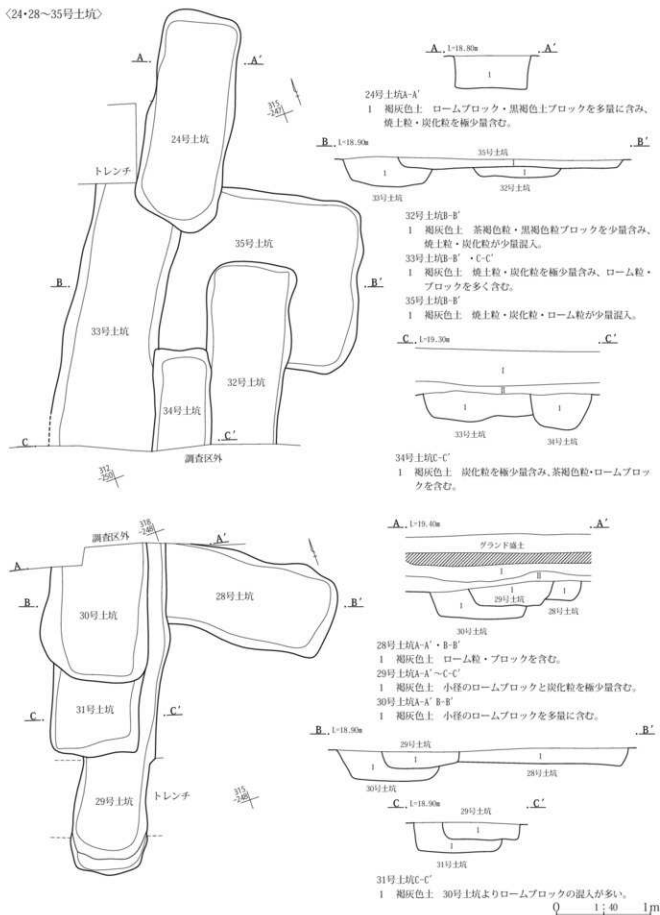
0 1:40 1m

第37図 長方形土坑(5)



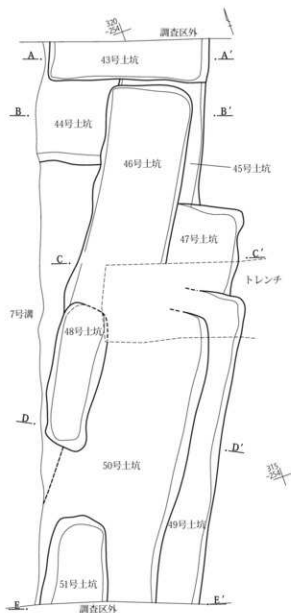
第38図 長方形土坑(6)

〈24・28～35号土坑〉



第39図 長方形土坑(7)

〈43～51号土坑〉



43号土坑A-A'

I くすんだ灰褐色土とロームブロック混土、炭化物を少量含む。



44号土坑B-B'

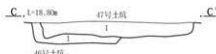
I くすんだ灰褐色土とロームブロック混土、炭化物を少量含む。

45号土坑B-B'

I くすんだ灰褐色土とロームブロック混土、炭化物を少量含む。

46号土坑B-B'

I 暗灰褐色土とロームブロック混土 炭化物を少量含み、やや硬質。



47号土坑C-C'

I 暗灰褐色土とロームブロック混土 炭化物を少量含み、やや硬質。

48号土坑C-C'

I 暗灰褐色土とロームブロック混土 炭化物を少量含み、やや硬質。

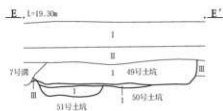


49号土坑D-D'・E-E'

I 褐灰色土 炭化粒・硬土粒を極少量含み、ローム粒・ブロックを含む。

50号土坑D-D'・E-E'

I 褐灰色土 49号土坑より炭化粒が多く、ローム粒・ブロックが少ない。



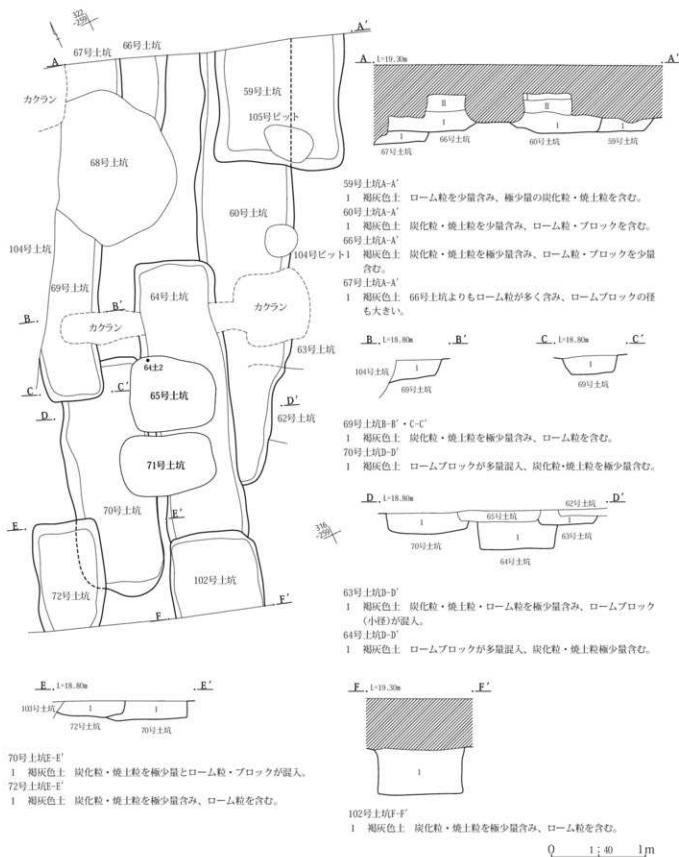
51号土坑E-E'

I 褐灰色土 ローム粒・ブロックを多量含む。

0 1:40 1m

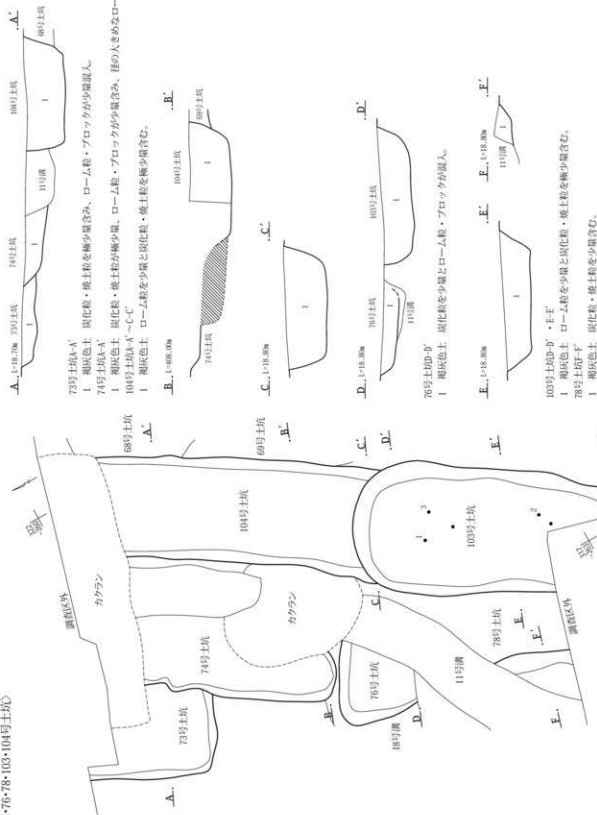
第41図 長方形土坑(9)

(59・60・63・64・66・67・69・70・72・102号土坑)

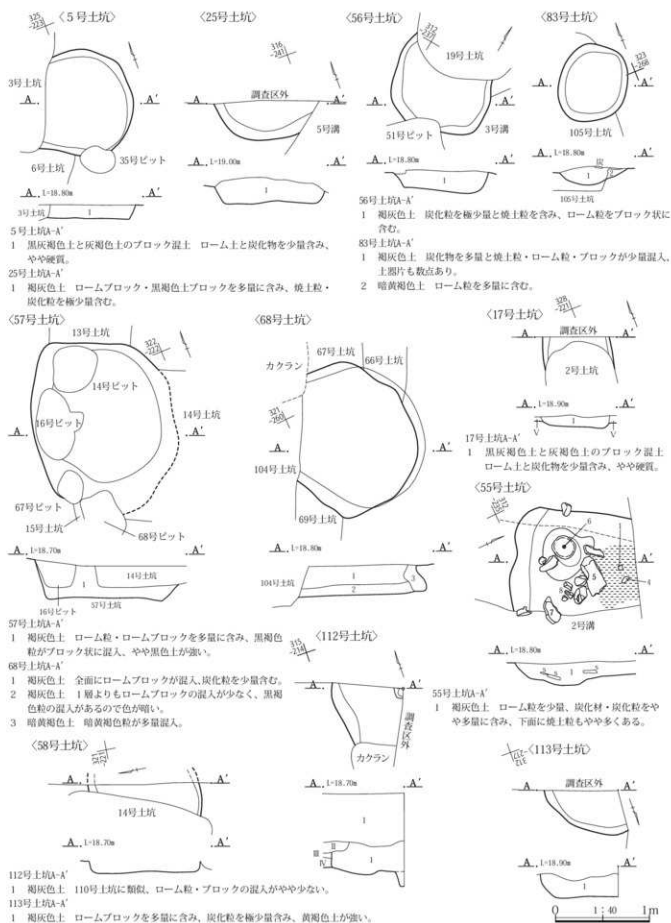


第42図 長方形土坑(10)

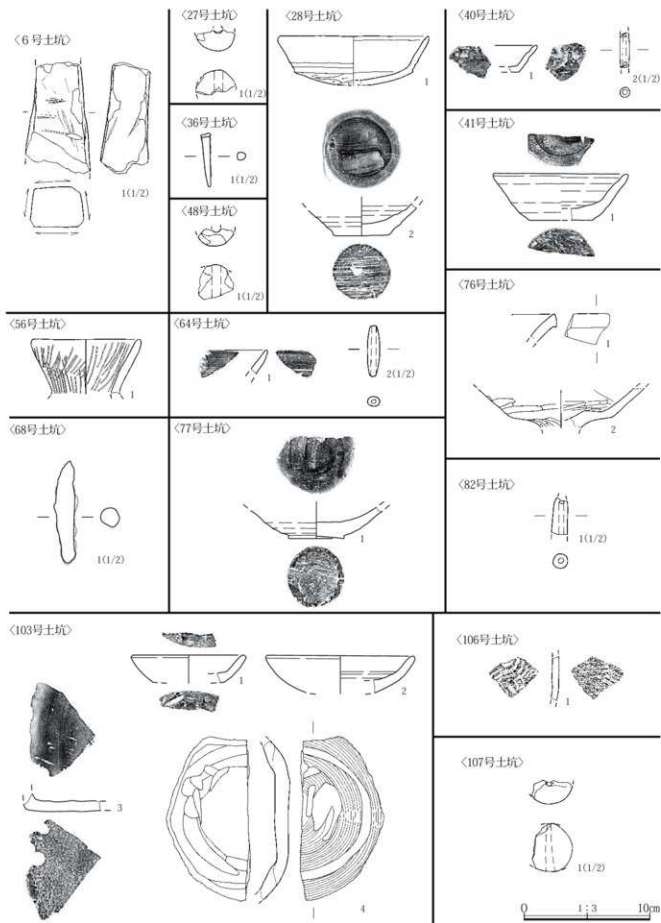
〈73・74・76・78・103・104号土坑〉



第438図 長方形土坑(11)

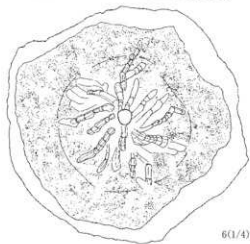
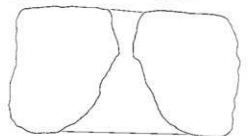
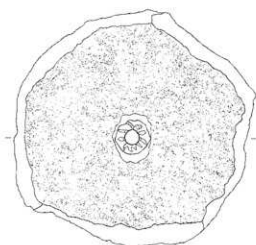
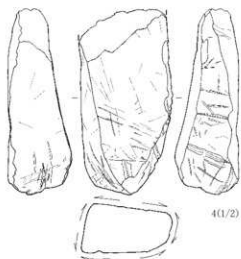
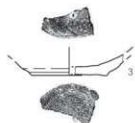
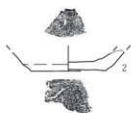


第44図 円形土坑・不整形土坑



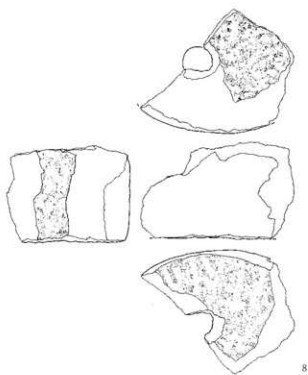
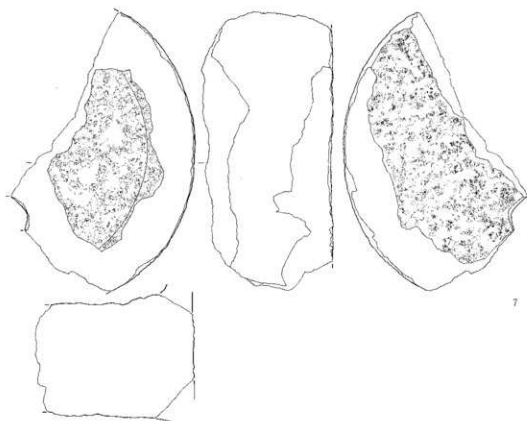
第45図 土坑出土遺物(1)

〈55号土坑〉



0 1:3 10m

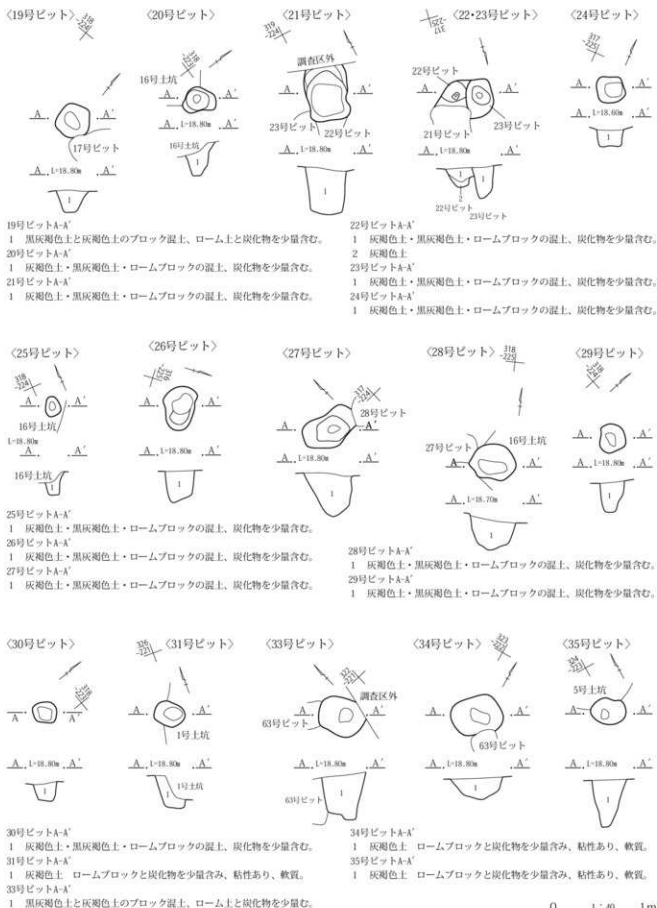
第46図 土坑出土遺物(2)



0 1:4 10m

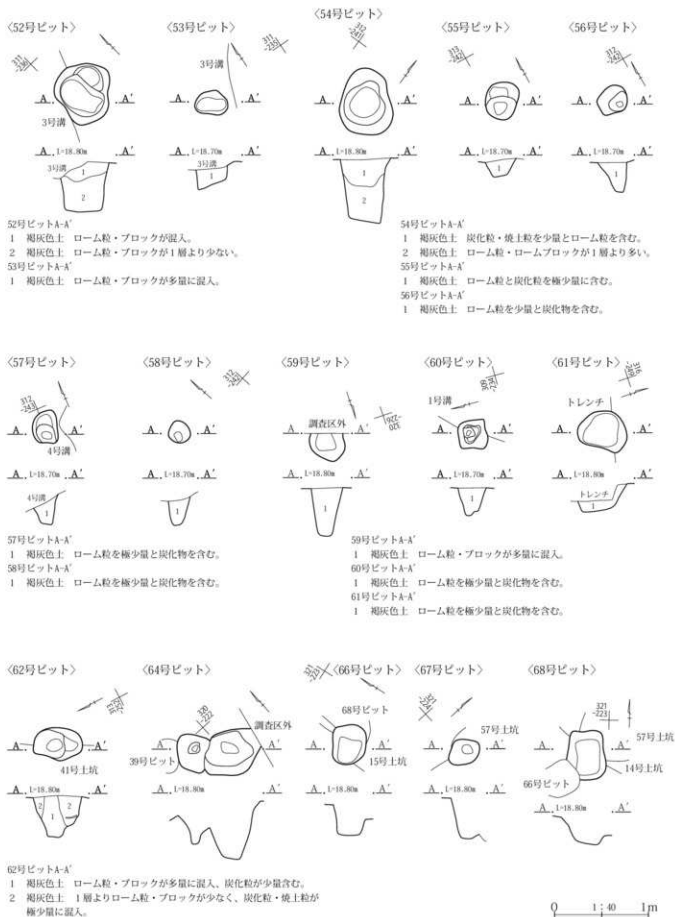
第47図 土坑出土遺物(3)

第3章 検出された遺構と遺物

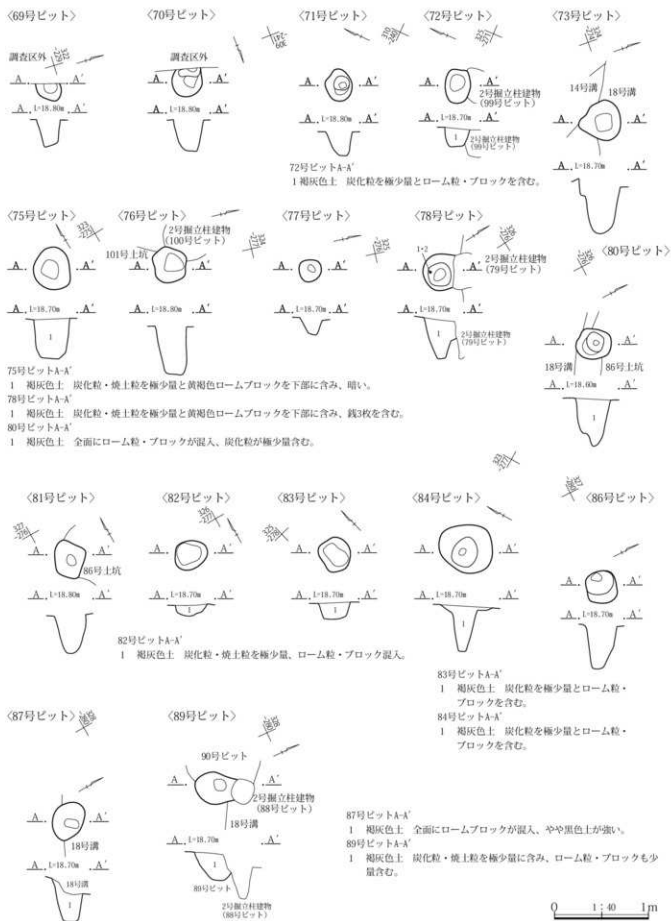


第49図 ビット(2)

第3章 検出された遺構と遺物

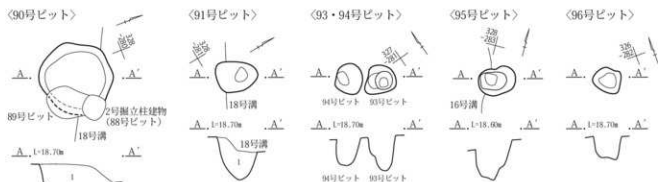


第51図 ピット(4)



第52図 ピット(5)

第3章 検出された遺構と遺物

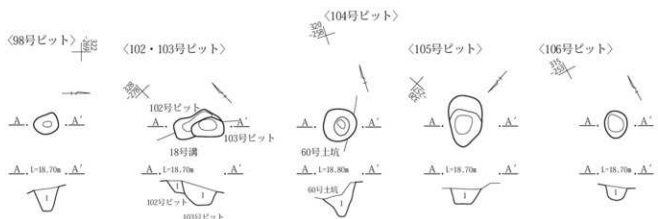


90号ビットA-A'

1 黒褐色土 黒色粒を多く含み、ローム粒・ブロックも少量含む。

91号ビットA-A'

1 褐灰色土 炭化粒・焼土粒を極少量に含み、ローム粒・ブロックも少量含む。



98号ビットA-A'

1 褐灰色土 炭化粒・焼土粒を極少量とローム粒・ブロックを含む。

102号ビットA-A'

1 褐灰色土 103号ビットよりローム粒・ブロックの混入が少ない。

103号ビットA-A'

1 褐灰色土 ローム粒・ブロックを多量に含み、炭化粒・焼土粒が極少量含む。

104号ビットA-A'

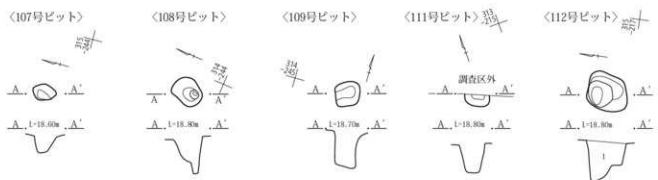
1 褐灰色土 ローム粒・ブロックが少量混入。

105号ビットA-A'

1 褐灰色土 ローム粒・ブロックが少量混入。

106号ビットA-A'

1 褐灰色土 炭化粒・焼土粒を極少量とローム粒・ブロックが混入。

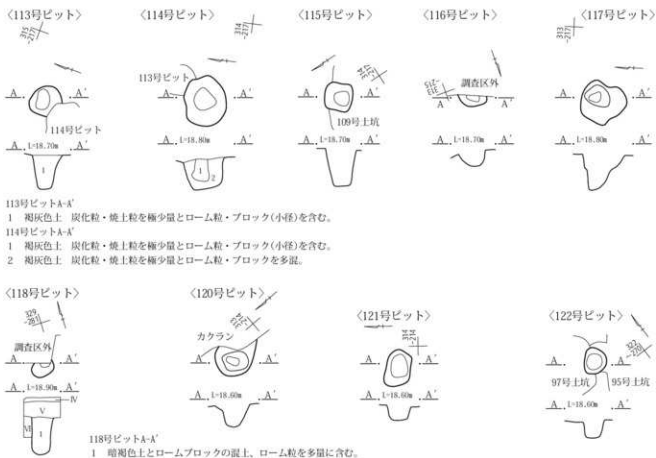


112号ビットA-A'

1 褐灰色土 炭化粒・焼土粒を極少量とローム粒・ブロック(小径)を含む。

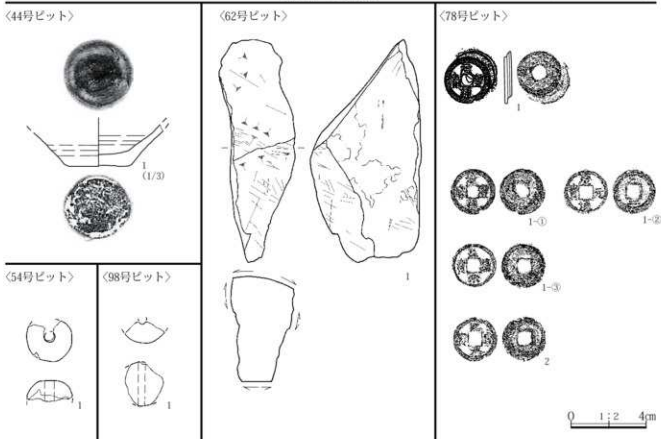


第53図 ビット(6)



第54図 ピット(7)

0 1:40 1m

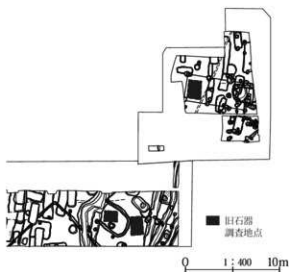


第55図 ピット出土遺物

第3節 包含層出土の遺物

1. 旧石器時代

旧石器時代の遺構・遺物について、第56図の通り、3地点で確認調査をおこなった。冒頭、周辺遺跡の項でも述べたとおり、遺跡所在地周辺にはローム層が良好に堆積しており、多々良沼へ続く鞍掛地区の「古砂丘」では複数の旧石器遺跡が確認されている。こうしたことから本遺跡でも旧石器が確認されるものと期待していたが、当該期石器群についてその存在を確認することはできなかった。



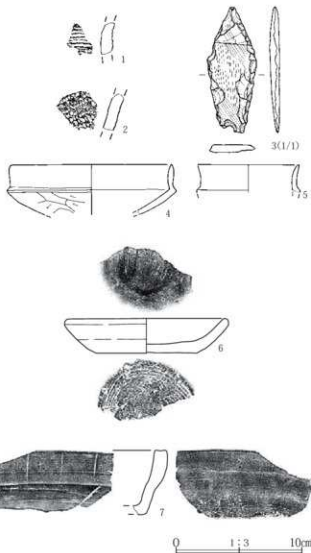
第56図 旧石器調査区図

2. 包含層出土遺物(第57図)

縄文土器2点(第57図1・2)と石鏃1点(第57図3)が包含層から出土したほか、古墳時代杯類(第57図4・5)や、近世陶器(第57図6・7)が遺構外出土の遺物として出土している。なお、非掲載土器器片は、古墳時代竪穴建物から杯類27点(137g)、高杯類2点(51g)、甕類288点(2901g)が、土坑等から杯類301点(762g)、高杯類7点(117g)、甕類881点(4194g)が出土、非掲載須恵器片は古墳時代竪穴建物から壺類1点(2g)、土坑等から壺類8点(159g)、杯類11点(349g)が出土した。非掲載土器器片は竪穴建物が確認されている1・2区の出土量が多く、校舎北側の出土量が少ない。非掲載陶磁器類については、遺構別に出土量をカウントして第5表に示したので参照されたい。

縄文土器2点は小片だが、2点とも縄文時代前期土器片で、3区から出土した。第57図1が前期諸磯c式土器片、2が諸磯c式期並行の浮島式期の土器片である。第57図3は、縄文期磨製石鏃である。表裏面とも研磨したのち、周辺加工して石鏃に仕上げている。

上記の通り、縄文期遺物は少量だが、それが出土しているということは、本遺跡周辺域にも前期集落があるということを示唆する。土器片出土地は3区ということであるが、遺跡地西側には浅い谷が入り込んでおり、縄文期遺構は西側の浅い谷に面して広がるのかもしれない。縄文期遺構と中・近世遺構は分布域が異なるということだろう。



第57図 包含層出土遺物

第4章 調査の成果

第1節 中世関連遺構について

1. 台遺跡の様相

掘立柱建物は1区の西端と2区で各1棟が見つかったが、ピットは2区の方が多く、分布から建物が2・3棟重複する可能性もうかがえる。屋敷地として考えると、1区の東端にある1～3号溝の一群と、4・5溝がともに南北軸を採り、区画溝としての機能が想定できる。最も後出となる3号溝と4号溝は、ほぼ並行関係にあり、区画として連携する溝とも思える。これらの溝からは、在地系の焙烙や土器皿が出土し、周辺が生活域である証左となる。2区を含む空間は、1～5号溝のいずれかを西辺とする屋敷遺構であった可能性が高い。

本遺構群で最も特徴的なものは、1区中央に集中する長方形～細長い長方形を呈する長方形土坑群であろう。重複も顕著であり、繰り返して作られたものである。主軸方位は20～30度前後北より東に振れる傾向で一致する。幅は50～100cmが大半であるが、長さはバラツキがある。残存する深さは10～20cm台が多く、概ね浅い傾向にあり、底面は極めて平坦に作られている。一見、「灰かき穴」に近似するが、火山灰を埋填した可能性はない。「粘土採掘坑」と考えた場合、求めている粘土が想定できない。可能性とすれば、いわゆる「イモ穴」と同様、一定期間相当量の物質を地下に埋納したものであろう。仮に、根菜類の貯蔵穴と考えた場合、一つの領域に面的に集中することは注目されよう。

長方形土坑群の分布には、規則性が見られる。東端から21・22・27・24・29号土坑は南辺がほぼ直線的に並び、相互の間隔も等間隔に近い。また、西端から81・80・74・104・69・60号土坑は南辺が直線的にそろう、同じラインに重なって西から77・103・70・61号土坑は、逆に北辺が直線的にそろう、間隔も等間隔に近くなっている。このラインには隙間はないため、道や溝など境界となるものがあつたとは思われない。若干の重複もあるが、北辺と南辺を相互に接しながら、同時期に設置された可能性も残るだろう。土坑の北辺や南辺がそろう、等間隔

に並ぶ傾向は、複数の土坑が同時に設置された可能性を示唆している。なお、西端の土坑の南北辺が一致するラインの延長線上には軸方向は若干異なるが、18号溝が走向しており、何らかの境界認識をうかがうことができる。

18号溝と土坑の新旧関係を見ると、77号土坑は18号溝より前出だが、88号土坑は後出である。つまり、18号溝はこの土坑群と前後して、ほぼ同時期に作られた可能性が高い。一方、1区西端の掘立柱建物は東西軸を採る18号溝と重複関係にあり、状況から溝が後出と思われる。この溝は火葬跡である95号土坑や3号井戸よりも後出であるため、生活関連遺構よりも一段階新しい印象がある。しかし、2区では土坑が意識的に掘立柱建物の内外に作られている可能性が認められることから、改めて1区の掘立柱建物の周辺を見ると、長方形土坑群と意識的に距離を置いている状況がうかがえる。つまり、掘立柱建物と区画溝、井戸、長方形土坑で構成される遺構群は若干の前後関係はあるが、一連の遺構と見なしてよいこととなる。時期は、出土遺物から概ね16～17世紀と考えられる。

2. 綿貫原北遺跡(高崎市)の事例

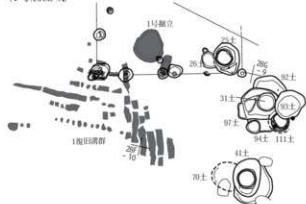
台遺跡の状況を理解するため、長方形土坑が多く調査された事例として綿貫原北遺跡を示す。この遺跡は、国道354号高崎玉村バイパス建設のために実施された調査である(公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第556集『綿貫原北遺跡』2013年)。1区では中世から近世にわたる遺構群が発見された。

第58図上は、1区における中世の状況である。北東部に一辺50m級の中世屋敷あり、その20m西方に長方形土坑群が集中して作られている。この土坑群には長方形以外にも、火葬跡や土壌墓と推定される楕円形の土坑も含まれている。また、これと一部重複して南北に走向する6号溝は中世屋敷の外郭線と考えられ、この溝に対する境界意識が土坑の設営にも関係したと思われる。西に隣接する綿貫小林前遺跡O東区まで、この土坑群の分布は広

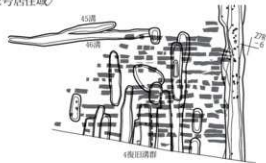
がっている。綿貫原北遺跡では、この土坑群の年代を出土遺物から中世とした。なお、2区や3区でも小規模な中世屋敷が調査されたが、長方形土坑は区画境に縦列するものはあるが、一定の範囲に集中する状況は見られない。

一方、第58図下1区の近世段階の全体図であり、中世屋敷であった部分以外が3つの居住域に分かれた状況を

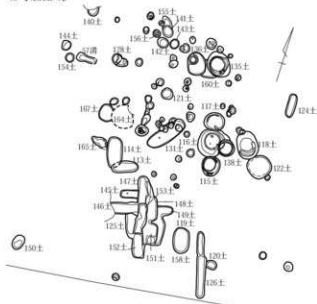
〈1号居住域〉



〈2号居住域〉



〈3号居住域〉



第59図 同・復旧坑の配置状況

抽出して59図に示した。各居住域は、概ね掘立柱建物と桶埋設土坑(便所)が分布する領域と長方形土坑が作られる領域に分かれているものとする。特に、2号居住域の場合、長方形土坑群の上層に浅間A軽石を埋填した復旧溝群があり、この領域は畑地であったことの証左となる。こうした状況から、長方形土坑群は概ね畑作に関係する貯蔵遺構と考えてよいだろう。居住者は概ね詳細な農民と推測するが、農地は他にもあるはずであり、ここで調査された畑は屋敷畑と見なされ、それゆえ貯蔵遺構が設置されたと考えたい。また、2号居住域の長方形土坑は南北軸を採るものばかりであり、3号居住域には直交するものがある点で異なっている。中世の状況は、3号居住域に類似している。

近世の居住域の状況を踏まえて、改めて1区西端の中世段階の長方形土坑群を見ると、墓や火葬跡が含まれている点が大きく異なっている。近世段階では、元の中世屋敷内に同時期の墓が集中しており、同じ居住者のものか確認はないが、墓域が別に設置されたことが想像される。したがって、近世の状況は畑地とそこに設置された貯蔵遺構の可能性が高いこととなる。その面で、中世段階で1区西端に設置された長方形土坑群を、食料に関する貯蔵遺構とするのは躊躇してしまふ。つまり、墓や火葬跡と共存可能な土坑である必要が求められるからだ。遺骸が埋葬される土地は、ある意味聖域であるとしても不浄な土地であり、忌避されるべき場所であろう。それゆえ、領域を限定する必要があり、埋蔵行為が繰り返されることとなる。問題は何を埋めるかであろうが、状況や形態から全てが墓であることは考えにくい、火葬跡も同様である。何を埋めたかという問いには答えられないのが現状である。

3. まとめ

台遺跡1区で調査された長方形土坑群は、屋敷地の周辺に設置された貯蔵遺構であろう。綿貫原北遺跡の例を採れば、近世段階ならば畑地に設けられた根菜類の貯蔵施設となるが、中世段階を踏まえると火葬跡の存在も無視できない状況である。一方で、土坑の数量はかなり多く、綿貫原北遺跡と単純に比較できるものでもない。状況から複数が同時期に掘られた可能性が高く、個人レベ

ルを越えた行為であり、綿貫原北遺跡の近世段階とは状況が異なる。また、火葬跡は1基のみであり、土壌墓が見られないことから、不浄の領域として忌避されていたとも言え切れず、単純に前出の火葬跡が重複していた可能性も残る。やはり、台遺跡の場合は、屋敷地に隣接した貯蔵遺構という評価が最も理解しやすい。ただし、零細な農民によるものではなく、ある程度の集団行動であり、上層農民の関与或いは集団的管理を考える必要があるだろう。収穫物に対する収取体系としては、種籾の貸し付けなどが知られるが、根菜類についても何らかの形で、再生産する体系が作られていたのではないだろうか。

第2節 近世上三林村について

調査中、遺跡地が中世「赤岩道」に近接していることや、当地が古代「佐貫荘」の荘域にあり、土坑から出土した板碑に「建武三年」の紀年銘があり、中世遺跡としての調査成果が期待された。調査後1年余で、発掘調査報告書を作成することになったが、古墳時代後期の竪穴建物や平地建物を除けば、遺構の帰属年代が確定できておらず、調査成果のみから遺跡を評価するには限界があり、発掘データだけでは詳細な検討はできそうにないが、ここでは農業発達の視点から検討を行い、当地における中・近世上三林村の集落像を描く手がかりとしたい。

1. 遺跡の概要(変遷)

本遺跡には旧石器がなく、縄文時代の遺物も前期土器片が2点ばかり出土しただけである。近接する旧野辺村の台地に弥生期の土器片が出土しており、同時期の集落が営まれた可能性がある。本遺跡も似た立地条件にあるが、弥生期土器片は出土していない。以下には古墳時代以後の集落動向について概要をまとめておこう。

古墳・平安時代 本遺跡に農耕集落が営まれたのは古墳時代後期(6世紀後半)のことである。本遺跡は東西300m・南北250mに広がるとされ、これまで竪穴建物7棟が確認(試掘調査を含む)されているが、いずれも重複しないことから、集落は比較的短期に廃絶されたものと思われる。続く平安時代の集落については現状では確認できていないが、出土遺物に平安期杯類があり、周辺域に

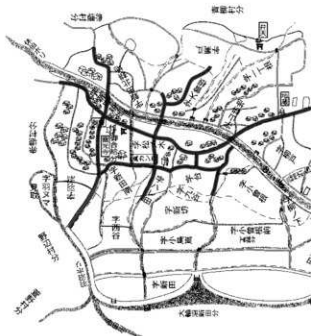
平安期の集落が広がる可能性も否定できない。

本遺跡は6世紀代になり集落が営まれる「第1次新開集落」に相当する遺跡であり、生産域は遺跡地南側の低地部を想定するしかない。ただし、この低地部には旧利根川が流れており、当時利根川クラスの河川をコントロールするのは不可能とされるから、可耕地は必然的に台地両側に入り込んだ浅い窪地(第61図横線部)に限られてくる。おそらく、溜井灌漑による水田耕作が行われたのであろう。

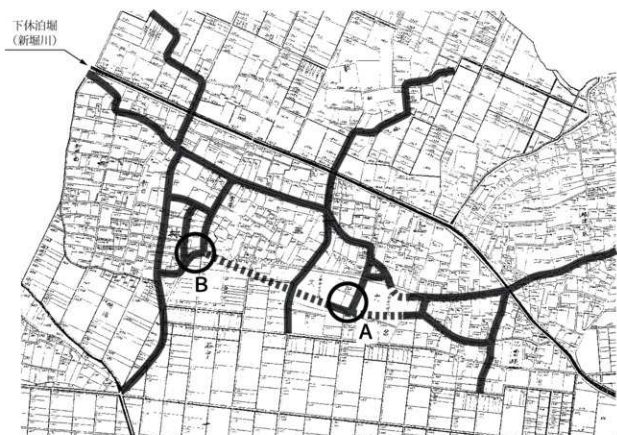
中・近世 発掘調査では火葬土坑や「建武三年」と銘の刻まれた板碑があり、掘立柱建物も中世遺構としての可能性が浮上した。中世関連の遺跡では遺物量が少なく遺構の時期決定も假ならないことが圧倒的だが、本遺跡が古代「佐貫荘」の荘域内にあることはほぼ間違いないところであり、三林という地名が中世文獻に登場することや、三林城と呼ばれる城跡跡が上三林地区内にあることから古代より続く中世集落とすることができるだろう。

出土遺物の年代観は16~17世紀とされるものが多く、13世紀代や18世紀代の陶磁器類はほとんどないということであった。検出遺構についてもほぼ同時期のものとすることができよう。

2. 近世後半期の上三林村



第60図 絵図に描かれた上三林村(一部加筆)



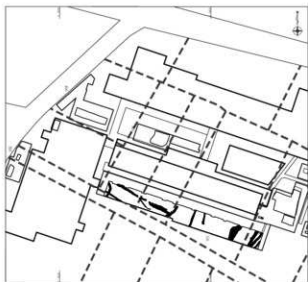
第61図 迅速測図に示された上三林村(上)と、上三林村の地割(下)

以上が発掘を通じ判明したことであるが、18世紀以後の上三林村について手掛かりを得ようとするれば、安政2年の封内経界図誌(第60図、イラスト図)や明治17年の迅速測図(第61図上)が参考になるだろう。これに基づき近世後半期の上三林村の様子を描いてみよう。

<封内経界図誌> 村内を下体泊用水(新堀川)が流れ、村を二分する。村には「真観寺」「雷光寺」2寺があり、雷電神社がある。下三林村から続く街道は直線的であるが、真観寺の手前で二手に分かれ、一方(北ルート)は雷光寺の北を抜けて隣村(旧赤堀村)に至り、もう一方(南ルート)は寺の南側を抜ける。この南ルートは封内経界図誌には明瞭に描かれていないが、「羽沼堀」に続く土手を経て隣村「野辺村」に連絡したものと見られる。このほか、点在する屋敷群と堂宇、台地上の畑や低地部水田等が描かれている。

<迅速測図> 絵図に遅れること30年、明治13~17年に測図されたものだけに絵図の信頼性を検証することができる。絵図同様に、真観寺(迅速測図では「信寛寺」と表記)手前で街道が二股に分かれていることが良く分かる。北ルートは小さく折れて西進し、雷光寺の北を抜けるのに対して、南ルートは真観寺の手前で左に折れ、すぐまた右折するルートになっている。

近世後半期の街道 封内経界図誌では、微妙だが真観寺南の街道が湾曲して描かれている。これに対して、迅速測図(第61図、上)では寺の正面で街道が折れて描かれている。耕地図(第61図、下)には三野谷小学校(本遺跡)・中学校が明記されているが、学校建設により真観寺周辺の南ルートが分からなくなってしまっている。寺の正面に向かう街道を示す地境等は認めることができないが、寺域の南には街道と思われる小路(第61図のA)が描かれているのが分かる。この小路は現在も残り、道幅は車1台が通れる程度、幅1間ほどである。迅速測図では真観寺正面で左に折れ、すぐまた右折、そのまま西進「羽沼堀」の土手筋へ左折するように描かれているが、土手筋に向かう左折地点は雷光寺から南に下る街道の交差点(第61図のB)とした方が、資料(絵図・迅速測図・耕地図)には整合的である。結論として、南ルートは真観寺南を通り、これを直進して雷光寺から下る街道の交差点を左折して土手筋に向かうルートということになる。寺の南側を通る街道の延長には雷光寺南の交差点があり、これと



第62図 1区15・18号溝と耕地図境

同じライン上に15号溝(第62図)があることから、街道(南ルート)脇の溝になることも想定しておきたい。正確な位置関係については確認できていないが、公図には幅2間の長い土地区画があり、これが15・18号溝に挟まれた部分に当たる可能性も否定できない³¹⁾。

館林市史では中世「赤岩道」を県道85号線(「館林・深谷線」)の下に想定しているが、明治17年の迅速測図になく、耕地図には学校北に街道が示されていることから、明治期中頃から戦前にかけて造られた道路ということになる。中世「赤岩道」のルートは、再検討する必要がある。近世後半期の集落 絵図は若干デフォルメされているが、位置関係等は迅速測図と変わらず、近世後半期の上三林村が良く示されているように思う。上三林村の絵図を見ると東方の下三林村から続く街道沿いに集落³²⁾があり、谷田川沿いや下体泊用水(新堀川)から分岐した用水沿いにも集落があり、これが集まり村を形成していたのが分かる。近世上三林村には境界こそ示されていないが、「古上三林村」と「新上三林村」があり、それぞれに名主が置かれたという。上三林村には「新田北」「新田」「新田西」等の小字名が雷光寺周辺域にある。絵図に描かれた集落や街道等は迅速測図に一致しており、ほぼ正確に近世末の村の様子を図化したものと思われ、村の石高は元禄期以後も変わらないことから、結果的に元禄期以後の集落配置も絵図と大差はなかったように思う。以上により、真観寺と雷光寺の間に広がる畑を境に村名を呼び分けたのではないかと考えたい。

3. 近世前半期の上三林村

中世の邑楽部については古代末になり「佐貫荘」が立荘、これが中世に引き継がれたとされる。歴史地理学者は、近世三林村の集落は中世集落を土台に成立、これが近代に繋がるとして、新しい要素を消去することで中世集落までさかのぼることができるという。

まず、水田開発については古嶋敏雄や木村礎の研究が参考になる。木村(『日本村落史』1978)は、当初の水田耕作が排水中心であり、これが古墳時代以後に灌漑中心となるとした。そして、古墳時代後期になり、谷地水田が溜井灌漑により開発され、古代条理水田の施工を経て、中世の谷地水田全面開発が達成、戦国・近世初期に至り本格的な河川灌漑がおこなわれたとした。そして、近世前半期(元禄期)には大河川中流域の開発が、下流域の開発は明治期になり実現したと整理した。この見解は古嶋(『近世日本農業の構造1943』)を意識したものであろうが、木村は古嶋説を実際より遅れ気味にみているとした。これについては、発掘調査と分布調査を踏まえた農業発達史的な見解(能登1984・1989)があり、初期の水田適地開発から谷戸田欠水地域への進出(第1次新開集落、溜井灌漑)、これに続いて谷戸田の全面開発が行われたとした(平安期、第2次新開集落)。この仮説は具体的かつ説得的であり、県内農耕集落を分布論的に解説する場合は、みなこれに従っている。中世以後の水田開発については、現在も歴史地理学の成果を超えるものはない。その開発規模は概して小規模であり、在地領主によるものが主体を占めたという。

中世集落は散居的、集村的、豪族屋敷的、環濠集落的なものがあり、さまざまである。中世的な屋敷の一つに「在家」がある。在家の長が名主であり、在家には下人や所従が暮らしたというが、別に居を構えるケースもあったという。歴史地理学の言う中世的枠組と是在地領主による名主・名田体制にあるとされ、近世においてはこうした隷属的農民層の自立化(本百姓化)が図られたとされている。

用水整備については、先に述べたように、中世においては在地領主による小規模開発が主体で、耕地の分散傾向は明らかであった。そのため、地域間を貫く用水整備は遅れ、当然耕地は増えず生産は停滞気味であった。こ

れが中世というべきだろうが、木村(掲掲1978年)や古嶋が指摘したように、戦国期以後、各地で用水整備が本格化したというのが全国的な趨勢といえるであろう。

以上を踏まえて近世前半期の集落像について想定されるところを述べてみたい。

前半期集落 中世末から近世初頭は新田開発と水路の開削時期が重なり、生産量が大きく伸びた時期である。館林藩内の新田開発は、村の石高を見ると分かりやすく、藩内村々の石高は元禄期(元禄15年の検地帳、1702年)にピークがある。石高が増えたことで6カ村が分村され、これによりほぼ新田開発が完了したものとみなすことができる。文献にも渡良瀬川の河川敷の開発が行われたとあり、開発できそうなところはすべて手を入れたということであろう。以後、石高は元禄期石高を維持³³⁾していることから、前半期においてすでに後半期集落同様の塊村が形成されていたと考えたい。問題は中世末から近世初頭で、あらたに分家や新田村が生まれるなど、社会は拡大傾向にあり、活況を呈していたものと思われる。

建物 近世後半期の屋敷には母屋があり、厩・納屋など付属建物があり、母屋に近接して井戸がセットとなっているのが通例である。当地では、前半期に新田開発を終えており、前半期も後半期も屋敷構えはほとんど変わらないであろう。ただし、新田村では屋敷面積や建物サイズが平準化されており、古村では中世的建物と近世的建物が入り混じっているのが実態と思われる。ところで、本道跡1・2号掘立柱建物は、いかにも小規模である。建物全体が把握できたとはいいがたく、調査区外にも建物が広がる可能性は否定できないが、迅速測図や絵図によるかぎり、調査地は集落から外れており、果して屋敷跡を潰して畑地に替えるようなことがあるのであろうか。地目を変えることは、余程のアクシデントがないかぎり通常はないように思う。1・2号掘立柱建物は16～17世紀の建物にはちがいないが、現状で建物を性格づける材料は得られてはいない³⁴⁾。今後、発掘調査で具体的な実態解明が期待されよう。

用水整備 館林地域の用水では体泊堀の整備が重要である。体泊堀は太田市矢場堰(渡良瀬川)より取水する幹線用水路で、途中矢場川や葎川にも分水させ、流域33カ村に農業用水が供給されている。また、体泊堀には上体泊堀と下体泊堀があり、共に大谷体泊が完成したとされる

が、受益地は広域に及んでおり休泊一代で完成したと考え難く、より以前から用水整備を継続していたと考えたい。上休泊ルートは、戦国明城跡跡「小泉城」の脇を流れており、いかにも戦略的である。通水を可能にしたのは広域の政治的安定にあり、多々良沼の水を逆流させるなど(PL. 1)、技術的にも相当なレベルにあり、より強固な政治力を感じる。最終的完成は大谷休泊によるとしても、先にも述べたとおり受益地が広域に及んでおり、結果的にそうなったと考えたい¹⁸⁵。

近世になり、館林藩領では利根川および渡良瀬川の築堤、矢場川の瀬替え等が行なわれている。利根川などの築堤工事は幕府直轄事業で行われたものであり、天正18年(1590年)から正保年間まで50年を要したとある。矢場川を付け替えたのは館林藩主綱吉(寛文四年、1667年)のころであり、これにより渡良瀬川低地帯の開発が進化したのだろう。検地帳には、「見取畑」等の記載あるほか、絵図にも「流作場」の記載があり、17世紀中頃には大規模河川の河川敷まで開発の手が及んだことを示している。これにて館林藩領の新田開発は終了になる。

4. まとめ

発掘では掘立柱建物・井戸・溝・土坑など16～17世紀の遺構が発見されている。このことから、本遺跡は集落域、屋敷地としての土地利用が想定されるのであるが、調査データによるかぎり、少なくとも近世後半期まで屋敷が継続した形跡は認め難い。歴史地理学では、集落は散村から集村へ向かうとされ、屋敷が途絶えることは想定していない。絵図や迅速測図を見ると、真観寺西には屋敷が描かれていないことから、理論上は新田開発を契機に屋敷を別に移したと考えておきたい¹⁸⁶。

上三林村が「古村」であることは、絵図や迅速測図を見れば、一瞥して明らかである。村の歴史は当然中世までさかのぼることになるが、中世の村の様子について知る材料はほとんどない。唯一、「建武三年」銘の板碑があるだけであるが、これも石臼とともに廃棄されたもので、当時のものではない。とはいえ14世紀、近在に板碑を造立できるほどの有力者がいたというも否定できない事実であり、領主クラスの屋敷を中心に有力農民の屋敷が散在する程度は想定していいのかもしれない。そして、これが核となり、絵図や迅速測図に見る塊状集落が形成

されたとしておこう。

本文中でも指摘したところであるが、遺構の年代観が明らかにできないことは致命的で、検討は将来的課題とせざるを得ないが、農業発達史的には①台地内の谷戸田で行われた水田耕作、②古代・中世における生産域の拡大、③利根川など氾濫原の新田開発等を明らかにすることが当面の課題になるだろうと考えている。②については、「佐貫荘」成立以後の生産域拡大ということになるが、文献は歴代の盛衰が覗かれる程度で、小領主的荘園経営が垣間見えるだけである。投入労働力に限界はあったのであろうが、可能な限り生産域の拡大を推し進めたはずである。今後とも用水整備については注視していきたい。

注1 第62図は調査区と地籍図の道路境界を重ね合わせ、トレースしたものである。精度的に問題があり、溝と耕地図が完全一致するとは言い切れないのが現状である。溝に重なるように見えるが、参考程度のデータとしていただきたい。

注2 ここでいう集落とは、複数の屋敷がひとつのまとまりを形成したものの(屋敷群)を指している。これがいくつが集まり村を形成したものであろう。

注3 なお、城下周辺の谷越村・新前村・小桑原などでは天保期石高が元禄期石高の17～38%減となっている。何か原因があるのだろうか。このことについての検討は幅を改め検討する予定である。

注4 掘立柱建物を新田開発前の屋敷と見れば、古村の建物という見方もできるかもしれない。仮に、17世紀の建物ということなら真観寺付属施設としての可能性も視野に入れておきたい。

注5 休泊畑は新田畑と並ぶ広域用水路で、東長岡戸井口道路の脇など古代から用水路整備の痕跡が残されていることから、受益地は広域に及び、徐々に受益地を広げていったというのが実態であろう。

注6 中世から近世初期の集落において、近世後半期になり畑に畑目が変わることもあるのだろうか。このことについて具体的に確認できていないが、法的には、仮にあったとしてもエピソードということになる。

木村健 『日本村落史』弘文堂1978年
古船敏雄 『近世日本農業の構造』1943年
館林市史編纂委員会 『館林の原始古代・中世』2015年
館林市史編纂委員会 『近世館林の歴史』2016年
能登健 『よみがえる中世』平凡社1989年
能登健 『新里村の道路』新里村教育委員会1984年

第2表 遺物観察表
1号竪穴建物出土遺物

検出 PL.No.	No.	種 器 種	出土位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第11図 PL.16	1	土師器 杯	一部欠	口 底	13.0 —	高 —	3.8	細砂/褐色灰黄/良好	口縁部はヨコナデ。内面は板状工具によるナデ。体部外面は斜位ヘラケズリ。底部外面はヘラケズリ。やや乱れた放射状ヘラミガキ。外面はヘラケズリ。
第11図 PL.16	2	土師器 杯	口縁部一部欠	口 底	12.3 —	高 —	3.7	細砂/にぶい黄褐色/良好	口縁部はヨコナデ。底部内面は放射状のヘラミガキ。底部外面はヘラケズリ。
第11図 PL.16	3	土師器 杯	カマド内 口縁部一部欠	口 底	12.2 —	高 —	4.9	細砂・粗砂/にぶい黄褐色/良好	底部内面はナデ。口縁部ヨコナデで、内面の下部は強いヨコナデにより凹線状に窪む。上側のヨコナデは、内外面同一箇所までナデ上げる。底部外面はヘラケズリ。
第11図 PL.16	4	土師器 杯	2/3	口 底	6.5 —	高 —	3.6	細砂・粗砂少量/褐色/良好	口縁部はヨコナデ。内面の器表は剥離部分多い。口縁部外面上位は浅い凹線状に窪む。内面の口縁部中位と底部境はクロ目状に浅く窪む。底部外面はヘラケズリ。
第11図 PL.16	5	土師器 高杯	カマド内 台部一部欠	口 台	13.8 12.0	高 —	10.4	粗砂・細砂少量/褐色/良好	口縁部と脚端部付近はヨコナデ。杯部内面はヘラミガキ。脚部外面上位から杯部外面は縦位ヘラケズリで、口縁部外面にヘラナデ状に工具がある。脚部天井部は抉るようなヘラケズリ。
第11図 PL.16	6	土師器 鉢	1/3	口 底	17.8 —	高 —	12.5	細砂・粗砂/灰褐色/良好	口縁部はヨコナデ。体部内面はナデ。底部内面はヘラナデ。体部から底部外面はヘラケズリで体部外面の器表は摩滅。
第11図 PL.16	7	土師器 甕	カマド内 一部欠	口 底	18.2 2.7	高 —	23.0	細砂・粗砂/灰黄褐色/良好	口縁部はヨコナデ。内面は板状工具によるナデ。体部外面は斜位ヘラケズリ。底部外面はヘラケズリ。
第12図 PL.16	8	土師器 甕	口縁部～体部上位1/2	口 底	22.0 —	高 —	—	粗砂/褐色/良好	口縁部はヨコナデ。体部外面は幅広い縦位ヘラケズリ。体部内面はナデ。
第12図 PL.16	9	土師器 甕	カマド内 口縁部～体部	口 底	20.7 —	高 —	—	細砂・粗砂/にぶい褐色/良好	口縁部はヨコナデ。体部内面はナデ。体部外面は縦位ヘラケズリ。
第12図 PL.16	10	土師器 甕	カマド内 口縁部～体部	口 底	20.8 —	高 —	—	細砂・粗砂/灰黄褐色/良好	口縁部はヨコナデ。体部内面は板状工具によるナデ。体部外面は斜位ヘラケズリ。
第12図 PL.16	11	土師器 甕	カマド内 口縁部～体部	口 底	20.1 —	高 —	—	細砂・粗砂/灰黄褐色/良好	口縁部はヨコナデ。体部内面はナデで、器表やや剥離。体部外面は斜位ヘラケズリ。
第12図 PL.17	12	土師器 甕	カマド内 口縁部一部、底部欠	口 底	23.0 —	高 —	—	細砂・粗砂/にぶい黄褐色/良好	口縁部はヨコナデ。内面口縁部以下は板状工具によるナデ。体部外面の器表はヘラケズリであるがやや摩滅。
第12図 PL.17	13	土師器 甕	カマド内 一部欠	口 底	20.6 4.3	高 —	35.2	細砂・粗砂/にぶい黄褐色/良好	口縁部はヨコナデ。口縁部以下の内面はナデ。口縁部以下の外面は縦位ヘラケズリ。
第12図 PL.17	14	土師器 長頸甕	口縁部～体部下位	口 底	22.8 —	高 —	—	細砂・粗砂/にぶい黄褐色/良好	口縁部は大きく開く。口縁部はヨコナデ。体部内面はナデ。体部外面は斜位と縦位ヘラケズリ。

2号竪穴建物出土遺物

検出 PL.No.	No.	種 器 種	出土位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第14図 PL.17	1	土師器 杯	口縁部1/2	口 底	14.6 —	高 —	—	粗砂・粗砂少量/褐色/良好	口縁部は外反し、端部を上方に小さくつまみ上げる。器表はやや摩滅。内面はヘラミガキ。体部外面以下はヘラケズリ。
第14図	2	土師器 杯	口縁部1/7	口 底	13.7 —	高 —	—	細砂/にぶい黄褐色/良好	口縁部は短く、底部も浅い。口縁部はヨコナデで、底部内面に凹線を開けた幅広いヘラミガキ。底部外面はヘラケズリ。復元径がやや大きい可能性がある。
第14図	3	土師器 杯	口縁部片	口 底	— —	高 —	—	細砂・粗砂少量/灰黄褐色/良好	内面から口縁部外面はヨコナデ。底部外面はヘラケズリ。
第14図	4	土師器 杯	口縁部片	口 底	— —	高 —	—	細砂・粗砂/にぶい褐色/良好	内面から口縁部はヨコナデ。口縁部下の段差は明確で底部外面はヘラケズリ。
第14図	5	土師器 杯	口縁部1/8	口 底	10.8 —	高 —	—	細砂少量/褐色/良好	口縁部は直線的に開く。口縁部内面は極低い段をなして表す。口縁部はヨコナデ。底部外面はヘラケズリ。残存率が低く、口縁は歪差が生じている。
第14図	6	土師器 埴	口縁部1/4	口 底	9.8 —	高 —	—	粗砂少量/褐色/良好	口縁部はヨコナデ。端部とくびれ部付近のヨコナデはやや強め。
第14図	7	土師器 鉢	口縁部小片	口 底	— —	高 —	—	細砂・粗砂少量/にぶい黄褐色/良好	体部内面から口縁部外面はヨコナデ。口縁部下のヨコナデは強い。体部内面中位はナデ。体部外面はヘラケズリ。
第14図	8	土師器 鉢か	口縁部片	口 底	— —	高 —	—	粗砂/褐色/良好	口縁部はヨコナデ。内外面の口縁部下はヘラナデ。
第14図	9	土師器 甕	口縁部1/8	口 底	18.7 —	高 —	—	細砂・粗砂/褐色/良好	口縁部は外反。内外面に幅広いヘラミガキ。
第14図	10	土師器 甕	体部～底部片	口 底	— —	高 —	—	細砂・粗砂/褐色/良好	内面は板状工具によるナデ。外面はヘラケズリ。内面調整は丁寧。

遺物観察表

採回 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第14回	11	土師器 壺か甕	底部	口 底	— 3.7	高 —	細砂/にぶい黄橙/良好	内面はハケ目。外面は縦位ヘラナデ。底部外面は中央が窪み、蛇の目高台状をなす。
第14回	12	土師器 壺	体部一部、底部 完	口 底	— 5.0	高 —	細砂・粗砂/にぶい黄橙/良好	内面は丁寧なヘラズリで単位が不明瞭。外面は粘土紐の継ぎ目に粘土をなでつけている。このなでつけは下位層面部に顕著である。体部外面下端から底部外面はヘラズリ。断面形状は四角形で先端部は細くなっている。もう一方の端部は広がる。全体が反っているが、使用時の状況が不明。
第14回	13	鉄製品 不明	ほぼ完形か	縦 横	2.1 1.2	厚 重	0.3 7.0	

3号塚6建物出土遺物

採回 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第15回	1	土師器 壺か甕	体部下位～底部 片	口 底	— 6.1	高 —	細砂・粗砂/にぶい橙/良好	内外面はヘラズリ。	
第15回	2	土製品 棒状土錘	完形	短 長	2.1 2.3	高 —	2.5 —	乾燥時が焼成時の亀裂が認められる。孔内に棒状痕が認められ、棒状の物に粘土を丸めて成形する。	重さ9g

4号塚6建物出土遺物

採回 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考		
第16回	1	土師器 杯	口縁部3/4欠	口 底	12.3 —	高 —	4.9 —	細砂・粗砂/橙/良好	口縁部は外傾して開く。底部内面付近から口縁部外面はヨコナデ。口縁部外面中位に浅い円縁1条出る。底部外面はほぼ一方向のヘラズリ。	
第16回	2	土師器 杯	口縁部片	口 底	— —	高 —	— —	細砂微量/にぶい橙/良好	口縁部はヨコナデ。胎土は緻密。	
第16回	3	土師器 杯	口縁部片	口 底	— —	高 —	— —	粗砂微量/灰褐/良好	口縁部はヨコナデ。胎土に赤色粒含む。	
第16回	4	土師器 壺	底部片	口 底	— 4.8	高 —	— —	粗砂/灰/良好	外面はヘラズリ。内面と円孔内面はナデ。円孔直径は3.0cm。	
第16回	5	土師器 壺	底部片	口 底	— 3.7	高 —	— —	細砂・粗砂/黄褐/良好	内外面の器表は厚膜。底部に焼成前の円孔。円孔の直径は2.5cm。	
第16回	6	土製品 棒状土錘	完形	短 長	2.7 3.0	高 —	2.2 —	細砂少量/橙/良好	棒状物に粘土を付けて団子状に成形。芯を抜く際に動かした痕が端部に残る。	重さ15g

19号土坑出土遺物

採回 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第18回	1	土師器 高杯か	台部	口 底	— 9.0	高 —	— —	細砂・粗砂少量/橙/良好	柱部ナデの後、底部ヨコナデ。外面は幅広いのヘラミガキを開閉を掛けて施す。

1号井戸出土遺物

採回 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考		
第24回	1	土器 皿	口縁部片	口 底	— —	高 —	— —	黒色鉱物、赤色粒含む/にぶい橙	口縁部下位で外反し、口縁部は僅かに内湾。	
第24回	2	土器 信烙	口縁部から底部 片	口 底	— —	高 —	4.9 —	黒色鉱物、赤色粒含む/黒褐	断面中央は黒褐色。器表付近はにぶい橙色。器表は黒褐色。内面中央浅い沈線1条出る。口縁部上面は幅広く僅かに窪む。外面下位から底部外面の器表は縮輪状。	江戸時代

2号井戸出土遺物

採回 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第24回	1	土師器 盃	口縁部片	口 底	7.2 —	高 —	— —	細砂少量/明赤褐/良好	口縁部はヨコナデで、口縁部端部のヨコナデは強い。

1号溝出土遺物

採回 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考		
第27回	1	土器 信烙	底部1/2	口 底	— (16.0)	高 —	— —	黒色鉱物、赤色粒含む/にぶい橙	器表は灰黄色。平底。外面の器表は縮輪状。	江戸時代か
第27回	2	土器 すり鉢	体部片	口 底	— —	高 —	— —	細砂微量含む/褐灰	断面は黒色。器表付近は灰黄褐色。内面は5本一単位のすり目を交差するように施す。	16～17世紀 3溝と同一 個体の可能性あり

2号溝出土遺物

採回 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考		
第27回	1	土器 皿	1/6	口 底	(10.5) (6.4)	高 —	3.3 —	黒色鉱物含む/橙	器壁は厚く、口縁部は直線的に開く。底部外面回転糸切り。残存が少なく底部内面のナデや外面の圧痕は不明。	江戸時代

採回 PL.No.	No.	種 類 器 種	出上位置 残 存 率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考	
第27回	2	土器 皿	口縁部から底部 1/6	口(11.2) 底(6.8)	高 2.1	黒色鉱物含む/に ぶい橙	外面の器表は橙色。器壁は厚く、口縁部は広く開く。底部 内面にナデ。底部外面は回転糸切り後圧痕。	江戸時代
第27回 PL.17	3	土器 皿	口縁部1/4、底部 1/3	口(11.6) 底(7.9)	高 3.1	黒色鉱物、赤色粒 含む/にぶい橙	器壁はやや厚く、内外面のロクロ目は目立たない。底部内 面にナデ。底部外面は回転糸切り後浅い圧痕。底部外面側 縁へラケズリか。	江戸時代
第27回 PL.17	4	土器 皿	体部～底部1/2	口一 底4.4	高 一	黒色鉱物含む/浅 黄橙	底部内面回転のロクロ目は顕著。底部内面は強いナデ。底 部外面は回転糸切りであるが、圧痕が深く、回転方向不明。	中世
第27回 PL.17	5	砥石	ほぼ完形	長(7.4) 幅3.5	厚 3.2 重 56.0	砥沢石	表面と左右両側面に比較的平坦で滑らかな面が認められ砥 面と判断した。	
第27回 PL.17	6	砥石	不明	長(12.5) 幅(14.8)	厚 (2.2) 重 400.0	緑色片岩	最下部が残存し上部は欠損する。	

3号溝出土遺物

採回 PL.No.	No.	種 類 器 種	出上位置 残 存 率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考	
第27回	1	土器 烙筒	口縁部から底部 片	口一 底一	高 6.0	黒色鉱物含む/黒 褐色	断面中央は黒褐色。器表付近はにぶい黄褐色。器表は黒褐 色。内面中央幅広く深い凹線1条認め。口縁端部上面は幅 広く僅かに窪む。外面下位から底部外面の器表は輪軸状。	16世紀～17 世紀か
第27回	2	土器 すり鉢	体部片	口一 底一	高 一	細砂微量含む/灰 黄褐色	断面は黒色。器表付近は灰黄褐色。内面は5本以上を一 単位としたすり目。	16～17世紀 1溝と同一 個体の可能 性あり
第27回	3	龍泉窯系青 磁 碗	体部片	口一 底一	高 一	夾雑物含まない/ 灰オリーブ	外面に鎮連片文。内外面に青磁釉。	13世紀
第27回	4	土師器 壺	底部片	口一 底5.4	高 一	細砂少量/にぶい 橙/良好	内面はヘラナデ。底部内面から円孔内面はヘラケズリ。外 面はナデ。円孔直径1.5cm。	
第27回 PL.17	5	鉄貨 元重通寶か	1/2	縦 2.340 横(1.475)	厚 1.5 重 1.2		劣化が激しく、銭様が明瞭ではない。上に「元」、右に龍長 の文字(「豊」か)がやや見える。面の形は深く、輪は明瞭。 背も劣化が見られるが、輪、郭は判断ができる。	
第27回 PL.17	6	鉄製品 刀子	一部	縦 1.2 横(2.2)	厚 0.2 重 2.1		葉の一部、刀身の一部が残存。全体がさびで覆われる。	
第27回 PL.17	7	鉄製品 釘	脚部欠損	縦 2.7 横0.8	厚 0.3 重 1.8		頭が厚くさびで覆われている。破損部から四角形の断面形 状が確認できる。	

4号溝出土遺物

採回 PL.No.	No.	種 類 器 種	出上位置 残 存 率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考	
第28回	1	土器 皿	口縁部1/2 底部1/2	口一 底(5.2)	高 一	黒色鉱物、赤色粒 含む/にぶい黄橙	一部黄灰色。内面はロクロ目顕著。底部内面はナデ。底部 外面は右回転糸切り後に圧痕。	中世

5号溝出土遺物

採回 PL.No.	No.	種 類 器 種	出上位置 残 存 率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考	
第28回 PL.17	1	土器 皿	口縁部1/2、底部 完	口(10.8) 底5.1	高 3.6 ～ 4.2	黒色鉱物含む/浅 黄橙	歪む。内面のロクロ目顕著。底部内面はナデ。底部外面は 回転糸切りの後圧痕。	中世
第28回	2	土師器 壺	口縁部片	口一 底一	高 一	細砂・粗砂少量/ にぶい黄橙/良好	口縁部はヨコナデ。頸部外面にヘラケズリ時の工具による 擦れ痕認められる。	

16号溝出土遺物

採回 PL.No.	No.	種 類 器 種	出上位置 残 存 率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考	
第30回	1	須恵器 壺	口縁部片か	口一 底一	高 一	細砂少量/黄灰/還元 炎	外面の器表は黒色。内外面はヨコナデか。ロクロを使用した ヨコナデ。	

19号溝出土遺物

採回 PL.No.	No.	種 類 器 種	出上位置 残 存 率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考	
第31回 PL.17	1	瀬戸・美濃 陶器 天目碗	1/3	口(11.2) 底(4.4)	高 6.3	鉱物類含む/灰黄	口縁部はやや長く、端部は外反。内面から体部下位に鉄釉。 軸は茶色で黒色が帯目となる。頸胎部は回転盤削りて削り 出し高台。高台内の削りは浅い。	大業4か

18号溝出土遺物

採回 PL.No.	No.	種 類 器 種	出上位置 残 存 率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考	
第32回	1	須恵器 杯	口縁部1/8	口10.8 底一	高 一	細砂/黄灰/還元炎	口縁部は外湾し、端部は肥厚。	
第32回	2	灰釉陶器 碗か皿	底部片	口一 底一	高 一	細砂微量/灰白/良 好	底部外面側の器表は割離。高台は欠損。	東遺産

遺物観察表

採回 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第32回 PL-17	3	須臾器 歯か	体部片	口 底	— —	高 —	細砂・粗砂微量/ 黄灰/還元炭	外面はロクロ目立ち、上部にかき目。		
第32回 PL-17	4	土器 皿	口縁部/2、底 部完	口 底	(12.1) 5.1	高 —	3.8 —	黒色鉱物含む/浅 黄橙	体部外面下位と内面のロクロ目顕著。底部内面は一方の やや強いナデ。底部外面は回転系切りの後圧痕。	中世
6号土坑出土遺物										
採回 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第45回 PL-17	1	砥石	1/2	長 幅	(5.9) (3.5)	厚 重	(2.5) 61.8	砥石	表裏面と左右両側面に砥面が認められる。表面には線条痕 が比較的多く認められる。	
27号土坑出土遺物										
採回 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第45回 PL-17	1	土製品 球状土鏝	1/4	短 長	— —	高 —	— —	細砂微量/にぶ 橙/良好	棒状芯に粘土を貼り付けるように成形。表面はナデ。	
28号土坑出土遺物										
採回 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第45回 PL-17	1	土師器 杯	口縁部～底部 1/6	口 底	11.8 —	高 —	— —	細砂少量/橙/良好	口縁部はヨコナデ。口縁端部内面は緩い段差状を呈する。 外面口縁部下段縁に窪む。底部外面はヘラケズリ。	
第45回 PL-17	2	土器 皿	体部下位から底 部	口 底	— 4.5	高 —	— —	黒色鉱物含む/浅 黄橙	内外面のロクロ目顕著。底部内面は一方のナデ。底部右 回転系切りに後圧痕。	中世
36号土坑出土遺物										
採回 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第45回 PL-17	1	鉄製品 釘	完形	縦 横	2.85 0.53	厚 重	0.45 1.1	— —	頭が折られた釘。縦方向の劣化の割れが生じている。角釘。	
40号土坑出土遺物										
採回 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第45回 PL-17	1	土器 皿	口縁部から底部 片	口 底	— —	高 —	— —	黒色鉱物含む/黒	体部は僅かに外反。底部回転系切り無調整。	
第45回 PL-17	2	土製品 土鏝	一部欠	短 長	— 0.6	長 —	— —	細砂微量/橙/良好	芯径0.25cm、最大径0.6cmの棒状小型鏝。	
41号土坑出土遺物										
採回 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第45回 PL-17	1	土器 皿	口縁部/8、底 部1/3	口 底	(10.7) (5.2)	高 —	3.7 —	黒色鉱物、赤色粘 含む/にぶい橙	内面はにぶい黄橙色。内面のロクロ目顕著。底部内面にナ デ。底部回転系切りに後圧痕か。	中世
48号土坑出土遺物										
採回 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第45回 PL-17	1	土製品 球状土鏝	破片	短 長	— —	高 —	— —	細砂微量/橙/良好	棒状芯に粘土を貼り付けるように成形。表面はナデ。	
56号土坑出土遺物										
採回 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第45回 PL-17	1	土師器 歯	口縁部/4	口 底	8.4 —	高 —	— —	細砂少量/橙/良好	口縁部は頸部から立ち上がり気味に開くが、上半は僅かに 内湾気味となる。内外面にヘラミガキ。	
64号土坑出土遺物										
採回 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第45回 PL-17	1	土器 皿	口縁部片	口 底	— —	高 —	— —	黒色鉱物含む/に ぶい黄橙	口縁部はやや内湾。	中世か
第45回 PL-17	2	土師器 土鏝	完形	短 長	0.46 0.6	長 —	2.7 —	細砂微量/黄橙/良 好	棒状芯に粘土を貼り付けるように成形。表面はナデ。	重さ1g
68号土坑出土遺物										
採回 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第45回 PL-17	1	鉄製品 不明	端部欠損か	縦 横	5.46 1.36	厚 重	1.0 11.5	— —	棒状の鉄製品。両端部が欠損しているか、一方の端部は潰 れているような形をしている。全体に劣化によるひびが広 がる。詳細は不明。	

76号土坑出土遺物

検出 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第45図	1	土師器 甕	口縁部計	口 底	— —	高 —	細砂少量/灰/還元 炎	口縁部外面下部は小さく下方に突き出る。内面に自然釉薄くかかる。
第45図	2	土師器 高杯	杯部1/4	口 底	— —	高 —	細砂・粗砂/にぶ い/橙/良好	杯部縁線は縦位ヘラケズリで作出する。体部内外面はヘラナデ。

77号土坑出土遺物

検出 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第45図 PL.17	1	土器 皿	体部1/2、底部 完	口 底	— 4.4	高 —	黒色鉱物含む/浅 黄橙	外面のロクロ目顕著。底部内面は一方のナデ。底部外面右回転系切り後に圧痕。	中世

82号土坑出土遺物

検出 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第45図 PL.17	1	土製品 土師	1/2	短 長	9.7 9.9	長 —	細砂微量/橙/良好	棒状芯に粘土を貼り付けるように成形。表面はナデ。

103号土坑出土遺物

検出 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第45図	1	土器 皿	口縁部1/4	口 底	(4.0) —	高 —	黒色鉱物含む/ にぶい/黄橙	高は低く、ロクロ目は目立たない。	江戸時代
第45図	2	土器 皿	口縁部1/6	口 底	(11.7) —	高 —	黒色鉱物、赤色粒 含む/にぶい/橙	内面下半のロクロ目顕著。内面は底部と体部の境不明瞭。	江戸時代
第45図	3	土器 烙	底部片	口 底	— —	高 —	黒色鉱物少量含む /にぶい/黄橙	底部外面からの断面円錐形の穿孔痕2箇所、内面からの断面円錐形の穿孔痕1箇所残存。いずれも未完通。	江戸時代か
第45図	4	須恵器 模範か	体部片	口 底	— —	高 —	細砂/灰/還元炎	体部に蓋をするように接合。接合部内面はナデ。外面は力半目の後一側ナデ。	

106号土坑出土遺物

検出 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第45図	1	須恵器 甕	体部片	口 底	— —	高 —	細砂少量/断面に にぶい/黄、器表灰/ 還元炎	外面は吹き目。内面は当て貝痕。

107号土坑出土遺物

検出 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第45図 PL.17	1	土製品 球状土師	1/3	短 長	— —	長 2.5	細砂微量/にぶい 黄橙/良好	棒状芯に粘土を貼り付けるように成形。表面はナデ。

55号土坑出土遺物

検出 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第46図	1	土器 皿	口縁部から底部 片	口 底	— —	高 3.1	黒色鉱物、赤色粒 含む/にぶい/橙	ロクロ目は目立たない。底部回転系切り無調整か。	江戸時代
第46図	2	土器 皿	底部1/4	口 底	(6.0) —	高 —	黒色鉱物含む/ にぶい/橙	底部内面にナデ。底部外面右回転系切り後圧痕か。	江戸時代か
第46図	3	土器 皿	底部1/4	口 底	(6.0) —	高 —	黒色鉱物、赤色粒 含む/にぶい/橙	底部内面にナデ。底部外面右回転系切り後圧痕か。	江戸時代か
第46図 PL.18	4	砥石	2/3	長 幅	(9.9) (5.0)	厚 重	3.4 174.3	砥石	表裏面と左右両側面に砥面が認められる。各砥面には断面V字形の鋭角痕が比較的多く認められる。
第46図 PL.18	5	板碑	1/2	長 幅	(39.0) (19.6)	厚 重	3.2 3556.0	緑色片岩	一尊種子板碑の下半部。主尊は欠損して不明。種子と葉形形り連座の一部が残る。中央連座下に「建武三年」その下に十月十三日と紀年路を記す。紀年路の左右に線刻で華瓶を刻む。線刻等は比較的鮮明で、摩耗は少ない。線刻に工具差はない。
第46図 PL.18	6	石臼	4/5	長 幅	(25.5) (25.1)	厚 重	14.0 12700.0	粗粒輝石安山岩	表面のすり合わせ面には前からであり挽き目の痕跡は認められない。軸孔は内部に段差が認められ両面穿孔と考えられる。底面の軸孔周辺から孔内部にかけては棒状工具痕が明瞭に認められ加え痕と考えられる。
第47図 PL.18	7	石臼(上)	1/3	長 幅	(19.4) (29.5)	厚 重	(14.0) 7950.0	二ッ岳石	底面のすり合わせ面には挽き目の痕跡が認められない。供給孔の一部が認められる。
第47図 PL.18	8	石臼(上)	1/6	長 幅	(16.0) (13.1)	厚 重	10.3 2056.0	粗粒輝石安山岩	底面のすり合わせ面には挽き目の痕跡がわずかに認められる。供給孔は中央付近で段隠しになっており両面穿孔と考えられる。

遺物観察表

44号ピット出土遺物

検出 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第55図 PL.18	1	土器 皿	体部下位以下	口 底	— 5.2	高— —	黒色鉱物含む/浅 黄橙	内面のロクロ目顯著。底部内面は一方のやや強いナデ。 底部外面は右回転糸切りの後、内底ナデ時の押圧により糸 切り痕不鮮明となる。	中世

54号ピット出土遺物

検出 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第55図	1	土製品 球状土鏝	1/3	短— 長—	— —	長— —	細砂微量/橙/良好	棒状芯に粘土を貼り付けるように成形。表面はナデ。	

62号ピット出土遺物

検出 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第55図 PL.18	1	砥石	完形	長 幅	11.8 4.1	厚 重	5.9 230.7	砥石	表面は全体的に非常に滑らかであり細かい稜角が多数認め られ主要な砥面と考えられる。表面は研ぎ減りにより著 しい山形を呈する。裏面と左右側面には滑らかな部分と 細かい稜角が散在し極微かな砥面と見られる。

78号ピット出土遺物

検出 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第55図 PL.18	1	残貨		縦 横	2.8 3.8	厚 重	0.3 —	3枚が癒着した状態で出土していた。3枚はややずれて重 なる。	
第55図 PL.18	1-1	残貨 元豊通寶	完形	縦 横	2.462 2.510	厚 重	0.146 3.2	背側が癒着した状態で出土した。面の形は深く、字、輪、 郭が明瞭。背側が癒着部分は劣化が激しい。	
第55図 PL.18	1-2	残貨 元豊通寶	完形	縦 横	2.407 2.356	厚 重	0.130 2.7	面、背ともに形が深く、字、輪、郭が明瞭。背二。面が皇 宋通寶と面同士で癒着し、背は元豊通寶と背側で癒着する。	
第55図 PL.18	1-3	残貨 皇宋通寶	完形	縦 横	2.348 2.366	厚 重	0.115 2.0	面が癒着し、背側が見える状態で出土する。面、背とも に形が深く、字、輪、郭が明瞭。	
第55図 PL.18	2	残貨 熙寧元寶	完形	縦 横	2.377 2.385	厚 重	0.154 2.7	面の形が深く、輪、郭は明瞭。背の形はやや浅く、一部輪、 郭が不明瞭な部分がある。	

98号ピット出土遺物

検出 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第55図	1	土製品 球状土鏝	1/4	短— 長—	— —	長 2.3	—	細砂微量/橙/良好	棒状芯に粘土を貼り付けるように成形。表面はナデ。

包含層出土遺物

検出 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考		
第57図 PL.18	1	縄文土器 深鉢	胴部破片					半截竹管状具の集合沈積文を横位に施す。内外面共にやや 風化。中量の円磨度の進んだ乳白色珪質岩片と少量の石英・ 赤色岩片を含むやや緻密な胎土。	諸磯c式	
第57図 PL.18	2	縄文土器 深鉢	胴部破片					LR縄文を横位・多段に施文。中量の円磨度の進んだ長石・ 乳白色珪質岩片と少量の雲母・角閃石・石英の粗・細砂を 含む。	諸磯c式併 行	
第57図 PL.18	3	磨製石鏝	完形	長 幅	3.4 1.3	厚 重	0.3 1.1	珪質頁岩	表裏面の中央には広く研磨面が認められる。表裏面の縁辺 部には全体的に割離痕が認められる。表面の上部には一部 に研磨が及ぶ割離面が認められるが、全体的に割離面の方が 研磨面よりも新規に形成されている。	
第57図	4	土師器 杯	1/8	口 底	12.6 —	高—	—	細砂微量/ぶい 黄橙/良好	器表は部分的に黒色。内面屈曲部付近から口縁部外面はヨ コナデ。底部外面はハラケズリ。	
第57図	5	土師器 小皿	口縁部1/8	口 底	7.8 —	高—	—	細砂微量/灰/還元 炎	口縁部は外周。外面口縁部下は段が付く。	
第57図 PL.18	6	土器 皿	1/3	口 底	(12.6) (8.0)	高 2.6	—	黒色鉱物含む/ぶ い/橙	器環はやや厚く、内外面のロクロ目は目立たない。高は低 く、口縁部は開く。底部内面にナデ。底部外面は回転糸切 り痕は内面のナデ時に漬れる。	江戸時代
第57図	7	土器 始塔	1/3	口 底	— —	高 5.1	—	黒色鉱物、赤色粒 少量含む/暗灰、 黄灰	断面中央は暗灰色。器表付近はぶい黄橙色。器表は暗灰 色から黄灰色。内面中に低い段。口縁部正面は幅広く、 僅かに窪む。外面上位に複合段、下位以下の器表は縮輪状。	江戸時代

第3表 土坑計測値一覧表

土坑 番号	区	位置(グリッド)	形状	規模(m)			長軸方位	重複			備考(出土遺物ほか)
				長径	短径	深さ		土坑	ピット	溝	
1	2	X=24,323 ~ 24,326 Y=-31,220 ~ -31,221	長方形	3.22	(0.91)	0.29	N-21°-E		1(7)・4(7)・ 31(9)		かわらけ?
2	2	X=24,325 ~ 24,327 Y=-31,220 ~ -31,221	長方形	1.67	0.78	0.15	N-12°-E	17(?)	2(7)・3(7)		
3	2	X=24,323 ~ 24,327 Y=-31,222 ~ -31,223	長方形	3.98	0.59	0.19	N-22°-E	5(古)・6(古)			
5	2	X=24,323 ~ 24,324 Y=-31,222 ~ -31,223	略円形	1.12	(0.93)	0.12	N-22°-E	3(新)・6(7)	35(7)		
6	2	X=24,322 ~ 24,324 Y=-31,223 ~ -31,(1)X24	長方形	(1.77)	0.87	0.06	N-28°-E	3(新)・5(7)	32(新)・36(7)		
7	2	X=24,325 ~ 24,326 Y=-31,223 ~ -31,(1)X24	長方形	0.91	(0.72)	0.14	N-71°-W	8(7)			
8	2	X=24,323 ~ 24,325 Y=-31,224 ~ -31,225	方形	(1.78)	0.48	0.05	N-22°-E	7(7)	5(7)		
9	2	X=24,321 ~ 24,323 Y=-31,224 ~ -31,226	長方形	2.44	0.70	0.12	N-28°-E		5(1個立)・ 10(7)・42(7)・ 43(7)		ピットは土坑調査中の確認
10	2	X=24,326 ~ 24,327 Y=-31,227	長方形	(0.69)	0.53	0.06	N-40°-E				短軸側の立上がり不明
11	2	X=24,325 ~ 24,326 Y=-31,226 ~ -31,228	長方形	1.66	0.72	0.11	N-68°-W		8(1個立)		
12	2	X=24,320 ~ 24,321 Y=-31,224 ~ -31,225	長方形	1.32	0.58	0.12	N-40°-E	18(古)	41(7)		ピットは土坑調査中の確認 かわらけ1
13	2	X=24,321 ~ 24,323 Y=-31,221 ~ -31,223	長方形	1.98	0.86	0.12	N-27°-E	14(古)・ 57(古)	14(7)・16(7)		ピットは土坑調査中の確認 焼物1
14	2	X=24,320 ~ 24,322 Y=-31,221 ~ -31,223	略方形	1.61	1.58	0.22	N-28°-E	13(新)・ 15(7)・57(古)・ 58(7)	37(7)・38(7)・ 68(7)		ピットは土坑調査中の確認 かわらけ1
15	2	X=24,319 ~ 24,320 Y=-31,222 ~ -31,223	長方形	(1.25)	0.91	0.20	N-22°-E	14(7)・57(7)	40(7) 65(7)・68(7)		土坑・ピットの新旧不明
16	2	X=24,316 ~ 24,318 Y=-31,223 ~ -31,225	長方形	1.89	0.92	0.15	N-32°-E		20(7)・24(7)・ 25(7)・28(7)・ 46(7)		ピットは土坑調査中の確認
17	2	X=24,320 ~ 24,321 Y=-31,224 ~ -31,225	長方形	0.74	(0.31)	0.08	N-69°-W	2(7)			
18	2	X=24,320 ~ 24,321 Y=-31,224 ~ -31,225	長方形	1.76	0.82	0.08	N-29°-E	12(新)	59(7)		
19	1	X=24,311 ~ 24,313 Y=-31,236 ~ -31,237	長方形	1.96	1.06	0.28	N-35°-W	56(7)			古墳後期土坑?
21	1	X=24,314 ~ 24,316 Y=-31,242 ~ -31,244	長方形	(1.71)	0.93	0.16	N-22°-E	22(古)			
22	1	X=24,314 ~ 24,316 Y=-31,244 ~ -31,245	長方形	(2.68)	0.95	0.19	N-31°-E	21(新)			
24	1	X=24,314 ~ 24,316 Y=-31,247 ~ -31,248	長方形	2.30	0.91	0.37	N-29°-E	33(古)・35(古)			
25	1	X=24,315 Y=-31,240 ~ -31,241	略円形	1.10	0.42	0.20	N-71°-W		5(新)		
26	1	X=24,312 ~ 24,314 Y=-31,250 ~ -31,251	長方形	(1.54)	0.68	0.19	N-25°-E				古墳時代建物に重複
27	1	X=24,314 ~ 24,317 Y=-31,245 ~ -31,247	長方形	(2.89)	1.00	0.25	N-22°-E				
28	1	X=24,316 ~ 24,317 Y=-31,247 ~ -31,249	長方形	(1.82)	0.95	0.20	N-57°-W	29(新)			
29	1	X=24,314 ~ 24,318 Y=-31,246 ~ -31,248	長方形	(3.49)	0.76	0.25	N-23°-E	28(古)・30(古)・ 31(7)			
30	1	X=24,316 ~ 24,318 Y=-31,247 ~ -31,249	長方形	(1.46)	1.10	0.32	N-23°-E	29(新)・31(7)			
31	1	X=24,315 ~ 24,317 Y=-31,248 ~ -31,249	長方形	(0.94)	0.94	0.31	N-23°-E	29(新)・30(7)			
32	1	X=24,311 ~ 24,313 Y=-31,247 ~ -31,248	長方形	(1.93)	0.89	0.18	N-23°-E	34(7)・35(新)			古墳時代建物に重複
33	1	X=24,312 ~ 24,314 Y=-31,248 ~ -31,250	長方形	(2.82)	0.98	0.29	N-24°-E	24(7)・34(新)・ 35(新)			古墳時代建物に重複
34	1	X=24,311 ~ 24,313 Y=-31,248 ~ -31,249	長方形	(1.04)	0.60	0.21	N-22°-E	32(新)・33(古)・ 35(新)			古墳時代建物に重複

土坑計測値一覧表

土坑 番号	区	位置(グリッド)	形状	規模(m)			長軸方位	重複			備考(出土遺物ほか)
				長径	短径	深さ		土坑			
								ビット	溝		
35	1	X=24,312 ~ 24,314 Y=-31,286 ~ -31,289	略方形	(2.03)	1.82	0.14	N-67°-W	24(?)・32(古)・ 33(古)・34(古)			古墳時代建物に重複
36	1	X=24,316 ~ 24,318 Y=-31,249 ~ -31,251	長方形	(2.34)	1.14	0.18	N-24°-E				
37	1	X=24,316 ~ 24,319 Y=-31,250 ~ -31,252	長方形	(2.31)	1.39	0.16	N-24°-E	52(?)		6(新)	北壁側で土坑主軸が異なる。 土坑の切り合い?
38	1	X=24,313 ~ 24,315 Y=-31,249 ~ -31,251	長方形	(2.36)	0.99	0.18	N-31°-E	39(古)			
39	1	X=24,314 ~ 24,316 Y=-31,250 ~ -31,252	不整形	2.35	1.31	0.20	N-39°-E	38(新)・40(古)・ 41(?)			
40	1	X=24,315 ~ 24,316 Y=-31,252 ~ -31,253	長方形	(1.11)	(0.80)	0.12	N-34°-E	39(新)・41(?)・ 42(古)		6(新)	
41	1	X=24,313 ~ 24,315 Y=-31,251 ~ -31,253	長方形	(1.87)	1.35	0.20	N-30°-E	39(?)・40(?)	62(?)・106(?)		
42	1	X=24,314 ~ 24,317 Y=-31,252 ~ -31,254	長方形	2.76	0.97	0.15	N-29°-E	40(新)・54(?)		6(新)	
43	1	X=24,319 ~ 24,320 Y=-31,253 ~ -31,254	長方形	1.68	(0.45)	0.16	N-71°-W	44(?)・45(?)			
44	1	X=24,318 ~ 24,320 Y=-31,254 ~ -31,255	不整形	(1.26)	(0.82)	0.13	N-22°-E	43(?)・45(?)・ 46(?)		7(新)	
45	1	X=24,318 ~ 24,319 Y=-31,253 ~ -31,254	長方形	(1.28)	0.91	0.17	N-25°-E	43(?)・46(古)・ 47(新)			
46	1	X=24,317 ~ 24,319 Y=-31,253 ~ -31,255	長方形	(2.38)	0.91	0.23	N-30°-E	44(?)・45(新)・ 47(新)・48(?)			
47	1	X=24,317 ~ 24,318 Y=-31,253 ~ -31,254	不整形	(0.89)	0.75	0.16	N-27°-E	45(?)・46(?)・ 49(?)			
48	1	X=24,315 ~ 24,317 Y=-31,255 ~ -31,256	長方形	(1.51)	0.53	0.23	N-30°-E	46(?)・50(?)			
49	1	X=24,314 ~ 24,317 Y=-31,253 ~ -31,255	長方形	(3.30)	(1.20)	0.13	N-28°-E	47(?)・48(古)・ 50(古)			
50	1	X=24,314 ~ 24,317 Y=-31,254 ~ -31,256	長方形	(3.11)	(1.30)	0.18	N-30°-E	48(新)・49(新)・ 51(古)		7(新)	
51	1	X=24,314 ~ 24,315 Y=-31,255 ~ -31,256	長方形	(0.91)	0.73	0.11	N-23°-E	49(新)・50(新)			
52	1	X=24,318 ~ 24,319 Y=-31,252	長方形	(0.65)	(0.58)	0.11	N-17°-E	37(?)		6(新)	
53	1	X=24,310 ~ 24,311 Y=-31,245 ~ -31,248	不明	2.39	(0.34)	0.31	N-73°-W				古墳時代建物に重複
54	1	X=24,313 ~ 24,314 Y=-31,253 ~ -31,255	長方形	(0.81)	0.81	0.11	N-29°-E	42(?)			
55	1	X=24,311 ~ 24,313 Y=-31,233 ~ -31,234	不明	(1.35)	(1.09)	0.20	N-26°-E			2(古) 3(新)	板碑・石臼・焙烙・かわらけ
56	1	X=24,311 Y=-31,236 ~ -31,237	略円形	(1.05)	(0.85)	0.16	N-85°-E	19(?)			調査期は19~56、新旧不明
57	2	X=24,320 ~ 24,322 Y=-31,222 ~ -31,223	略円形	1.80	1.50	0.46	N-21°-E	13(新)・14(新)・ 15(?)	14(?)・16(新)・ 67(?)・68(?)		
58	2	X=24,320 ~ 24,321 Y=-31,221	不明	1.28	(0.35)	0.14	N-12°-W	14(新)			
59	1	X=24,319 ~ 24,321 Y=-31,256 ~ -31,258	長方形	(1.42)	1.36	0.20	N-25°-E	60(新)	105(?)		
60	1	X=24,318 ~ 24,321 Y=-31,257 ~ -31,259	長方形	(2.68)	1.05	0.15	N-25°-E	59(古)・64(?)	104(?)		
61	1	X=24,315 ~ 24,317 Y=-31,257 ~ -31,259	長方形	(2.28)	0.73	0.45	N-28°-E	62(新)			
62	1	X=24,316 ~ 24,317 Y=-31,258 ~ -31,259	長方形	1.11	0.83	0.07	N-60°-W	61(古)・63(古)			
63	1	X=24,316 ~ 24,318 Y=-31,258 ~ -31,259	長方形	(1.63)	(0.68)	0.21	N-25°-E	62(新)・64(古)・ 65(新)			
64	1	X=24,316 ~ 24,319 Y=-31,258 ~ -31,260	長方形	(2.89)	0.91	0.44	N-17°-E	60(?)・65(新)・ 71(新)・102(?)			
65	1	X=24,317 ~ 24,318 Y=-31,259 ~ -31,260	長方形	0.81	0.80	0.10	N-65°-W	64(古)・70(古)			
66	1	X=24,320 ~ 24,321 Y=-31,258 ~ -31,259	長方形	(0.78)	(0.46)	0.18	N-25°-E	67(古)・68(?)			
67	1	X=24,321 Y=-31,258 ~ -31,259	長方形	(0.30)	(0.57)	0.19	N-25°-E	66(新)・68(新)			

土坑 番号	区	位置(グリッド)	形状	規模(m)			長軸方位	重複			備考(出土遺物ほか)		
				長径	短径	深さ		土坑					
								ビット	溝				
68	1	X=24,319 ~ 24,321 Y=-31,258 ~ -31,260	略円形	1.64	(1.25)	0.35	N-23°-E	66(新)・67(新)・ 69(?)・104(新)					
69	1	X=24,318 ~ 24,320 Y=-31,259 ~ -31,260	長方形	(1.99)	(0.63)	0.28	N-21°-E	68(?)・70(古)・ 104(新)					
70	1	X=24,316 ~ 24,318 Y=-31,260 ~ -31,261	長方形	2.53	0.94	0.20	N-19°-E	65(新)・69(新)・ 71(新)・72(新)			72土坑より古い		
71	1	X=24,317 Y=-31,259 ~ -31,260	長方形	0.99	0.64	0.21	N-70°-E	64(古)・70(古)					
72	1	X=24,316 ~ 24,317 Y=-31,261 ~ -31,262	長方形	1.14	0.70	0.14	N-19°-E	70(古)			70土坑より新しい		
73	1	X=24,321 ~ 24,322 Y=-31,262 ~ -31,263	不整形	(1.32)	(1.00)	0.11	N-25°-E	74(新)					
74	1	X=24,319 ~ 24,321 Y=-31,261 ~ -31,263	長方形	(2.05)	(0.83)	0.26	N-33°-E	73(古)			11(新) 18(?)		
76	1	X=24,319 ~ 24,320 Y=-31,262 ~ -31,263	不整形	(0.83)	(0.82)	0.19	N-53°-W				11(?) 18(?)	焙烙1・かわらけ1	
77	1	X=24,318 ~ 24,320 Y=-31,263 ~ -31,265	長方形	2.34	0.94	0.21	N-24°-E				11(古) 18(古)		
78	1	X=24,317 ~ 24,318 Y=-31,265 ~ -31,266	長方形	(0.80)	(0.55)	0.18	N-19°-E				11(新)	焙烙1	
79	1	X=24,322 ~ 24,323 Y=-31,262 ~ -31,263	略円形	0.83	(0.27)	0.17	N-71°-W	80(古)					
80	1	X=24,321 ~ 24,323 Y=-31,263 ~ -31,264	長方形	(1.99)	0.93	0.20	N-28°-E	79(新)					
81	1	X=24,321 ~ 24,323 Y=-31,264 ~ -31,266	長方形	(1.79)	1.05	0.23	N-30°-E						
82	1	X=24,323 ~ 24,324 Y=-31,268 ~ -31,269	長方形	1.48	0.99	0.19	N-31°-E	105(古)・108 (古)					
83	1	X=24,322 ~ 24,323 Y=-31,268	略円形	0.82	0.73	0.12	N-30°-E	105(古)				覆土中に炭化物多量に含 む	
85	1	X=24,325 ~ 24,326 Y=-31,273 ~ -31,274	略円形	0.96	0.95	0.19	N-60°-W	86(古)・87(?)				他の遺構より新しい	
86	1	X=24,325 ~ 24,326 Y=-31,274 ~ -31,275	長方形	1.58	0.88	0.13	N-40°-W	85(新)	80(?)・81(新)				
87	1	X=24,325 ~ 24,326 Y=-31,273 ~ -31,274	長方形	0.76	(0.50)	0.14	N-71°-W	85(?)					
88	1	X=24,318 ~ 24,320 Y=-31,266 ~ -31,268	長方形	(1.56)	0.90	0.20	N-17°-E					18(古)	
89	1	X=24,325 ~ 24,326 Y=-31,283 ~ -31,284	長方形	1.94	(0.52)	0.12	N-26°-E					15(?) 16(新)	
90	1	X=24,324 ~ 24,326 Y=-31,282 ~ -31,284	長方形	(2.57)	(0.46)	0.16	N-29°-E					15(?) 16(新)	
91	4	X=24,351 ~ 24,353 Y=-31,291 ~ -31,293	長方形	(2.10)	0.70	0.17	N-42°-E						
93	4	X=24,350 Y=-31,290 ~ -31,291	長方形	(1.01)	(0.40)	0.19	N-62°-W					17(新)	
94	4	X=24,349 ~ 24,350 Y=-31,284 ~ -31,285	長方形	(1.52)	0.67	0.19	N-33°-E						
97	1	X=24,322 Y=-31,270 ~ -31,271	長方形	1.02	0.73	0.28	N-64°-W	95(古)・106(新)	122(?)			18(?)	95号土坑は1号火葬土坑
98	5	X=24,342 ~ 24,345 Y=-31,265 ~ -31,268	長方形	(3.31)	1.15	0.20	N-31°-E						かわらけ1
100	1	X=24,324 ~ 24,325 Y=-31,278 ~ -31,280	長方形	1.78	0.72	0.07	N-70°-W						
101	1	X=24,322 ~ 24,323 Y=-31,276 ~ -31,277	長方形	(1.40)	0.81	0.13	N-13°-E		76(新)・ 100(掘立?)				
102	1	X=24,315 ~ 24,316 Y=-31,259 ~ -31,260	長方形	(0.85)	0.98	0.44	N-17°-E	64(?)					
103	1	X=24,316 ~ 24,319 Y=-31,261 ~ -31,263	長方形	(2.73)	1.40	0.23	N-30°-E	104(?)					
104	1	X=24,318 ~ 24,321 Y=-31,259 ~ -31,262	長方形	(3.12)	1.09	0.31	N-30°-E	68(古)・69(古)・ 103(?)					
105	1	X=24,322 ~ 24,323 Y=-31,268 ~ -31,269	長方形	(1.44)	0.77	0.24	N-0°	82(新)・83(新)・ 108(古)				18(?)	
106	1	X=24,322 ~ 24,325 Y=-31,269 ~ -31,271	長方形	(3.45)	1.01	0.18	N-33°-E	97(古)・107(古)					かわらけ1

土坑計測値一覧表

土坑番号	区	位置(グリッド)	形状	規模(m)			長軸方位	重複			備考(出土遺物ほか)
				長径	短径	深さ		土坑	ビット	溝	
107	1	X=24,322・24,323 Y=-31,209・-31,270	長方形	(0.57)	0.50	0.12	N-25°-W	106(新)・108(?)			
108	1	X=24,322・24,323 Y=-31,208・-31,270	長方形	(1.29)	1.10	0.14	N-90°	82(新)・105(?)・107(?)			
109	7	X=24,313・24,314 Y=31,216・-31,217	長方形	(0.84)	0.75	0.15	N-56°-W		115(新)		
110	7	X=24,314・24,315 Y=-31,215・-31,216	長方形	(0.95)	0.89	0.17	N-20°-E			19(新)	
111	7	X=24,313・24,314 Y=-31,215	長方形	(1.15)	(0.43)	0.10	N-20°-E		116(新)	19(新)	
112	7	X=24,313・24,314 Y=-31,213	不整形	(0.73)	(0.65)	0.21	N-90°				
113	7	X=24,312・24,313 Y=-31,218	略円形	(0.77)	(0.46)	0.10	N-70°-W				
114	7	X=24,311・24,312 Y=-31,216・-31,217	長方形	1.22	(0.68)	0.66	N-71°-W				

第4表 ビット計測値一覧表

ビット番号	区	位置(グリッド)	形状	規模(m)			長軸方位	重複			備考(出土遺物ほか)
				長径	短径	深さ		土坑	ビット	溝	
1	2	X=24,326 Y=-31,220	略円形	0.43	0.33	0.33	N-25°-E	1(古)			
2	2	X=24,327 Y=-31,221	略円形	0.33	0.32	0.29	N-63°-W	2(新)			
3	2	X=24,325・24,326 Y=-31,221	略円形	0.42	0.38	0.36	N-78°-W	2(古)			
4	2	X=24,323 Y=-31,221	略円形	0.40	0.28	0.14	N-18°-E	1(?)			
5	2	X=24,323・24,324 Y=-31,225	略円形	0.58	0.41	0.72	N-5°-W	8(古)・9(古)			1号掘立柱建物柱穴
6	2	X=24,325・24,326 Y=-31,225・-31,226	不明	(0.43)	0.30	0.17	N-40°-E		7(新)		
7	2	X=24,325 Y=-31,225・-31,226	略円形	0.58	0.55	0.21	N-0°		6(古)		
8	2	X=24,324・24,325 Y=-31,227	略円形	0.50	0.49	0.50	N-15°-E	11(?)			1号掘立柱建物柱穴
9	2	X=24,321 Y=-31,226	略円形	0.40	0.40	0.36	N-0°				1号掘立柱建物柱穴
10	2	X=24,321・24,322 Y=-31,224・-31,225	略円形	0.40	0.35	0.19	N-25°-W	9(?)			
11	2	X=24,321 Y=-31,223・-31,224	略円形	0.46	0.45	0.31	N-67°-W				
12	2	X=24,320 Y=-31,224	略円形	0.47	0.28	0.31	N-34°-W		13(古)		1号掘立柱建物柱穴
13	2	X=24,320 Y=-31,224	略円形	0.42	0.31	0.20	N-90°		12(1号掘立柱建物,新)		
14	2	X=24,321・24,322 Y=-31,222・-31,223	略円形	0.50	0.48	0.49	N-65°-W	13(新)			
15	2	X=24,322 Y=-31,222	略円形	0.36	0.28	0.32	N-18°-E				
16	2	X=24,321・24,322 Y=-31,223	略円形	0.75	0.39	0.33	N-13°-E	13(?)・57(?)			
17	2	X=24,316・24,317 Y=-31,222・-31,223	不明	0.30	(0.19)	0.30	N-41°-W		18(新)・19(?)		
18	2	X=24,316・24,317 Y=-31,222・-31,223	不明	(0.48)	0.37	0.35	N-47°-E		17(古)・19(?)		
19	2	X=24,317 Y=-31,223	略円形	0.36	0.35	0.24	N-40°-W		17(?)・18(?)		
20	2	X=24,317・24,318 Y=-31,222	略円形	0.35	0.25	0.33	N-35°-E	16(新)			
21	2	X=24,317・24,318 Y=-31,223・-31,224	不明	(0.56)	0.44	0.47	N-16°-E		22(古)・23(古)		
22	2	X=24,317・24,318 Y=-31,224・-31,225	不明	(0.27)	(0.25)	0.27	N-30°-E		21(新)・23(新)		

ビット 番号	区	位置(グリッド)	形状	規模(m)			長軸方位	重複			備考(出土遺物ほか)
				長径	短径	深さ		土坑	ビット	溝	
23	2	X=24,317・24,318 Y=-31,224・-31,225	不明	0.30	0.28	0.34	N-15°-E		21(新)・22(古)		
24	2	X=24,316 Y=-31,224	略円形	0.29	0.27	0.19	N-66°-E	16(新)			
25	2	X=24,317 Y=-31,223	略円形	0.21	0.15	0.24	N-15°-E	16(新)			
26	2	X=24,316 Y=-31,224・-31,225	略円形	0.46	0.31	0.32	N-74°-E				
27	2	X=24,316・24,317 Y=-31,224	不明	0.59	0.36	0.43	N-90°		28(新)		
28	2	X=24,316・24,317 Y=-31,224・-31,225	略円形	0.48	0.38	0.34	N-83°-E	16(新)	27(古)		
29	2	X=24,317 Y=-31,223	略円形	0.30	0.26	0.34	N-50°-W				
30	2	X=24,317 Y=-31,223	略円形	0.25	0.22	0.19	N-38°-E				
31	2	X=24,325 Y=-31,220・-31,221	略円形	0.32	0.25	0.35	N-46°-W	1(新)			
32	2	X=24,322・24,323 Y=-31,222・-31,223	不明	0.67	0.60	0.40	N-67°-W	6(古)			1号掘立柱建物柱穴
33	2	X=24,321・24,322 Y=-31,221	略円形	(0.47)	0.42	0.44	N-46°-W		63(古)1号掘立柱建物		
34	2	X=24,322 Y=-31,221・-31,222	略円形	0.51	0.41	0.20	N-34°-E		63(?)1号掘立柱建物		
35	2	X=24,323 Y=-31,222・-31,223	略円形	0.37	0.28	0.50	N-61°-W	5(古)			
36	2	X=24,323 Y=-31,223	略円形	0.32	0.25	0.13	N-85°-E	6(古)			
37	2	X=24,320 Y=-31,221・-31,222	略円形	(0.39)	0.30	0.24	N-18°-E	14(古)	38(新)		
38	2	X=24,320 Y=-31,222	略円形	0.61	0.42	0.22	N-64°-W	14(古)	37(古)		
39	2	X=24,319・24,320 Y=-31,222	不明	0.46	0.33	0.15	N-85°-E		64(古)		
40	2	X=24,319 Y=-31,223	略円形	0.25	0.23	0.31	N-0°	15(新)			
41	2	X=24,320 Y=-31,224・-31,225	略円形	0.36	0.21	0.28	N-48°-E	12(新)			
42	2	X=24,322 Y=-31,225	略円形	0.42	0.35	0.39	N-13°-E	9(新)			
43	2	X=24,322・24,323 Y=-31,225	略円形	0.29	0.26	0.41	N-13°-E	9(新)			
44	2	X=24,316 Y=-31,222・-31,223	略円形	0.46	0.43	0.26	N-70°-E		45(古)		
45	2	X=24,316・24,317 Y=-31,221	略円形	(0.41)	0.37	0.32	N-20°-E		44(新)		
46	2	X=24,316・24,317 Y=-31,224	略円形	0.21	0.17	0.18	N-46°-W	16(新)			
47	1	X=24,311 Y=-31,233・-31,234	略円形	0.37	0.32	0.37	N-32°-E			2(新)	
48	1	X=24,310 Y=-31,233	略円形	0.30	0.27	0.24	N-20°-E				
49	1	X=24,308 Y=-31,235	略円形	0.54	0.53	0.59	N-36°-E				
50	1	X=24,307・24,308 Y=-31,235・-31,236	略円形	0.38	0.37	0.31	N-73°-W				
51	1	X=24,310・24,311 Y=-31,236・-31,237	略方形	0.76	0.49	0.48	N-44°-E	56(古)		3(新)	
52	1	X=24,310 Y=-31,235・-31,236	略円形	0.62	0.59	0.54	N-30°-E			3(新)	
53	1	X=24,310・24,311 Y=-31,235・-31,236	略円形	0.34	0.26	0.24	N-34°-E			3(新)	
54	1	X=24,311 Y=-31,240	略円形	0.70	0.53	0.64	N-42°-W				
55	1	X=24,312 Y=-31,241・-31,242	略円形	0.40	0.32	0.18	N-28°-E			5(?)	

ビット計測値一覧表

ビット 番号	区	位置(グリッド)	形状	規模(m)			長軸方位	重複			備考(出土遺物ほか)
				長径	短径	深さ		土坑	ビット	溝	
56	1	X=24,311 Y=-31,242	略円形	0.31	0.29	0.38	N-90°			5(?)	
57	1	X=24,311 Y=-31,242・-31,243	略円形	0.35	0.26	0.29	N-0°			4(新)	
58	1	X=24,311・24,312 Y=-31,242	略円形	0.23	0.23	0.34	N-0°			4(新)	
59		X=24,319・24,320 Y=-31,225	略円形	0.37	(0.30)	0.49	N-71°-W	18(古)			
60	1	X=24,309 Y=-31,234	略方形	0.30	0.30	0.31	N-0°			1(古)	
61	1	X=24,315 Y=-31,248	略円形	0.51	0.43	0.30	N-18°-E				
62	1	X=24,313 Y=-31,251・-31,252	略円形	0.52	0.34	0.38	N-28°-E	41(古)			
63	2	X=24,321・24,322 Y=-31,251	略円形	0.32	0.28	0.45	N-47°-W		33(新)・34(新)		1号掘立柱建物柱穴
64	2	X=24,319・24,320 Y=-31,221・-31,222	不明	0.88	0.48	0.60	N-48°-W		39(新)		
65	2	X=24,319 Y=-31,222・-31,223	略円形	0.35	0.28	0.35	N-67°-W	15(?)			1号掘立柱建物柱穴
66	2	X=24,320 Y=-31,223	略円形	0.42	0.34	0.32	N-59°-E	15(?)	68(古)		
67	2	X=24,320・24,321 Y=-31,223	略円形	0.30	0.26	0.43	N-20°-E	57(新)			
68	2	X=24,320 Y=-31,223	略円形	0.56	0.41	0.29	N-0°	14(古)・57(古)	66(新)		
69	2	X=24,321 Y=-31,228	略円形	0.25	(0.19)	0.29	N-17°-E				
70	1	X=24,308・24,309 Y=-31,239・-31,240	略円形	0.33	(0.29)	0.42	N-70°-W				
71	1	X=24,310 Y=-31,240	略円形	0.33	0.28	0.26	N-68°-E				
72	1	X=24,325 Y=-31,271	略円形	0.36	0.26	0.18	N-68°-E		99(2号掘立柱 建物,古)		
73	1	X=24,323・24,324 Y=-31,272・-31,273	略円形	0.44	0.42	0.58	N-20°-E			14(古)・ 18(古)	
74	1	X=24,322 Y=-31,275	略円形	0.42	0.36	0.43	N-55°-W				2号掘立柱建物柱穴
75	1	X=24,322・24,323 Y=-31,275	略円形	0.44	0.38	0.44	N-30°-E				
76	1	X=24,322・24,323 Y=-31,276・-31,277	略円形	0.38	0.32	0.49	N-76°-W	101(古)	100(2号掘立柱 建物,古)		
77	1	X=24,324 Y=-31,275・-31,276	略円形	0.23	0.23	0.18	N-0°				
78	1	X=24,325 Y=-31,275・-31,276	略円形	0.38	(0.33)	0.44	N-57°-W		79(2号掘立柱 建物,新)		
79	1	X=24,325 Y=-31,275・-31,276	略円形	0.37	0.24	0.38	N-57°-W		78(古)	18(?)	2号掘立柱建物柱穴
80	1	X=24,325 Y=-31,275	略円形	0.37	0.32	0.58	N-26°-E	86(古)		18(?)	
81	1	X=24,326 Y=-31,275	略円形	0.38	0.32	0.37	N-30°-E	86(古)			
82	1	X=24,325 Y=-31,277	略円形	0.33	0.31	0.12	N-60°-W				
83	1	X=24,324 Y=-31,277	略円形	0.35	0.32	0.16	N-0°				
84	1	X=24,322・24,323 Y=-31,277・-31,278	略円形	0.54	0.51	0.49	N-30°-W				
85	1	X=24,326 Y=-31,277・-31,278	略円形	0.41	0.35	0.49	N-14°-W			18(?)	2号掘立柱建物柱穴
86	1	X=24,326・24,327 Y=-31,278・-31,279	略円形	0.34	0.32	0.46	N-64°-W				
87	1	X=24,327 Y=-31,279	略円形	0.41	0.32	0.49	N-43°-W			18(新)	
88	1	X=24,327 Y=-31,279	略円形	0.25	0.23	0.47	N-65°-W		89(古)・90(古)	18(新)	2号掘立柱建物柱穴

ビット 番号	区	位置(グリッド)	形状	規模(m)			長軸方位	重複			備考(出土遺物ほか)
				長径	短径	深さ		土坑	ビット	溝	
89	1	X=24,327 Y=-31,279	不明	0.40	0.34	0.29	N-24°-E		88(新)・90(古)	18(新)	
90	1	X=24,327 Y=-31,279・-31,280	略円形	0.79	0.74	0.26	N-20°-E		88(新)・89(新)	18(新)	
91	1	X=24,328 Y=-31,280	略円形	0.42	0.31	0.45	N-30°-E			18(新)	
93	1	X=24,326・24,327 Y=-31,281	略円形	0.32	0.30	0.38	N-54°-W				
94	1	X=24,326・24,327 Y=-31,281	略円形	0.33	0.28	0.30	N-34°-E				
95	1	X=24,327 Y=-31,282・-31,283	略円形	0.40	0.28	0.37	N-64°-E			16(新)	
96	1	X=24,325 Y=-31,282	略円形	0.30	0.27	0.23	N-69°-W				
97	1	X=24,324・24,325 Y=-31,280・-31,281	略方形	0.98	0.49	0.26	N-48°-E				2号掘立柱建物柱穴
98	1	X=24,321 Y=-31,268	略円形	0.26	0.20	0.25	N-0°			18(新)	
99	1	X=24,324・24,325 Y=-31,271	略円形	0.36	0.32	0.29	N-69°-E		72(新)		2号掘立柱建物柱穴
100	1	X=24,323 Y=-31,277	略円形	0.56	0.45	0.42	N-15°-E	101(古)	76(新)		2号掘立柱建物柱穴
101	1	X=24,321 Y=-31,273	略円形	0.47	0.47	0.16	N-0°				2号掘立柱建物柱穴
102	1	X=24,327 Y=-31,277・-31,278	不明	0.48	0.22	0.13	N-69°-W		103(新)	18(新)	
103	1	X=24,327 Y=-31,277	略円形	0.33	0.20	0.22	N-47°-W		102(古)	18(新)	
104	1	X=24,318・24,319 Y=-31,257・-31,258	略円形	0.35	0.34	0.35	N-72°-W	60(新)			
105	1	X=24,319・24,320 Y=-31,257	略円形	0.53	0.34	0.26	N-32°-W		59(新)		
106	1	X=24,314 Y=-31,252	略円形	0.28	0.23	0.17	N-26°-E		41(新)		
107	1	X=24,315 Y=-31,244	略円形	0.23	0.16	0.18	N-13°-W				
108	1	X=24,314 Y=-31,244	略円形	0.32	0.25	0.44	N-22°-E				
109	1	X=24,313・24,314 Y=-31,244	略円形	0.26	0.25	0.39	N-74°-E				
111	7	X=24,312 Y=-31,215	不明	0.26	0.19	0.28	N-72°-W				
112	7	X=24,315 Y=-31,217	略円形	0.43	0.41	0.45	N-7°-W				
113	7	X=24,314 Y=-31,217	略円形	0.35	0.31	0.37	N-20°-W		114(?)		
114	7	X=24,314 Y=-31,217・-31,218	略円形	0.54	0.44	0.30	N-82°-E		113(?)		
115	7	X=24,314 Y=-31,216・-31,217	略方形	0.30	0.30	0.39	N-33°-E	109(古)			
116	7	X=24,313 Y=-31,215	不明	0.30	0.12	0.18	N-70°-W	111(古)			
117	7	X=24,312 Y=-31,217・-31,218	不明	0.48	0.47	0.37	N-4°-W				
118	7	X=24,328 Y=-31,281	略円形	0.24	0.16	0.42	N-68°-E			18(新)	
119	1	X=24,328 Y=-31,281	不明	0.35	0.22	0.20	N-73°-W				2号掘立柱建物柱穴
120	7	X=24,313 Y=-31,213・-31,214	不明	0.37	0.28	0.25	N-39°-E				
121	7	X=24,314 Y=-31,214	略円形	0.38	0.26	0.16	N-90°				
122	1	X=24,322 Y=-31,270	略円形	0.27	0.23	0.20	N-28°-E	95(古)・97(古)		18(?)	95号土坑は1号火葬土坑

写真図版



1 道跡遠景(矢印が道跡)



2 鞍掛地区に残る旧利根川流路



3 下体泊用水(逆川合流地点、旧赤堀村)



4 屋敷林が残る集落遠景(旧野辺村)



5 長良神社(下三林地区)



1 1区全景、西から



2 1区全景(東側)



3 1区全景(中央)



4 1区全景(西側)



5 2区(調査前の状況)



6 2区全景、南西から



1 3区(調査前の状況)



2 3区全景、南東から



3 4区(調査前の状況)



4 4区全景、南東から



5 5区(調査前の状況)



6 5区全景、北西から



7 7区(調査前の状況)、南東から



8 埋設物の確認作業



1 1号竪穴建物土層堆積状態、北から



2 同・カマド全景、南から



3 同・遺物出土状態(1)、南東から



4 同・遺物出土状態(2)、北から



5 2号竪穴建物全景、南西から



1 2号壁穴建物土層堆積状態、北から



2 同・遺物出土状態(1)、南西から



3 同・遺物出土状態(2)、南西から



4 同・掘り方全景、南西から



5 4号壁穴建物全景、南東から



1 4号竪穴建物土層堆積状態、南西から



2 同・遺物出土状態



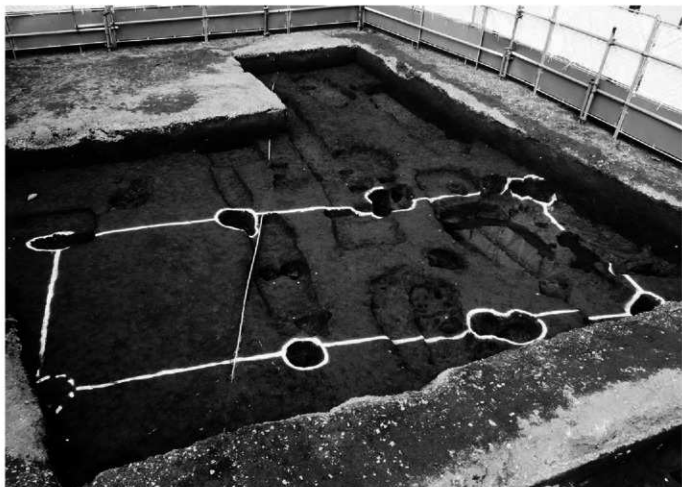
3 1号平地建物(中央)と19号土坑(右上)、南西から



4 1号平地建物全景、北西から



5 19号土坑全景、北東から



1 1号掘立柱建物全景、南から



2 2号掘立柱建物全景、西から



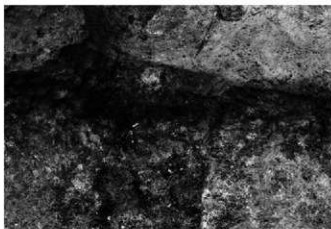
1 1号火葬土坑全景、東から



2 同・掘り方全景、東から



3 同・骨片等出土状態、東から



4 同・通風孔赤化状態、東から



5 1号井戸全景、南から



6 2号井戸全景、南から



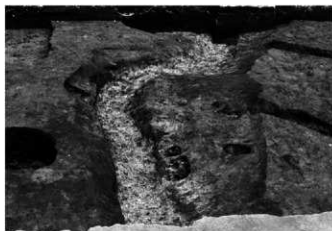
7 3号井戸全景、東から



8 4号井戸土層堆積状態、南から



1 1～3号溝全景、南から



2 4・5号溝全景、南から



3 15号溝全景、東から



4 18号溝全景、東から



5 21・22号土坑全景、東から



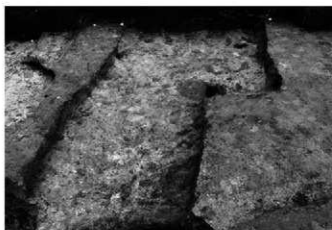
6 24号土坑全景、東から



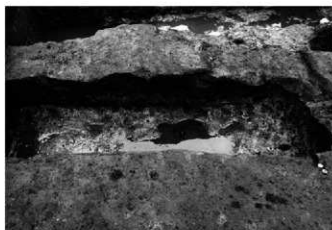
1 27号土坑全景、東から



2 49号土坑全景、北から



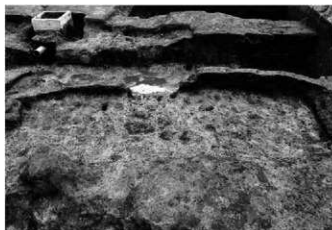
3 60号土坑全景、南から



4 61号土坑全景、東から



5 64号土坑全景、南西から



6 70号土坑全景、西から



7 62号土坑全景、北から



8 72号土坑全景、北から



1 1区中央西の土坑群、南から



2 1区中央東の土坑群(1)、南から



2 1区中央東の土坑群(2)、南から



3 1区中央東の土坑群(3)、南西から



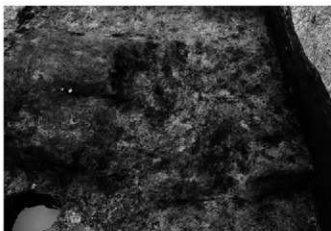
1 55号土坑遺物出土状態(1)、東から



2 同・遺物出土状態(2)、西から



3 同・遺物出土状態(3)、東から



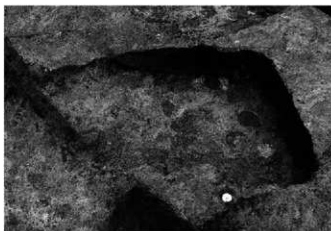
4 同・完掘状態、東から



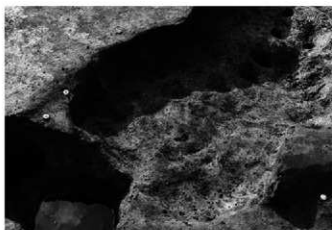
5 同・土層堆積状態、南から



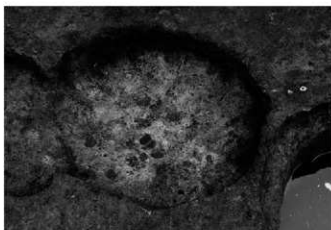
1 105号土坑全景、東から



2 107号土坑全景、西から



3 56号土坑全景、東から



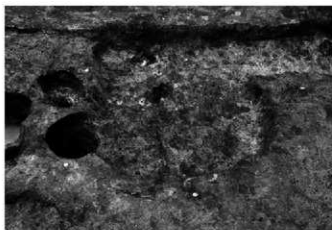
4 85号土坑全景、南から



5 14号土坑全景、南から



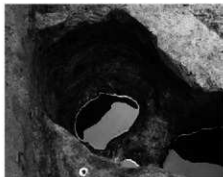
6 35号土坑全景、南から



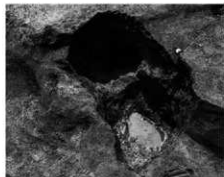
7 5号土坑全景、東から



8 68号土坑全景、北から



1 33号ピット全景、北から



2 51号ピット全景、北から



3 52号ピット全景、北から



4 63号ピット全景、北から



5 51号ピット土層堆積状態、南から



6 52号ピット土層堆積状態、南から



7 1区調査風景、東から



8 2区調査風景、南から



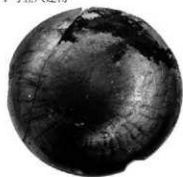
9 館林市教育長視察、南西から



10 館林特別支援学校教職員視察、西から

PL.16

1号竖穴建物



1



2



3



4



5



6



7



8



9



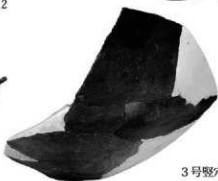
10



11



2号整穴建物



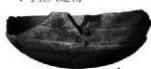
2号溝



3号整穴建物



4号整穴建物



3号溝



5号溝



18号溝



19号溝



19号土坑



6号土坑



28号土坑



36号土坑



40号土坑



64号土坑



77号土坑



82号土坑

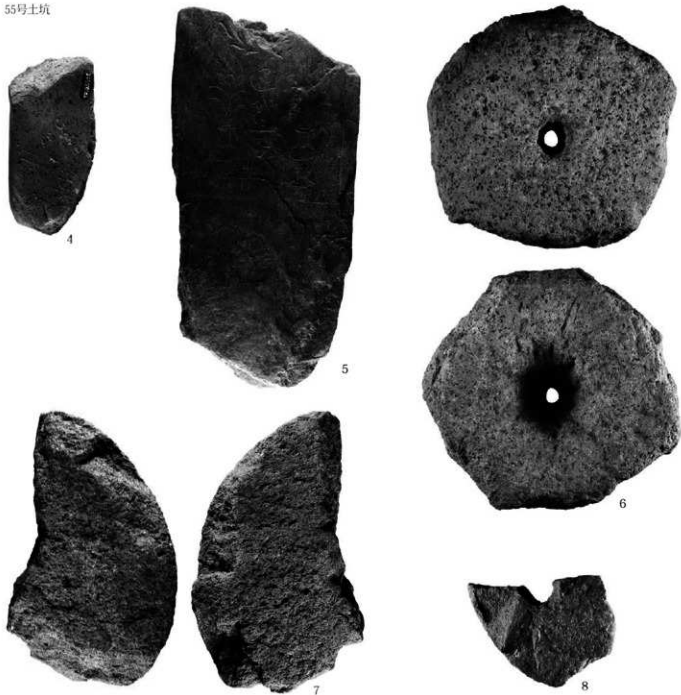


107号土坑



PL.18

55号土坑



44号ビット



62号ビット



78号ビット



包含層



報告書抄録

書名ふりがな	だいいせき
書名	台遺跡
副書名	県立学校施設整備事業(館林特別支援学校改築整備)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	654
編著者名	岩崎泰一、藤巻幸男、間庭 稔、飯森康弘
編集機関	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行機関	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	20190320
作成法人ID	21005
郵便番号	377-8555
電話番号	0279-52-2511
住所	群馬県渋川市北橘町下箱田 784-2
遺跡名ふりがな	だいいせき
遺跡名	台遺跡
所在地ふりがな	ぐんまけんたてばやししかみまぼやしまち
遺跡所在地	群馬県館林市上三林町
市町村コード	10207
遺跡番号	0089
北緯(世界測地系)	361307.2
東経(世界測地系)	1401051.7
調査期間	20160701-20160731
調査面積	998㎡
調査原因	学校施設改築
種別	集落
主な時代	古墳、中・近世
遺跡概要	集落 - 古墳 - 竪穴建物 5 + 平地建物 1 + 土坑 1 / 集落 - 中近世 - 掘立柱建物 2 + 火葬土坑 1 + 溝 19 + 井戸 4 + 土坑 108 + ビット 122
特記事項	
要約	本報告書は、平成28年度館林特別支援学校改築事業に伴い発掘された台遺跡の発掘調査報告である。本遺跡からは古墳時代後期の竪穴建物および平地建物が発見されたほか、16世紀から17世紀にかけての集落の一部が確認されている。

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第654集

台 遺 跡

県立学校施設整備事業(館林特別支援学校改築整備)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成31(2019)年3月13日 印刷

平成31(2019)年3月20日 発行

編集・発行/公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒377-8555 群馬県渋川市北碓町下箱田1784番地2

電話(0279)52-2511(代表)

ホームページアドレス <http://www.gunma-ibun.org/>

印刷/ジャーナル印刷株式会社

